

宗 像
^{うら}浦^{たに}谷古墳群 I

(宗像市大字朝町所在古墳群の調査)

宗像市文化財調査報告書第5集

1982

宗像市教育委員会

浦谷古墳群 I

(宗像市大字朝町所在古墳群の調査)

宗像市文化財調査報告書第5集



C-5号墳出土香葉

1982

宗像市教育委員会

序 文

昭和56年4月1日に市制を施行した宗像市は北九州市、福岡市のベッドタウンとして近年とみに人口が増加しており、大型の宅地開発や公共事業が目白押しの状況であります。このような開発事業は文化財の破壊・消滅と一体をなしています。

浦谷古墳群は人口増加に伴う児童、生徒の急増に対処すべく、市の事業として計画された市立小、中学校の予定地内に所在する遺跡であります。

昭和56年1月から翌56年10月までの前後2次にわたる発掘調査において数多くの貴重な歴史資料が千数百年の静かな眠りから眼を覚まし私達の前に現われました。これらの貴重な資料を私達は古代人の霊を慰めるためにも、充分な保存と管理を行い、現代の歴史教育の中に生かし、さらには古代から未来への遺産として子供達に継承してゆかねばなりません。

緊急発掘調査は新たな歴史資料を提供する場であるとともに、文化財の破壊・消滅を認めることでもあります。現在、最も問題となっている文化財の保護について私達は真剣に取り組むべき時期にきています。

なお、発掘調査及び整理にあたって県教育委員会の酒井仁夫主任技師と伊崎俊秋技師には指導・協力を受けるとともに、発掘参加者及び整理にあたられた方々、さらには地元各方面からの応援・協力に対して、ここに厚く御礼申し上げます。

昭和57年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

例 言

1. 本書は宗像市立中学校の子定地内所在古墳群のうち、破壊される予定の古墳群について事前調査を行った結果報告である。
2. 発掘調査は昭和55年度、56年度に国庫補助を受けて宗像市教育委員会が実施し、福岡県教育委員会の応援を得た。
3. 発掘調査にあたって福岡県教育委員会の酒井仁夫主任技師の応援を得た。
4. 遺物整理については九州歴史資料館の横田義章氏と福岡県教育委員会の岩瀬正信氏、酒井氏、伊崎俊秋氏の指導・援助を得た。
5. 本書使用の実測図は遺構図を原が、遺物を原、伊崎氏、板橋睦世氏があつた。
6. C-4号墳石室内人骨の実測および取り上げは九州大学医学部の田中良之助手にお願いした。
7. 本書の製図は酒井氏、伊崎氏、宮内智久君、清家直子君があつた。
8. 本書の写真は現地は主に原が、遺物はC-5号墳の鉄器を九州歴史資料館の石丸洋氏が、その他は酒井氏があつた。
9. 本書の執筆はⅦを九州大学医学部教授の永井昌文氏に依頼し、その他は原が担当した。
10. 本書の編集は原が担当した。

本文目次

目次

目次

I はじめに	1
II 位置と環境	3
III 調査の概要	6
IV 古墳群の調査	8
1. A群の調査	8
2. B群の調査	10
3. C群の調査	11
4. D群の調査	23
5. E群の調査	38
6. F群の調査	40
7. G群の調査	45
8. H群の調査	49
9. I群の調査	54
V その他の遺構	55
1. 埴土壇	55
2. 窯 跡	56
3. 火葬墓	56
4. 鉄滓埋納遺構	58
5. ベンガラ埋納遺構	59
VI まとめ	116
VII 浦谷古墳群出土人骨について	125

挿 図 目 次

	本文頁
Fig 1 周辺遺跡分布図	4
Fig 2 古墳の調査区分の名称	5
Fig 3 B群より百田古墳群・木山竊跡群をのぞむ	7
Fig 4 A群地形測量図	8
Fig 5 A群小石室実測図	9
Fig 6 B群地形測量図	10
Fig 7 C群地形測量図	折り込み
Fig 8 C-5号墳土器出土分布図	16
Fig 9 C-5号墳鉄器出土状況	19
Fig 10 C群1号・2号小石室実測図	21
Fig 11 C群3号・4号小石室実測図	22
Fig 12 D-1号墳調査前	23
Fig 13 D・E群地形測量図	折り込み
Fig 14 D-1・D-2・D-3号墳の全景	26
Fig 15 D-7～D-10号墳調査前	31
Fig 16 雪の浦谷古墳群	37
Fig 17 E-3号墳石室前面	39
Fig 18 F・I群地形測量図	41
Fig 19 F群調査前	44
Fig 20 G群地形測量図	折り込み
Fig 21 F・G・H群全景	48
Fig 22 H群地形測量図	50
Fig 23 I-1号墳石室閉塞図	54
Fig 24 焼土坑実測図	56
Fig 25 竊跡実測図	57
Fig 26 火葬墓実測図	58
Fig 27 火葬墓土器実測図	58
Fig 28 鉄滓埋納遺構実測図	59
Fig 29 鉄滓埋納遺構土器実測図	59
Fig 30 ベンガラ埋納遺構実測図	60

	目次
Fig 31 A-3号墳石室実測図	61
Fig 32 B-1号墳石室実測図	62
Fig 33 C-1号墳石室実測図	63
Fig 34 C-2号墳石室実測図	64
Fig 35 C-3号墳石室実測図	65
Fig 36 C-4号墳石室実測図	66
Fig 37 C-5号墳石室実測図	67
Fig 38 C-6号墳石室実測図	68
Fig 39 D-1号墳石室実測図	69
Fig 40 D-2号墳石室実測図	70
Fig 41 D-3号墳石室実測図	71
Fig 42 D-4・D-5号墳石室実測図	72
Fig 43 D-6号墳石室実測図	73
Fig 44 D-7号墳石室実測図	74
Fig 45 D-8号墳石室実測図	75
Fig 46 D-9号墳石室実測図	76
Fig 47 D-10・D-11号墳石室実測図	77
Fig 48 D-12号墳石室実測図	78
Fig 49 E-2号墳石室実測図	79
Fig 50 E-3号墳石室実測図	80
Fig 51 F-1号墳石室実測図	81
Fig 52 F-2号墳石室実測図	82
Fig 53 F-3号墳石室実測図	83
Fig 54 F-4号墳石室実測図	84
Fig 55 G-1号墳石室実測図	85
Fig 56 G-2号墳石室実測図	86
Fig 57 G-3号墳石室実測図	87
Fig 58 G-4号墳石室実測図	88
Fig 59 G-5号墳石室実測図	89
Fig 60 H-1・H-5・H-7号墳石室実測図	90
Fig 61 H-2号墳石室実測図	91
Fig 62 H-3号墳石室実測図	92
Fig 63 H-4号墳石室実測図	93

Fig 64	H-6号墳石室実測図	94
Fig 65	I-1号墳石室実測図	95
Fig 66	土器実測図①	96
Fig 67	土器実測図②	97
Fig 68	土器実測図③	98
Fig 69	土器実測図④	99
Fig 70	土器実測図⑤	100
Fig 71	土器実測図⑥	101
Fig 72	土器実測図⑦	102
Fig 73	土器実測図⑧	103
Fig 74	鉄器実測図①	104
Fig 75	鉄器実測図②	105
Fig 76	鉄器実測図③	106
Fig 77	鉄器実測図④	107
Fig 78	鉄器実測図⑤	108
Fig 79	鉄器実測図⑥	109
Fig 80	鉄器実測図⑦	110
Fig 81	石室平面形の比較	118
Fig 82	石室側壁の比較	119
Fig 83	I期古墳群の形成と過程	123
Fig 84	C-4号墳人骨実測図	127

図 版 目 次

PL 1	浦谷古墳群遠景（北から）
PL 2	A・B群 ①A群全景（南から） ②A-3号墳石室（東から） ③B-1号墳全景（西から）
PL 3	C群全景（南から）
PL 4	C群 ①C-1号墳石室全景（西から） ②C-1号墳天井石除去後（西から） ③C-2号墳石室全景（西から）

- ④C-4号墳石室全景（西から）
- PL 5 C群 ①C-5号墳石室全景（西から）
②C-5号墳鉄器出土状況
③C-4号墳人骨出土状況
④C-6号墳石室全景（西から）
- PL 6 D群 ①調査前全景（東から）
②調査後全景（南から）
- PL 7 D群 ①D-1号墳石室全景（南から）
②D-1号墳土器出土状況
③D-2号墳石室全景（南から）
④D-2号墳遺物出土状況
⑤D-3号墳石室全景（南から）
⑥D-7号墳石室全景（南から）
- PL 8 D群 ①D-8号墳調査前全景（南から）
②D-8号墳石室近景
③D-9号墳石室全景（南から）
④D-10号墳石室近景
⑤D-12号墳石室全景（東から）
⑥D-12号墳遺物出土状況
- PL 9 E群 ①調査前全景（西から）
②調査後全景（西から）
- PL 10 E群 ①E-2号墳石室全景（北から）
②E-2号墳天井石除去後（北から）
③E-3号墳石室全景（西から）
- PL 11 F群 ①F群全景（南から）
②F-2号墳石室全景（南から）
③F-4号墳石室全景（南から）
- PL 12 G群調査後全景（南から）
- PL 13 G群 ①G-2号墳石室全景（南から）
②G-3号墳石室全景（南から）
③G-4号墳石室全景（南から）
④G-5号墳石室全景（南から）
- PL 14 H群調査後全景（南から）

- PL 15 H群 ①H-2号墳石室全景(南から)
②H-3号墳石室全景(南から)
③H-4号墳石室全景(東から)
④H-6号墳石室全景(南から)
- PL 16 I群 ①I-1号墳石室全景(西から)
②I-1号墳鉄器出土状況
③I-1号墳墳裾ベンガラ埋納遺構
- PL 17 その他の遺構 ①竈跡土層断面(南から)
②竈跡全景
③H-4号墳墓道内鉄滓埋納遺構
④火葬墓全景
- PL 18 出土遺物Ⅰ(C-2・C-3・C-5号墳)
- PL 19 出土遺物Ⅱ(C-5・D-2号墳)
- PL 20 出土遺物Ⅲ(D-2・D-3・D-6・D-7・D-10・D-11号墳)
- PL 21 出土遺物Ⅳ(D-12・F-1・F-4・G-2・H-2・H-3号墳)
- PL 22 出土遺物Ⅴ(H-4・H-6号墳・鉄滓埋納遺構・火葬墓)
- PL 23 出土遺物Ⅵ(C-5号墳)
- PL 24 C-4号墳出土人骨 ①正面観
②左側面観
③上面観
④右側上下歯列の異常咬耗

付 表 目 次

Tab 1	石室計測表	111
Tab 2	土器計測表	112~115
Tab 3	石室構造の比較	122

付 図 目 次

Fig ① 浦谷古墳群地形測量図

I はじめに

昭和55年、市立中学校の建設予定地に、大字朝町字浦谷、絵田の丘陵が他の候補地とともにのぼり、調査の結果古墳の所在することがわかり、事業にあたって、当遺跡が計画ではほとんど破壊されることになった。現状保存の努力がなされたが、最終的に調査を実施することとなり、国庫補助事業として昭和56年1月9日から3月31日まで、さらに2次調査として同年7月23日から10月31日まで実施した。2次調査後整理作業に入った。字浦谷をとって浦谷古墳群と名称する。調査は次のとおり行った。

浦谷古墳群

古 墳 47基（未調査5基、消滅3基）

小石室 5基

窯 跡 1基

火葬墓 1基

調査にあたっては、県教育委員会をはじめ地元各方面から指導、協力をいただき、ここに感謝の意を表したい。

調査関係者

1次調査 昭和56年1月9日～3月31日

総括 宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

社会教育課長 牧 田 俊 次

社会教育係長 竹 村 功

庶務会計

北 野 隆 文

調査担当

原 俊 一

調査補助員 信 行 千 尋

調査指導 福岡県教育委員会 文化課調査係長 宮小路賀宏

主任技師 酒 井 仁 夫

2次調査 昭和56年7月23日～10月31日

総括 宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

社会教育課長 牧 田 俊 次

社会教育係長 竹 村 功

庶務会計

北 野 隆 文

調査担当

原 俊 一

調査補助員 赤 司 善 彦

調査指導 福岡県教育委員会 文化課調査係長 宮小路賀宏

1次・2次調査協力者

堀川亮二、片山重明、小口幸雄、荒川理、宮内智久、副島康司、石本晶義、楠野亮司、大橋陸司、横大路俊明、福田裕上、星野政彦、上村孝直、古賀茂雄、下川日出生、其畑真二、斉藤勝明、白上義実、花田豊春、宮田寿喜、西川慎一郎、梶谷清助、石田正年、船越鉄也、清家庄市、田辺和男、香月勇、泰美知子、石田嘉代子、桜井順美、梶谷友代、倉田千代香、花田沢江、梶谷久子、井上八重子、花田ミサオ、梶谷タツエ、森タケ子、井上二三夫、田中ヨシエ、法泉順子、富岡左知子、小田裕美、橋本伸子、中村美江、坪田みどり、鶴敦子、寺本千恵子、小野由美子。

なお調査中には県教育委員会文化課石山勲氏、北九州市教育文化事業団の前田義人、宇野慎敏氏の指導と協力を得た。また現場では平和農産株式会社、三和測航設計株式会社、丸磯建設株式会社の方々に協力をいただき、円滑な発掘調査を進めることが出来た。

II 位置と環境

宗像市の東南部に隣接する宮田町の²²⁵⁹標山（標高 296m）を水源とする荒堀川は、北西方向へ向けて開拓する谷地形を流れ、埴掛、荒堀集落の西側を通り、宮田町で朝町川と合流し、その流れは東郷において釣川に流れ込む。宗像盆地地形を東西に貫流する釣川は、宗像大社の所在する田島から北流して、玄界灘にそそぎこむ。

浦谷古墳群は荒堀川と朝町川にはさまれて、北西にのびる丘陵の東側に位置し、荒堀川に面している。古墳群の所在地は、荒堀川が形成した谷地形のもっともせげまるところであり、谷をはさんだ東側 100m には百田古墳群¹¹³、さらに東側には本山窯跡群がある。

古墳の分布は北東および東南にのびる小さな 4 本の尾根線上と南側斜面に 9 群をなしている。

宗像市内における本格的文化財調査は、1963年に東郷地区において土地区画整理事業に伴い、緊急調査されたのが最初である。その後三郎丸古墳群¹¹²、城ヶ谷古墳群¹¹⁴、稲元古墳群¹¹⁵、中松元古墳群¹¹⁶、石丸遺跡¹¹⁷、相原古墳群¹¹⁸、久戸古墳群¹¹⁹、百田古墳群¹²⁰、浦谷古墳群¹²¹、朝町町ノ坪遺跡¹²²、朝町山添遺跡¹²³、相原遺跡¹²⁴、半田古墳群¹²⁵、稲元窯跡群¹²⁶、長尾遺跡¹²⁷と次々に緊急調査が行なわれた。この間、現状保存がなされたのは東郷高塚を含む 3 基と城ヶ谷古墳群内の 14 基の計 17 基の古墳にすぎない。

以上の調査による文化財の破壊、消滅と併行して、緑豊かな宗像の自然景観も年ごとに形をかえ、急激な宅地化の波にのまれようとしている。

註

1. 1980・1981年調査。古墳25基、小石室9基、火葬墓1基の調査。鉄滓の副葬あり。
2. 福岡県史跡調査会 「東郷遺跡群」日本住宅公団 1967
3. 波多野院三 「三郎丸古墳群」『福岡教育大学紀要』21号 1971 古墳9基の調査。
4. 波多野院三 「城ヶ谷古墳群」クボタハウス株式会社、住友不動産株式会社 1977 竪穴系横口式石室、横穴式石室を内部主体とする30基の古墳の調査、2号墳より両刃の鋸を出土している。
5. a 西谷真治 「稲元古墳群第Ⅰ期調査報告」稲元古墳群調査団、1976。竪穴系横口式石室と横穴式石室を内部主体とする6基の古墳の調査。
b 藤井裕介 「稲元古墳群第Ⅱ期調査報告」稲元古墳群調査団 1976
6. 橋口達也 「石丸遺跡」宗像町文化財調査報告書第4集 1980 宗像町教育委員会
7. 酒井仁夫 「相原古墳群」宗像町文化財調査報告書第1集 宗像町教育委員会 1979
8. a 酒井仁夫 「久戸古墳群」宗像町文化財調査報告書第2集 宗像町教育委員会 1979
b 酒井仁夫 「久戸古墳群Ⅱ」宗像町文化財調査報告書第3集 宗像町教育委員会 1980
9. 弥生時代中期前半～中頃の円形住居跡と古墳時代後期の竪穴をもつ方形住居跡の調査。



Fig 1 周辺遺跡分布図 (2万5千分の1)

1. 桶元古墳群

2. 桶元遺跡群日焼原支群 3. 半田古墳群 4. クヒ古墳群 5. 城ヶ谷古墳群 6. 三郎丸古墳群 7. 長尾遺跡
8. 朝町町ノ坪遺跡 9. 百田古墳群 10. 浦谷古墳群 11. 朝町山添遺跡 12. 大徳古墳群 13. 木山遺跡群

10. 平安時代前半の溝遺構一帯の調査、石鍋、砥石、黒色土器、磁器、馬の骨が出土。
11. 横穴式石室を内部主体とする9基の古墳と小石室3基の調査。
12. 稲元系跡群日焼原支群。須恵器ⅢA型式を主体とする時期の竊跡4基の調査。奈良時代の上馬を出土する。（類似資料が田中幸夫氏により報告されている）
13. 横穴式石室を内部主体とする古墳群と弥生時代の住居跡、貯蔵穴群の調査。貯蔵穴群をかこんで陸橋を2ヶ所付設する環溝を検出している。

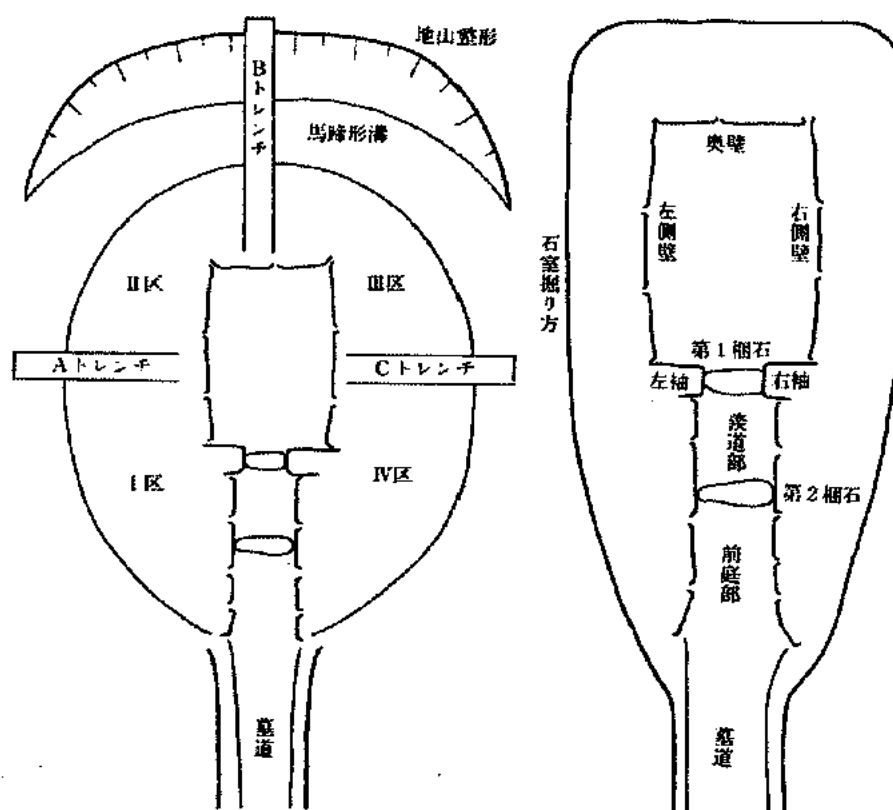


Fig 2 古墳の調査区分の名称

III 調査の概要

浦谷古墳群は、荒堀川をはさんで百田古墳群と向かいあっており、互いに密接な政治・経済的関係をもつものと考えられ、いくつかの点で類似する資料を得ている。

古墳群は、東ないし北へのびる大小4つの尾根線上と南側斜面に標高40～82mの間で分布している。各古墳の立地から9群に分けた。このうちD・E群とF～I群は同一尾根にのっている。

大字朝町字浦谷・給田に分布する遺跡は古墳47基、小石室5基にのぼる。このうち未調査古墳5基、調査前の消滅古墳3基を数え、残る39基の古墳について調査を実施した。以下群ごとに概要を述べる。

なお調査時において丘陵尾根線上をブルドーザーによって防火帯がつけられており、各支群の古墳は著しい破壊を受けていた。また破壊をまぬがれた古墳も墳丘がほとんど流失した状況であり、トレンチ調査によっても明確な墳丘を認めることはできなかった。このため本報告では墳丘に関する実測図は省略した。

A群 3基の古墳のうち2基消滅。他に小石室1基。3号墳墓道より鉄鏝1点出土。

B群 古墳1基。石室埋土中より鉄鏝19点出土。

C群 古墳6基、小石室4基。1・4号墳は処女墳である。遺物は各古墳から出土し、須恵器・土師器の土器と、武器・工具・馬具・装身具の鉄器があり、特にC-5号墳に集中している。

D群 古墳12基。丘陵南側斜面と1部尾根線上に位置し、ほぼ一線に並んで分布する。内部主体は横穴式石室で南へ開口する。遺物は各古墳から須恵器・土師器の土器と、武器・工具・装身具の鉄器を出土している。

E群 古墳3基、1基は消滅。E-2号墳は小型横穴式石室で本古墳群中最古の位置を占める。遺物はE-2号墳より鉄鏝2点、刀子1点を出土。

F群 古墳5基。このうち1基は未調査。標高80m付近の丘陵南側斜面に分布する横穴式石室を内部主体とする円墳である。遺物は須恵器・土師器の土器の他、鉄鏝4点、刀子1点を出土する。

G群 古墳5基。G-1号墳は距離的に離れているが、ここでは包括した。各古墳は丘陵南側斜面に分布する横穴式石室を内部主体とする円墳である。各古墳からは須恵器・土師器の土器と鉄刀3点と付属金具を出土する。

H群 古墳7基。丘陵南側のゆるい斜面に分布する横穴式石室を内部主体とする古墳である。H-1・2・7号墳は無袖。各古墳からは須恵器・土師器の土器と耳環を1点出土する。

I群 古墳5基。このうち4基は未調査。丘陵頂部に分布する竪穴系横口式石室を内部主

体とする円墳である。石室内より鉄鍔4点出土。

その他の遺構 D群の位置する丘陵南側斜面のD-8号墳とD-9号墳の間に竈跡が1基所在する。煙道部と焼成室上半のみの残存であり詳細は不明。またF群・1群の位置する丘陵尾根線上に1基の火葬墓が所在する。G群の丘陵尾根線上には土壇が4基あり、H・1群中には甕の中にそれぞれ鉄滓とベンガラを入れて埋められていた。



Fig 3 B群より百田古墳群、木山竈跡群を望む

IV 古墳群の調査

1. A群の調査

A群は浦谷古墳群中の北西部に、北へ延びる小丘陵上の標高40m~43mの尾根線上に立地している。調査前に2基が破壊されており、調査は古墳1基と小石室1基について実施した。消滅した古墳については、東側斜面の凹地に、6世紀末~7世紀後半の遺物が見られることから当該時期の築造が考えられる。

1) A-3号墳

A群中の最も南の丘陵尾根線上に位置する。調査時には丘陵は平坦化しており、墳丘を失って石室の石材が露出していた。

(1) 主体部 (Fig 31)

石室掘り方は長軸を東西に向けて長さ3m、最大巾2mに掘られ、西側には墓道が付設する。

石室は西に開口する無軸の竪穴系横口式石室である。天井石を失ってはいるが、石室の石積みの高さは、当初のものと考えられる。玄室平面形は奥壁側の巾が横口側の巾より広い羽子板状で、床面の敷石は小礫を使って奥壁側にやや大きめの石を敷いている。壁体の石積みは腰石を

縦に据え、腰石から上は石材を3段に横積みしている。その上に天井石を架構したものと考えられる。両側壁の断面形は内側に向けてやや傾斜している。壁体の石積みの間には小礫を利用し目張りをしている。粘土の使用は認められない。横口部の掘石は石材を横向きに置き、掘石の上面と床面との高さは16cmほどである。

閉塞部は掘石上に石室内側の面を揃えることなく、閉塞石を2段に横積みし、掘石上面と閉塞石の間は小礫をもって目張りしている。閉塞石の外側には1段目、2段目とも、各々1個の石材で控えている。

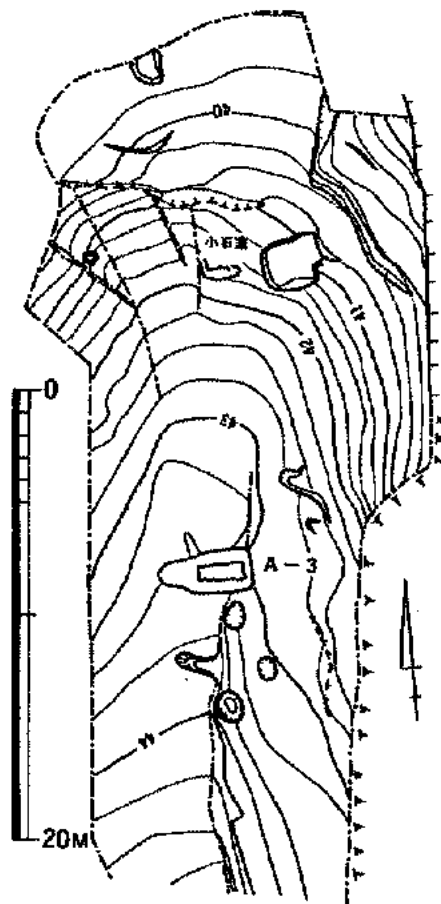


Fig 4 A群地形測量図 (1/300)

墓道は床面が横口部へ向けて傾斜している。墓道床面の高さは、横口部附近で細石の上面とほぼ同じ高さとなり、この間の空間は土を埋めて床面としたものと考えられる。現状の壁体に天井石が架橋するものであるが、床面と天井石下面との高さは推定90～100cmとなる。閉塞部の細石上面と閉塞石上端との高さは53cmである。閉塞石をはずして遺骸を埋葬するには不十分な空間と思われる。追葬の有無については不明である。玄室の大きさは中央で190×61cmである。

(2) 出土遺物 (Fig 74)

墓道床面から少し浮いた状態で鉄鏝が1点出土している。

武器 (Fig 74-1)

鉄鏝 篋被の一部と茎部を欠いているが片丸造の細根鏝である。身は平面形が三角形に近く長さ2cm、巾1.1cmを測る。篋被の断面形は長方形である。現存長10.9cm。

2) 小石室 (Fig 5)

3号墳の北側12mの距離に長軸を東西に向けており等高線と平行している。

石室は腰石のみ残っており、北と東側の石材を欠いている。石材は奥壁に1石、両側壁には2石ずつ横長に使っている。敷石は小礫を全面に敷いてある。石室の平面形は中央部で約85×35cmとなる。無遺物であるが、石材は3号墳に類似している。

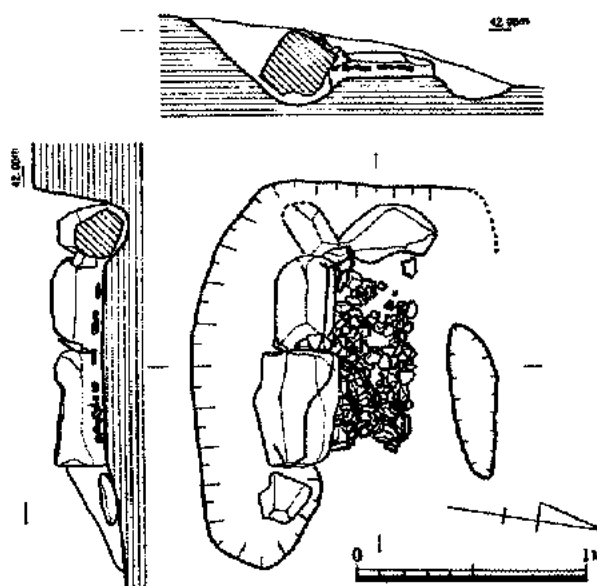


Fig 5 A群小石室実測図 (1/30)

2. B群の調査

B群は1基のみで立地している。1群につらなる丘陵線上にさらに1基の古墳を想定したが存在しなかった。

1) B-1号墳

A群ののる丘陵の頂部にあたり、標高68mに立地している。調査時には、地形は平坦化してわずかに石材の一部が露出する程度であった。

墳丘は全て失っており、地山整形面の調査による墳丘規模は明確にできなかった。

(1) 主体部 (Fig 32)

床面の敷石と横口部の一部を除いて、全て石材は抜き取られていた。石室掘り方は東西に長軸をおき全長約4m、最大巾約2mである。石室は石材の抜き跡などから推定して、西向きに開口する竪穴系横口式石室の形態をもつものと考えられる。

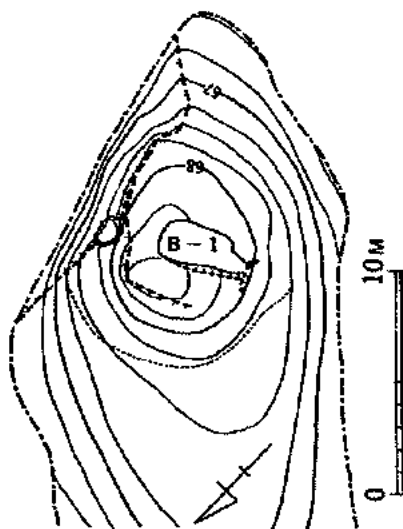


Fig 6 B群地形測量図 (1/300)

小礫を使った敷石が横口部付近を除いてはほぼ残

っており、敷石の範囲から石室の平面形を推定すると中央部では205 × 100cmとなる。巾は奥壁側が横口部に比べてやや広くなる。横口部については残りが悪く、復原が難しいが、細石は小ぶりの石を3段に積み、最上段は、平石を置いている。細石上端と石室床面との高さは32cmである。細石と墓道との間の空間は埋めて床面をつくっていたものであろう。横口部左側の石積みは袖石を立てておらず、基部から小塊石を積みあげており、形態としては無袖である。貼石は墓道側に一列延びている。これらの石積みが原状のものであるとすると、A-3号墳と同一石室構造をもつことになる。墓道は石室長軸よりやや左よりに主軸をおいて緩やかに石室に向かって下向の傾斜をもっている。

石室床面敷石にはベンガラが付着しているものがあり、構築当初は石室内面にはベンガラが塗られていたものであろう。

A-3号墳と同じような石室構造をもつものと考えられるが、石室平面形はA-3号墳より広がっている。石室の築造時期は、A-3号墳に近似する年代が与えられる。

(2) 出土遺物 (Fig 74)

石室内埋土中からの出土であり、鉄鏝を19点出土しているが個体数は不明。

武器 (Fig 74-1~19)

鉄鏝 1~3は身と簷被の破片である。片丸造の細根鏝であり、身は三角形に近く、簷被の断面形は長方形である。4は斧頭式の平根鏝である。簷被の断面は方形である。

3. C群の調査

C群は谷に面して北へのびる丘陵尾根線上に比高差20mの間で1列に6基が分布している。各墳とも石室の開口方向は西から西南の方向である。その他の遺構として、小石室が4号墳の北側に2基、5号墳の北側に2基分布している。1・4号墳は処女墳であった。

1) C-1号墳

C群中最北の標高43~44mに立地する。調査時には墳丘は認められず、尾根線上に等高線と直交するトレンチを開けて石室の位置を確認した。地山整形面から古墳の規模がわかり、石室も処女墳であることがわかった。本墳は2号墳のすぐ隣に位置するが、両古墳の先後関係は確認できなかった。地山整形により標高の高い側の尾根線を、主体部をとりまくように溝が掘られている。溝巾は広いところで2mあるが、比較的浅い掘り込みで東と西では溝は消滅している。北側では、地山を削り落とすことにより、墓域を定めている。地山整形面による古墳の規模は6×4.5mの東西に長い偏円形である。

(1) 主体部 (Fig 33)

石室廻り方は2.8×1.5mの大きさで、西側では段がついて短く墓道をつくる。

天井石は6個の石材を使って、奥壁側に最も大きいものをわたしている。天井石の架構は片側から順にわたしたのではなく、1石ごとに間をあけてやや大ぶりのものをのせ、その間にやや小形の石をのせている。各天井石間の空間には小礫をもって目張りしている。粘土による目張りは見られない。天井石をあげると石室内には殆どどの堆積土があった。開口時における石室内塗布のベンガラはあざやかであった。

石室は西に開口する竪穴系横口式石室である。石室床面の平面形は奥壁側が横口側よりやや巾の広い、羽子板状をしている。床には小礫を利用した敷石が全面に敷かれている。壁体の積み方は、奥壁腰石に最も大きい石材を据え、両側壁の腰石も大ぶりの石材をたてている。この内2石は横に長くたてている。腰石から上部はやや小ぶりの石材を横長に利用して2~3段に積みあげており、石材間の空間は小礫をもって目張りしている。粘土の使用はない。横口部は基底面に塊石を2列並べて甕状構造をつくっており、その上に4段に閉塞石を積み上げ、最上段には平石をのせており、天井石と同じような積み方となっている。墓道は長さ18cmと短かいものである。墓道の石室側の段状部と天井石の墓道側の端部との空間は37cmしかなく横口部としての機能は果たし得ない。このことから、形態的には横口構造を装いながらも、実質的には竪穴式石室としての機能を果たしていたものと考えられる。石室中央部の床面の広さは217×60cmである。

(2) 出土遺物 (Fig 74)

石室中央から奥壁より刀子1点、さらに奥壁より鉄鏝を5点出土している。いずれも床面遺物である。

武器 (Fig 74-1~5)

鉄鎌 1~5は同型式のもので片丸造の細根鍛である。4・5は完形品で身の片側には関がやや鋭角に張り出し、他方には逆棘が6mmのびる。莖被の断面は長方形、基部の断面は方形である。基部には木質を残している。4の全長15.1cm。

工具 (Fig 74-6)

刀子 鋒の一部を欠く両関式の刀子である。基部の端部は丸みをもつ。基部断面は台形である。推定全長16.0cm。

2) C-2号墳

1号墳の南側10mの丘陵尾根線上に立地している。調査時には墳丘が残り、墳丘中央部が落ちこんでいた。墳丘径は10mの円墳で、南側の墳丘は1mの高さに2層に盛られていた。北側では、地山整形の下端を抜いかくすように盛土はのびていた。墳丘を剥いだ後の地山整形面では径8mの整形面があり、南側では尾根を切るように浅い溝が最大巾3mに掘られている。

(1) 主体部 (Fig 34)

石室掘り方は東西に長軸をとり、4.0 × 2.5mの大きさに掘られ、西側に墓道が付設する。

石室の天井は楣石を残すのみで玄室にはなく、南側側壁から盗掘を受けていた。石室は西に開口する堅穴系横口式石室である。石室床面の平面形は、奥壁巾が玄門側の巾よりも広いやや羽子板状である。石室中央部巾がやや膨み、少し胴張りのある平面形をしている。壁体の構築は奥壁の腰石に大小の2石を使用している。左右側壁の腰石は各4石をもって横長に置いている。腰石上には腰石より小ぶりの石材を使って、腰石同様に横長に使って4~5段に積みあげている。天井石は失っているが、床面からの高さを約170cmぐらいに推定できる。石室床面は撓乱を受けており、前半部のみ残って小礫が敷かれている。

楣石は左右とも、石材を縦長に使い、その上に左右とも2石をもって横積みし、さらに楣石がのる。玄門巾55cm。楣石は玄門間に2段に積み上げ、上段は平石を1板のせている。楣石下面と楣石上面との高さ65cm、楣石上面と床面上との段は30cmである。楣石上にはさらに1石小ぶりの石材がのるが、あと1~2段積んでその上に玄室の天井石がのるものと考えられる。玄門部閉塞は楣石上に3石を並べその上に大ぶりの平石を楣石下面までたてかけてその背部を7石をもって支えている。

前庭部から墓道の床面は玄室に向かって下向の傾斜をもち、玄門近くで2段となる。前庭部側壁は左右とも2列で床面から積みあげて7段となり楣石上面より少し高くなる。左側壁最上部では貼石が2列見られる。石室の構築は玄室、前庭部側壁とも併行して築かれており、石積み各段の水平レベルはそろっている。石材は腰石には礫岩と花崗岩が使われ、他の壁体は花崗岩が多く使われている。

(2) 出土遺物 (Fig 74)

Ⅲ区溝より須恵器と土師器の高杯が1点ずつと玄室内の床面から刀1点が出土している。

須恵器 (Fig 66-1)

高杯 杯底部から脚の破片である。脚は3方の透かしがある。体部に一条の沈線が入る。体部はへら削り、他はなで調整。色調は灰色。砂粒を含み、焼成ややあまい。

土師器 (Fig 66-2)

高杯 杯底部から体部にかけては膨みをもって立ち上がり、口縁部は外反し、口端部は丸みをもつ。口縁部付近は体部より厚みを増している。脚部は基部から脚端部に向かって緩やかに広がり脚端で大きく広がる。脚端は丸みをもつ。調整は風化により器面が荒れている。杯部外面は横へら磨き。内部から口縁部はなで調整。脚筒部は外面を縦へら削り、内面は上半部を横へら削り、下半はなで調整。脚端はなで調整である。色調は赤褐色。胎土は精良で焼成はややあまい。

武器 (Fig 74-1)

小刀 完形品で残りがよい両関のある小刀である。関部金具の外面の茎部側には糸を巻いているがその用途は不明。茎部の端は丸みをもち、茎部中央の断面形は長い台形となる。全長19.7cm。

3) C-3号墳

3号墳は2号墳の南側25mの位置の丘陵尾根線上に立地する。調査時には墳丘の中央部をブルドーザーが走っており、墳丘と石室の大半を失っており、わずかに玄門部南側で原地形を残すのみであった。

地山整形面を掘りあげて墳丘規模をとらえることができた。地山整形での平坦面の径は約8mの円形となる。石室南側では尾根線を切るように最大巾1.9m、深さ0.5mの溝が掘られている。

(1) 主体部 (Fig 35)

石室掘り方は長軸を東西におく3.3 × 2.0mの大きさである。さらに西側に墓道が続く。

石室は破壊がひどく腰石のみとなっている。石室床面の平面形は奥壁側の巾が玄門部巾より広く、やや胴の張る西へ開口する竪穴系横口式石室である。壁体の構築は腰石を横長に利用して、奥壁に2石、側壁に4石を使い石材はほとんど同じ大きさとなる。玄門部は右側袖石を縦長にたてて袖石上面が石室床面から40cmの高さになる。玄門間50cm。裾石は1石をもって横長に置き、裾石上面と床面との高さは10cmである。

前庭部と墓道は床面が石室へ下向する傾斜をもつ。前庭右側壁は1列で床から積み上げて5段となる。側壁の石材は小ぶりである。

(2) 出土遺物 (Fig 74)

丘陵を切る溝の中から須恵器1点、石室奥壁側右側壁よりの床面から刀子と鉄鏃が10点出土

している。

須恵器 (Fig 66-1)

甕 1点のみ出土した完形品である。頸部は直線的に開き、口縁部は小さくS字に開いている。口端部は凹む。口縁部下端は削り出しの張り出しが一条めぐり、張り出しと口端部の間には沈線が一条めぐり、体部は最大径が高さより大きい偏円形をしている。体部最大径の部分には径1.5cmの穿孔が一個ある。この穿孔部をはさむように上下に沈線が一条ずつめぐっている。口縁部外面はへらによる一条の波状文、頸部には細い波状文が2ヶ所めぐっている。体部最大径部には波状文と同じ原体によって押圧文がめぐり、調整は内面と体部最大径から上は横なで調整、体部下半は同一方向に走るハケ目調整し、そのあとになで調整を行っている。色調は灰色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

武器 (Fig 74-1~8)

鉄鏃 1~4は片丸造細根鏃である。身は三角形に近い、筈被の断面形は長方形、1の茎部断面形は上部が長方形、下部は円形である。5は身が斧形をした細根鏃である。筈被の断面形は長方形、6~8は筈被と茎部破片である。断面形の観察から6~7は片丸造細根鏃、8は斧形細根鏃であろう。

工具 (Fig 74-9・10)

刀子 9は両関のある刀子で鋒を欠くが、推定全長13.1cm。茎部が全長の半分近くある。茎部断面形はうすい台形である。10は刃部の1部で刃部最大巾1.3cm。

4) C-4号墳

3号墳からは南へ30mの位置の丘陵尾根線上に立地している。調査時にはブルドーザーにより削られ、断面に石材が露出していた。

すでに天井石が一部露出しており、明確な墳丘を認められないので、地上整形面まで掘り下げて、天井石を出した。石室は空間を残しており、床面上に30cmほどやわらかい土が堆積していた。

地山整形面に表われた古墳の規模は径8mの円形で、石室中心からは南側に広い平坦面をつくる。南側では丘陵尾根線を切るように最大巾70cmの浅い溝が掘られている。

(1) 主体部 (Fig 36)

石室掘り方は長軸を東西に向けて約3.5×2.0mが掘られている。石室は西に開口する竪穴系横口式石室である。天井石は3石が残っていた。本来4石をもって天井としていたものである。実測図により奥壁にのる天井石が、隣りの天井石の上にのっていることから、本石室の天井石は玄門側から順に4石のせたものと考えられる。天井石は3石とも1号墳の天井石とは石材も異なり、大ぶりである。天井石下面と床面との高さ95cm。石室の平面形は奥壁巾が横口側巾より広い羽子板状をしている。

腰石は奥壁2石、右側壁5石、左側壁4石を使って、奥壁の1石と右側壁の1石を除き、全て石材を横長にたてている。腰石上面の高さは不揃いである。壁体の石積みは石材を縦および横長に使うて積みあげ、石材の目路は横口部へ向かって下向している。積み石間には小礫を使って目張りがされている。粘土の使用は認められない。床面は小礫をもつて敷きつめられている。石室内は天井石を含めて全面にベンガラが塗布されている。横口部は両袖式で、左袖石の上面は床面と天井石下面との $\frac{2}{3}$ の高さに、右袖石では $\frac{1}{2}$ の高さになる。袖石間50cm、榎石は2段に積み、下段には一石を使い上段は5石をもつてつくられている。榎石上面と床面との段は25cmである。

前庭部と墓道の床面は横口部へ向かって下向する傾斜をもつ。前庭部側壁は1列で、床面から積み上げている。

(2) 出土遺物 (Fig 74)

石室床面には奥壁を頭として2体の人骨が出土した。この人骨の頭部の位置と側壁間の床面から6点の鉄鍔が出土している。人骨については後述する。

武具 (Fig 74-1~6)

鉄鍔 いずれも同一型式に属するもので残存状況はよい。両丸造二段脇袂の広根鍔である。厚さは全体に薄手のつくりである。身の脇袂部分の2段を特徴としている。莖被の中途から大きく広がる細身の逆棘が一本でている。莖被の断面は長方形、茎部の断面は円形である。2の全長約13.6cm。

5) C-5号墳

5号墳は4号墳から南へ20mのところに位置し、丘陵尾根線上につくられている。調査時には、ブルドーザーでおされており墳丘を失っていた。すでに盗掘を受けており、盗掘は2号墳と同様に右側壁から行なわれていた。墳丘は西側玄門付近に一部残っていた。調査は地山整形面を出すことと石室内の掘り方を同時に行った。地山整形面での古墳の現状は長径10mの大きさで、南側の丘陵尾根線を切るように巾3.0mの溝が掘られている。

(1) 主体部 (Fig 37)

石室掘り方は、長軸を東西に近くとり3.8 × 2.8mの広さに掘られ、さらに西側に墓道がつづく。石室の平面形は中央部の巾が最大となり胴の膨んだ形の竪穴系横口式石室である。壁体の構築は腰石に大ぶりの石材を横長に使うており、奥壁に2石、右側壁6石、左側壁に5石を配置している。腰石上面は3面とも揃っている。腰石から上は石材を横長に使うて積んでおり、目路は水平に走る。積み石間には小礫を使って目張りがされている。

玄門部は石材を縦長に使うて袖石としている。床面から袖石上面までの高さは、床面から榎石下面の高さの $\frac{1}{2}$ となっている。袖石上には左右とも石材を横長に使うて3段石積みしており、その上に榎石がのる。榎石の上にはさらに小ぶりの石が2石のつており、この上に天井石がの

るものと思われる。石室の高さ 160cm ぐらいである。玄門間 61cm、楣石は、玄門間に 2 段積みしており、上段は 1 石を平積みしている。閉塞部は 2 枚の板石を 2 段積みにしており、2 石の間の空間を小隙で目張りしている。

前庭部と墓道床面は玄門部に向けて下向するゆるい傾斜となっている。前庭部側壁は 1 列で床面から積み上げている。

(2) 出土遺物 (Fig 66, Fig 75)

IV 区溝の中から少し浮いた状態で杯を主体とする一群の土器が出土し、III 区溝からは壺が溝中央の凹みに埋まっていた。I～II 区の墳裾からは須恵器が出土した。墳丘上の I 区には杯が 5 点出土し、墓道からは 2 点出土した。鉄器は玄室奥壁側の埋土中と玄門側の床面から馬具を始めとする遺物があり閉塞石の間からも馬具が出土した。

須恵器 (Fig 66-4~25,

Fig 67-26~40)

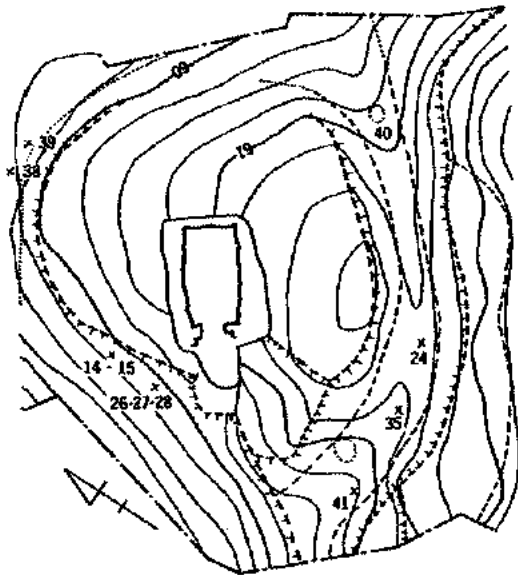
杯蓋 (Fig 66-4~16) 出土地点は溝、墳丘上、墓道の 3ヶ所に分かれる。形態差から 3 つに分類できる。

I 類は 4~12・16 が相当する。口径は 13.0cm~14.5cm、16 は 11.4cm と小さい。Fig 8 C-5 号墳土器出土分布図 (1/300)

器高は 3.8cm~5.2cm である。天井部

は器形のゆがみを考え合せるとやや平坦化しており、天井部と体部との境は明瞭で小さく段がつく、段の張り出しには鋭いものと丸みをもつものがある。体部はやや開き気味に直線的に下方へのびる。口端部は丸く、内側には段がつく。天井部の刃にヘラ削り。その他は横なで調整を施している。6 の天井部内面には同心円文が見られる。色調は灰色~灰黒色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。4 は体部が 2.5cm と高く天井部と体部との境も鋭く、また口端部のつくりも鋭く、I 類とした中でもやや古く位置づけられる。

II 類は 13・15 が相当する。13 は天井部がやや平坦となり、天井部と体部との境は沈線に分けられる。体部はやや開き気味に下方に引き出される。口端部はやや尖り気味となり内側に段がつく、体部高は 1.75cm と I 類より低くなり、口径 13.4cm は I 類よりやや小さくなる。天井部の刃強にヘラ削り。その他は横なで調整、色調は青灰色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。



Ⅲ類には14が相当する。口径13.7cm、器高3.9cmを測る。天井部はやや丸みを持ち、天井部と体部との境は不明瞭となる。体部は開き気味に下向き、口端部はやや尖り気味となり、内側には弱い段がつく。天井部の外縁にヘラ削り、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

杯身 (Fig 66-17~25, Fig 67-26~30) 14個体の遺物は溝、墳丘上、墓道から出土している。30は採集遺物であるため、ここでの分類から除外する。13点の遺物は3類に分けられる。Ⅰ類は17~20が相当する。口径11.5~12.3cm、器高4.9~5.5cm、受部立ちあがり高1.8~2.15cmを測る。受部立ちあがり内傾して直線的である。口端部は内側に段がつく、受部の上面は平坦で、端部は横へ引き出される。体部の膨みは大きく、底部はやや平坦化している。底部3/5にヘラ削り、他は横なで調整を施している。20の底部内面には同心円文と思われる痕跡がある。色調は灰色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

Ⅱ類には21~25が相当する。口径11.5~13.0cm、器高3.85~5.0cm、受部立ちあがり高1.25~1.8cmを測る。いずれも溝内から出土している。受部立ちあがり内傾して直線的に上方へのびる。口端部は丸みを持ち、段はつかない。立ちあがり高はⅠ類より低くなる。受部の上面は平坦で、端部は横へ引き出される。体部はⅠ類に比べて膨みが小さく受部立ちあがりと体部内面との境は不明瞭である。底部は丸くなっている。底部は2/5の範囲にヘラ削り、その他は横なで調整。色調は灰色~青灰色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

Ⅲ類は墳丘上と墓道出土の遺物が相当する。26~29は口径11.9~13.0cm、器高4.25~4.8cm、受部立ちあがり高1.2~1.5cmを測る。受部立ちあがり内傾して外反しながら上方へのびる。口端部は尖り気味である。受部と立ちあがりの境は不明瞭となる。体部はゆるやかに膨み受部立ちあがりと体部内面の境は明瞭である。底部は中央部付近が平たくなる。底部約1/2にヘラ削り、その他は横なで調整を施している。色調は灰色。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。

高杯 (Fig 67-31) 溝の杯群とともに出土した完形品である。器高10.5cmを測る。杯部の体部は短く外反する。口端部は尖る。杯底部は浅い。脚部は筒部が細く全体としては長い。裾部は小さくラッパ状に開き、端部は段がつく。杯底部に櫛による列点文がめぐる。器面は横なで調整。脚筒部に3本のヘラ記号が描かれている。色調は灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

甗 (Fig 67-32・33) 溝内出土の口頸部破片である。32は口縁部が直線的に開き、口端部は丸く、内側に沈線が入る。口縁下には小さな鋭い段がつく。口縁部と頸部に波状文がある。色調は青灰色。胎土、焼成とも良好。33は短く立ちあがる口縁部に段がついて、端部はやや外側下方に引き出される。口縁下には弱い段がつく。頸部には波状文がある。色調は暗灰色。胎土、焼成とも良好。内面に自然釉が見られる。

短頸壺蓋 (Fig 67-34・35) 34は口径11.5cm。天井部は平坦化して、天井部と体部との境は不明瞭である。体部は短く、やや直線的となる。口端部の内側には段がつく。天井部

を板による小口などで調整をしている。色調は灰黒色。胎土、焼成とも良好、35も34同様の器形をするが、口端部内側の段は不明瞭となる。天井部はへら削りを行なっている。色調灰黒色。胎土、焼成とも良好。

短頸壺 (Fig 67-36・37) 溝内出土である。36は短く直口する口縁部の端部は丸い。体部は肩が張り、最大径は中位から上にくる。底部は平坦化している。体部上半はカキ目調整、体部下半はへら削りを行なっている。色調は灰色。胎土、焼成とも良好。

提瓶 (Fig 67-38・39) 2点とも北側墳出土である。38は外反して立ちあがる頸部に続く口縁部は外側に段がつく。体部は弱い膨みを持ち、体部最大径は中位より背部側にくる。体部上面はカキ目調整後になで調整を施している。体部下面はカキ目調整を残している。色調は灰黒色。胎土、焼成とも良好。体部下面にへら記号をもつ。39は小形の完形品である。小さく外反する頸部に続く口縁部の外側に段がつく。体部上下面の膨みは弱い。体部はカキ目調整を施している。色調は灰色。胎土、焼成とも良好。

甕 (Fig 67-40) 溝内床面出土の完形品である。器高50.2cmを測る。頸部は短く外反して立ちあがる。口縁部は内側が凹み、口端部外側に巾1.4cmの面をつくる。体部は肩が少し張り、最大径は中位より上にくる。底部を欠くがやや尖り気味の丸底であろう。頸部はカキ目調整後横なで調整、体部は格子目タタキの後に、体部上半を原体巾1cmのカキ目を数cmおきにめぐらす。体部中位は棒状工具による沈線が数mm間隔にめぐる。口縁部内面は横なで調整、体部内面は同心円文が全面に見られる。色調は灰色。胎土に砂粒を含み、焼成良好。

土師器 (Fig 67-41~43)

脚付埴 (41・42) 41は溝内出土の完形品である。器高11.4cmを測る。口縁部はやや直線的に外開し、端部はやや尖り気味である。体部は球形に近い膨みをもつ。脚部の筒部は直線的に外開し、裾は屈曲して開き、裾端部は丸い。埴部の器面は横方向のへら磨きを行ない脚部は縦へら磨き、裾部は横なで調整、脚部内面は横へら削りを施している。色調は赤褐色。胎土に砂粒を含み、焼成良好。

鉢 (43) 小形の完形品であるが、風化のため器面は荒れている。体部は直線的に開き、口縁部は小さく開く、端部は丸い。底部は平底である。色調は赤褐色。胎土は精良で焼成はあまい。

武器 (Fig 75-1~37)

鉄鐙 (1~33) 1~32の鉄鐙は破片も含めて同一型式のものと考えられる。片丸造の細根鐙である。身の両側から逆棘が約1cmほどのびる。篋被の長さは破片から推定すると6cm以上はあるものと思われる。篋被、基部の断面は長方形である。基部には木質が付着し、その上を接の皮で巻いている。33の身は不定形で右側面の屈曲部と右側頭部に刃がくる。篋被の断面は長方形である。

刀装具 (34) 鹿角製である。巾 2.1cm、厚さ 1.6cm を測る。上側面はきれいに面取りされている。背面文様は、上部に小さく連続鋸歯文が、その下側には連続鋸歯文が不連続な並びに入るものと思われる。表面にベンガラ塗布を見る。

鉄矛 (35) 玄室右側壁際出土の完形品である。推定全長 24.3cm を測る。袋部の断面は円形、身の中ほどに断面隅丸方形の稜が入り、鋒に近くなると断面は正方形となる。袋部の厚さ 4mm。

刀 (36・37) いずれも直刀で同一個体と思われる。刀部最大巾 2.8cm、背部厚さ 1.1cm を測る。

工具 (Fig 75)

刀子 (38~41) いずれも破片であり、2 個体分と考えられる。41 は両開式の関部は同じ部位にくる。金具の破片を着装していた。

馬具 (Fig 75-42~53、Fig 76-54~59)

鞍金具 (Fig 75-42~52) 42 は留釘の一種と考えられる。先端部は L 字形に曲がる。身の断面は円形、この部分に糸がまかされている。43~52 は実測不要のものも含めて 12 個体出土する。鞍の鍔金具と思われる。平面形は方形の一面が膨んでいる。下方は釘のように芯が 1cm ほどのび、頭部と平行するように鉄を残している。この間には木質が残存している。頭はやや膨みをもつ。芯はこの頭部より出ないが、破片の中には頭部から出るものが見られる。頭部には金箔を置いている。

鉄環 (Fig 75-53) 径 5.4cm の円形で断面は長方形となる。

杏葉 (Fig 76-54~56) 左右側壁際出土の完形品である。細かい違いはあるが同一型式のものである。鉄地金銅張の偏円剣菱形杏葉と呼ばれるもので 56 の推定全長 13.9cm、偏円部最大巾 6.2cm、剣菱部の最大巾 6.7cm を測る。同型式の遺物は津屋崎町の勝浦 10 号墳の前方部にある堅穴系横口式石室内から出土している。

馬鈴 (Fig 76-57) 玄門部閉塞石の間から出土した破片である。推定径 4.4cm の円形であるが上部の構造は不明である。表面は径 1.15cm の円形の浮文と一列の刻目が見られる。この種の馬鈴は 53 の遺物と同じようなものが朝鮮半島の高靈郡池山洞 44 号墳の 25 号石槨内から出土している。この石槨内の共伴の遺物は木心地の輪蓋であり、遺物の共伴関係は勝浦 10 号墳に似ているといえる。

釧 (Fig 76-58・59) 右側壁際出土の一对である。58 は完形品であり全長 24.5cm、最大巾 18.9cm を測る。沓込の部分は 2 条となる。沓込上面には滑り止めの突起があると思われる。

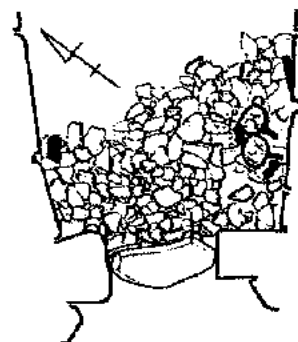


Fig 9

C-5 号坑鉄器出土状況 (1・40)

が鉄のため明らかにできない。

註1. 石山勉「新原・奴山古墳群」福岡県文化財調査報告書 第54集 福岡県教育委員会 1977

2. 伊谷鎮「大伽羅古墳発掘調査報告書」高瀬郎 1979

6) C-6号墳

6号墳はC群中最高位の尾根線頂部に立地する。調査時には、アスレチックスの休息地点となっていたところであり、整地されて墳丘を失っていた。このため地山整形と石室掘り方の調査を併行して実施した。

(1) 主体部 (Fig 38)

石室掘り方は長軸を東西に近くとり、 $2.8 \times 2.5m$ の広さに掘られ、西側には墓道が掘りこまれている。玄室平面形は長方形から玄門部側面が少しせまくなる竪穴系横口式石室である。玄室の壁体は大ぶりの石材を腰石としており、腰石上には塊石を横積みしている。石材間には小礫を使った目張りがある。床面は荒らされているが小礫が敷かれている。玄門は両袖となり、袖石間には最下部に平石を置いて柵石となる。玄門部前面の構造は貼石構造となり、左側壁は4列、5段に小塊石が積まれている。前庭部前面には墓道が付設する玄室床面と墓道の床面は同じ高さであるが、玄門部地山整形後に袖石間に柵石を一石を置いたのちに柵石上に2段の平石をのせて、3段目の石材の上面まで地山を埋めて、地山から50cmの高さのところを墓道床面として整地している。閉塞は板石2枚を使って玄室側に倒れかけるように塞いでいる。

(2) 出土遺物 (Fig 74)

玄室床面より鉄鏃を1点出土している。

武具 (Fig 74-1)

鉄鏃 基部を欠くが片丸造の細根鏃である。身の片側には逆棘がつくり出されている。鏃被の断面は長方形である。

7) 小石室 (Fig 10, Fig 11)

4号墳の北側に2基、5号墳の北側に2基の小石室がつくられている。

(1) 1号小石室 (Fig 10)

5号墳の北側墳丘外に位置している。調査時にはすでに上部構造は失っていた。主軸を東西に向けて $1.98 \times 1.10m$ の墓壇が掘られている。

石室床面は南側が膨み、石室巾は東側が広がっており、東側に頭部がくるものと考えられる。石室平面形は中央部で $96 \times 43cm$ 。壁体は厚みのある石材をつかって奥壁に1石、左右壁に4石をつかっている。腰石から上には2～3段の石積みがある。天井石はすでに失われている。石室床面は小礫が全面に敷かれている。石室床面積 $0.4m^2$ 、床面の標高59.15 m。

(2) 2号小石室 (Fig 10)

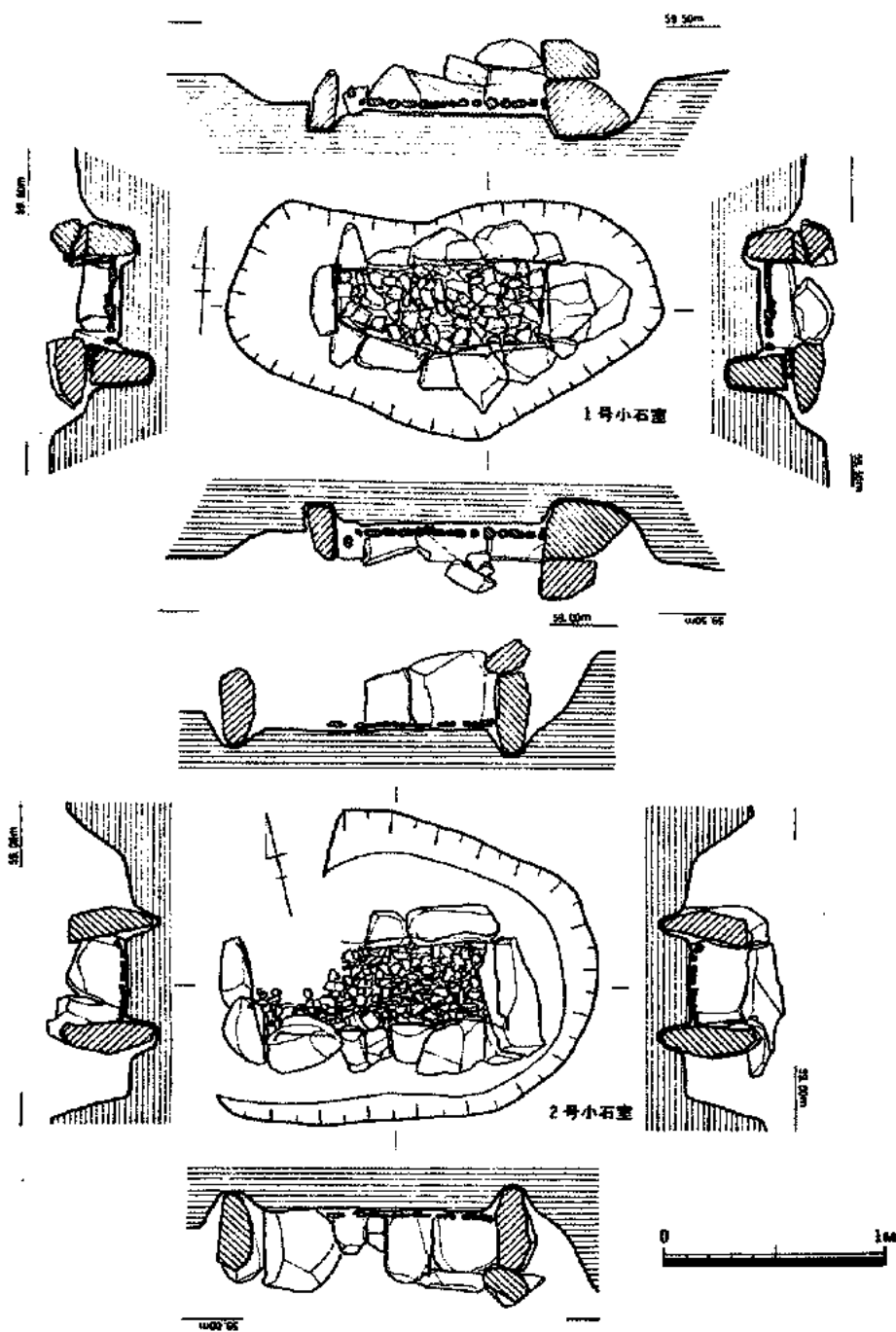


Fig 10 C群1号・2号小石室実測図 (1/30)

1号小石室の北側に位置し、調査時には石室上半を失っていた。主軸を東西に向いている。石室平面形は長方形で、中央部の大きさは110 × 38cmである。腰石は小口壁に1石と2石、両側壁は4石ずつ縦積みしている。腰石より上には石材を横積みしている。床面には小礫が敷かれている。石室床面積0.42㎡、床面標高58.55 m。

(3) 3号小石室 (Fig 11)

4号墳の北側墳丘外に位置している。2石のみ残しており全体の規模は不明。墓壇は1.2 × 1.0 mの大きさで、石室平面形は石材の抜けあとから方形に近いものと考えられる。石材は厚みのある石を使い、縦長と横長に立てている。石室平面形は推定45cm方形、床面は推定 0.2㎡、床面標高57m。

(4) 4号小石室 (Fig 11)

3号小石室の東側に並ぶように位置する。調査中の発見であり、腰石のみ残している。主軸を東西に置き、石室の平面形は1号小石室に似ている。石材は厚手のものを使い小口壁に1石側壁に2～3石を置いている。

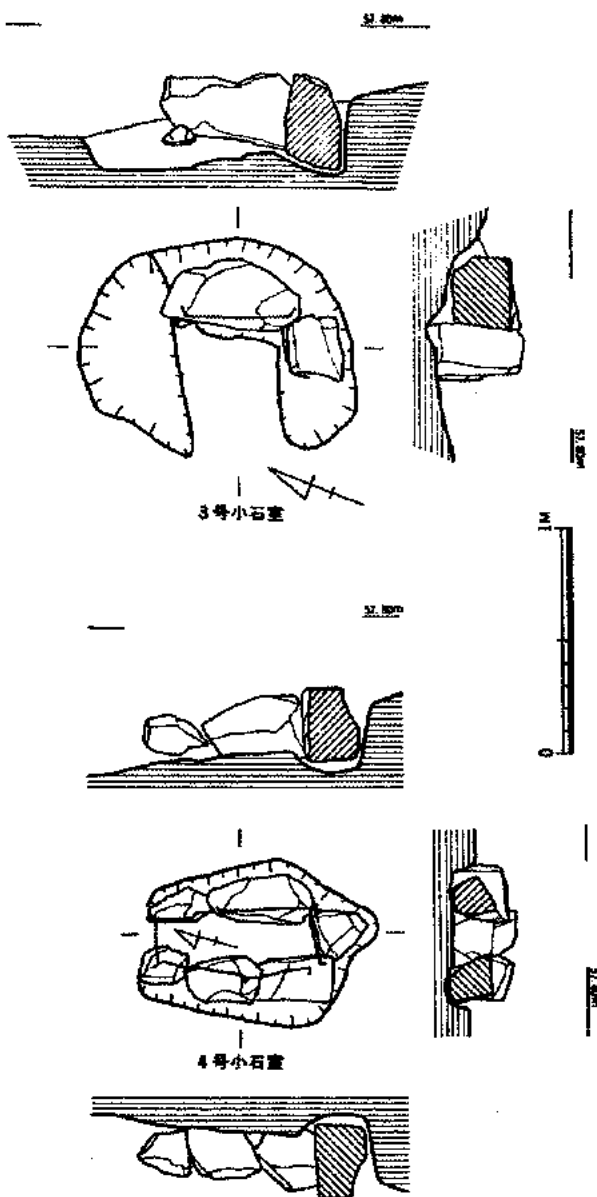


Fig 11 C群3号・4号小石室実測図 (1/30)

4. D群の調査

12基の古墳からなるD群は、C-6号墳の位置する尾根頂部から東へのびる小丘陵上とその南側の急斜面に分布している。調査時には墳丘をほとんど失っている状態で、わずかに石室の石材が露出していることから数基の古墳を確認した。調査が進む中で、地山掘り方の中に深く築かれている石室が次々と現われ、調査終了時には、12基を数えた。石室は全て南に向けて開口している。各古墳は平面距離 105m の間で、ほぼ一列に分布している。

1) D-1号墳

D群中最高位の丘陵南側急斜面に位置する。調査時には古墳のすぐ北側が平坦面となっており畑として使用されていた。石室天井石が一部露出していたが、安全のためにはずして調査を進めた。3本のトレンチ調査により北側に墳丘を一部認めた。古墳は径6~7mの円墳であり、古墳の北側には、最大巾2mの馬蹄形溝が確認できた。

(1) 主体部 (Fig 39)

石室掘り方は、古墳の位置が急斜面となっていることから、石室構築のための平地面積を広くとるために、北側掘り方では約2mに達する深さとなる。

石室は石室前半部から羨道にかけて崩落している。南に開口する単室の横穴式石室で、細石を2ヶ所もつ。石室平面形は長方形であるが、石材による制約のためか東南隅ではゆがんでいる。玄室の壁体は腰石に大ぶりで厚みのある石を使って奥壁2石、左右壁3石を立てている。袖石の上面は玄室の石積みの2段目の上面と水平になる。玄室の腰石から上は、石材を横積みして、目路は袖石側にやや下向するように通る。

羨道部は残りが悪い。細石は玄門間と羨道部中ほどの2ヶ所に各々2石を使ってつくられている。閉塞は第2欄石上で行なわれ、塊石を利用している。墓道は石室の立地と開口方向からすると、ほとんどつかないものと思われる。玄室床面は荒らされているが、当初は小礫を使った敷石があったものであろう。石室の石材はほとんど花崗岩が使われている。

(2) 出土遺物 (Fig 68、Fig 77)

羨道部第2欄石内側に須恵器。Bトレンチ内から須恵器。玄室内埋土中より鉄



Fig 12 D-1号墳調査前

器16点を出土する。

須恵器 (Fig 68-44~45)

杯蓋44 口径8.0cmの小形のものである。天井部はやや平坦化している。天井部と体部との境は不明瞭で口縁部は短く外方に広がる。口端部は丸みをもつ。天井部は不整方向のへう削り後などで調整、他はなで調整を施している。色調はセピア色。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。

長頸壺45 口頸部を欠いている。体部最大径で屈曲する。体部上半はやや膨みをもって頸部へ向かう。頸部よりと最大径近くには2条の棒状工具による沈線が施されている。体部下半もやや膨みをもって底部に至る。底部は低い高台がつき端部は外方へ引き出される。体部上半はカキ目調整、体部下半にはへう削り後などで調整。体部内面と底部はなで調整。色調は暗灰色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

武器 (Fig 77-1~15)

鉄鏃 (1~12) 1・4~8はいずれも筈被と茎部の破片であるが、細根鏃と思われるが1については巾も広いので平根形式か。2は身が斧首式の平根鏃であろう。3・9は身の平面形が変形の菱形をする平根鏃である。身の断面は両丸造で茎部は短く断面は長方形である。10・11は身の中央部に透かしのはいる平根鏃であり、他の鏃に比べて大形である。身の断面は両丸造である。12は異形の広根鏃で身の先端側に両刃の断面がつく。筈被の断面はやや長台形をしている。

刀 (13~15) 13は鋒のみで刃部最大巾2.9cmある。14・15は茎部の部分であり断面形は長台形となる。

工具 (Fig 77-16)

刀子 刃部片で鋒がない。刃部は砥ぎ減りと思われる凹みがある。

2) D-2号墳

D-1号墳から東へ20mの丘陵南側急斜面に位置する。調査時には石材が散在する程度であった。トレンチ調査により径8mの円墳であることを確認したが、墳丘は流失していた。北側斜面には地山整形の馬蹄形溝がつくられている。

(1) 内部主体 (Fig 40)

石室掘り方は長軸が等高線と直交するように掘られ、深さは石室がすっぽり埋ってしまう。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。石室平面形は右側壁側が延びて歪んでいる。玄室壁体は腰石に大ぶりの石材を横長に使用して、奥壁に3石、左右壁に3石をたてている。腰石から上の石積みは石材を横長に使用しており、石材の目路は水平にとおる。

玄室床面の清掃中に骨片を認めた。床面の敷石は小礫とやや大きめの平石を利用している。

玄門部は両袖式で、袖石間の軀石は3石を一列に置いている。羨道部の腰石は玄室と同じ大

きさの石を使っている。羨道部には2ヶ所の榑石構造をもち、両榑石間の床にも小礫が敷かれている。第2榑石から竈道側は小さな段がつく。閉塞は第2榑石上で行なわれ、塊石を5段積みしている。石材には花崗岩を主体として、礫岩、砂岩、安山岩、桂化木が使われている。

(2) 出土遺物 (Fig 68, Fig 77)

玄室内の左側壁際で平瓶3点、杯1点を出土し、右側壁よりには長頸壺が倒れていた。中央部近くの平瓶は動いている。掘り方北側の馬蹄形溝からは蓋と甕の破片が出土。以上8点は須恵器である。鉄器は玄室内より刀と刀子各1点と羨道部に刀1点と刀装具2点が出土している。

須恵器 (Fig 68-46~53)

杯身 (46) 底部は平坦でヘラ削りが見られる。体部は膨みをもって立ちあがる。口縁部は直つすぐ立って口端部はやや尖り気味。底部には内側に段のついた高台がつき、端部は外下方へ引き出される。器面はなで調整が施されている。色調は黒色。細砂粒を含み、焼成は良好。

長頸壺 (47) 完形品である。口頸部は傾いている。頸部は細身で、少し開きながら立ちあがる。口端部近くで強く外反し、端部は丸みをもつ。頸部には成形時の凹凸がそのまま残っている。体部は上・下半ともやや膨みをもっており、体部最大径での屈曲は鋭くなく、やや丸みをもつ。底部は平底で、低い高台がつき、端部は外方へ引き出される。高台近くではヘラ削り、その他はなで調整である。色調は暗灰色。細砂粒を含み、焼成は良好。

平瓶 (48~51) 48は小形品であり体部最大径に比べて高さが低い。口頸部は小さく開きながら短く立ちあがる。口端部は丸みをもつ。体部は扁平で、底部は平底である。器面はなで調整を施している。色調は暗セピア色。細砂粒を含み、焼成は良好。49は安定感のある完形品である。頸部の立ちあがり外反し、口端部はコの字形となり、端部中央は凹む。体部は最大径部分で少し張りが強くなる。体部上半が下半より膨みが大きい。底部は平底でやや上げ底気味である。体部下半はヘラ削り後なで調整、体部上半はカキ目調整、その他はなで調整を施している。色調は暗灰色。細砂粒を含み、焼成は良好。50はやや薄手の感じを与える完形品である。頸部は途中で膨み、口縁部は直線的に外開する。口端部は丸い。体部は最大径が中位より上で、やや角張る。体部上・下半とも膨みをもつ。底部は平底である。体部下半と底部は不整方向のヘラ削り後なで調整。その他はなで調整を施している。色調はセピア色。細砂粒を含み、焼成はややあまい。51は頸部がほぼ直線的に外開して口縁部に至る。口端部はやや尖り気味である。体部最大径は中位よりやや上にあるが、あまり角張らない。底部はやや上げ底気味の平底である。体部下半の底部よりはヘラ削り、体部上半から下半の一部にはカキ目調整が施されている。色調は暗灰色。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好である。

蓋 (52) 蓋と思われるが明確でない。薄い器壁で、やや膨みをもった体部は外開しながら口縁部に続く。口端部はやや尖り気味である。天井部は平坦化している。天井部に粗いヘラ削り、他はなで調整を施している。色調は暗灰色。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。

甕 (53) 小破片であるが、口頸部は短く外反し、口端部は丸い。口縁下の段も弱い。器面は格子目タタキ、内面は同心円文が見られる。色調は暗灰色。胎土精良で、焼成も良好。

武器 (Fig 77-1・2・4・5)

刀 1・2は4・5に伴うものと思われる金具である。4は推定全長28cmの小形の刀である。片開式の刃部最大巾は2.4cm、背部の厚さは5mmである。茎部は最大巾2.2cmで、断面形は長台形となる。5は推定全長50.6cmの刀である。全体の形はやや内反気味である。

工具 (Fig 77-3)

刀子 鋒と茎部の一部を欠く。両開式で背部の開巾が大きい。刃部最大巾1.5cm。

3) D-3号墳

D-2号墳から東へ約15mの丘陵南側斜面に位置している。調査時には封土をすべて流失していた。墳丘は流失しているが、斜面の北側には石室をとりまくように馬蹄形溝が最大巾1.8mにつくられている。このことより推定6~7mの円墳と思われる。

(1) 内部主体 (Fig 41)

石室掘り方は長軸を南北にとり等高線と直交するように掘られている。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。羨道の一部と墓道は失っているが、立地から考えあわせると、もともと墓道は付設されてないものと思われる。玄室の平面形は正方形で、腰石には奥壁に2石、左右壁にそれぞれ3石と2石を使っている。腰石から上の石積みは目路が羨道に向かって下向する積み方となっており、積み方はD-1・2号墳に比べると粗さが目立つ。玄門部は両袖で、袖石上には2段の石積みを行い、その上に楣石がのせられている。楣石下面と地山の高さは75cmである。羨道部は一部崩れているが、腰石には横あるいは縦長と不揃いな石積みのし方である。羨道部閉塞は楣石前面から30cmの位置から始まり、最下部に最終追葬以前の閉塞石を使い、その上に小礫と小ぶりの塊石を使って3段に積んでいる。石室床面は荒らされているが、当初全面に小礫が敷かれていたものと思われる。石材は礫岩を主体にして花崗岩・砂岩・桂化木が使われている。

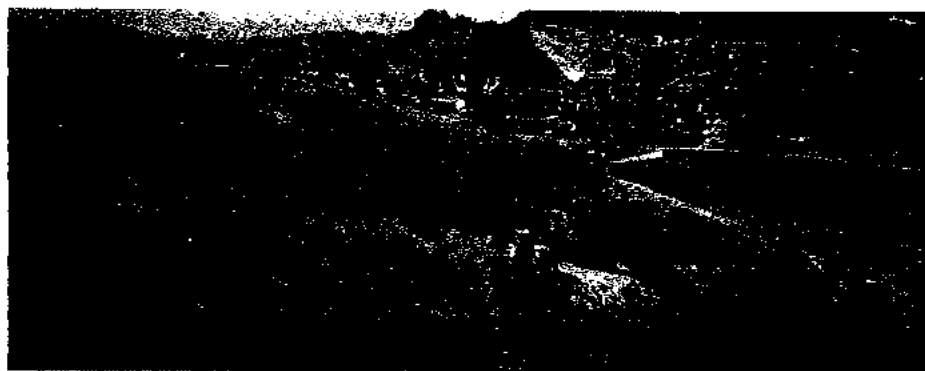


Fig 14 D-1・D-2・D-3号墳全景

(2) 出土遺物 (Fig 68, Fig 77)

玄室埋土中より鉄片3点、須恵器破片と右側壁の床面に倒れた状態で須恵器が出土した。

須恵器 (Fig 68)

高杯 (55) 床面出土の完形品である。杯の体部と底部との境は屈曲して、境目は断面三角形に小さく横に引き出される。体部は直線的に外開し、口縁部はやや内湾気味となり、口端部は尖り気味である。脚部は短く、裾へ向けて大きくラッパ状に開き、脚端部には小さな段がつく。杯底部はへら削り、その他はなで調整を施している。色調は黒色。胎土に砂粒を含み焼成良好。

長頸壺 (56) 口頸部破片である。頸部はほぼ直線的に外開して口縁部になる。口端部はコの字形で、外端は横に引き出される。口縁部下には1条の沈線がめぐる。内外面ともなで調整。内面の一部に焼成時の灰を被った器面剥離が見られる。色調は黒色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

武器 (Fig 77-1~3)

刀 1は刀の関部分と思われる。片関で刃部最大巾 2.5cm。2も1と同様と思われるが、茎部が短く明確にできない。刃部最大巾 2.6cm。3は1・2の刀に付属する金具である。平面形は卵形をするものと思われる。断面は丸みのある方形で、内側には木質を残している。

4) D-4号墳

D-3号墳の東へ10mの位置にある。調査時にはブルドーザーによって墳丘及び石室の大半を破壊されていた。墳丘の大きさは不明である。

(1) 内部主体 (Fig 42)

石室掘り方は長軸を南北にとり、等高線と直交するように掘られている。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。調査時には腰石の一部を残すのみの状態であり、詳細を知るには至らないが、玄室の平面形はT字形と考えられる。腰石には花崗岩を使って横長にたてており、奥壁に2石、側壁に2石を配置する。床面の敷石は奥壁側にやや大きめの平石を使い、玄門部側では小礫を敷いている。石室の南側には墓道を付設する。

(2) 出土遺物 (Fig 77)

石室の床面から鉄鏃・刀子・銀環を出土している。

武器 (Fig 77-1~4)

鉄鏃 1は身が斧形に近い片丸造の平根鏃である。鏃莖の断面形は長方形、2は鏃莖の一部で断面形は1より厚手の長方形、身の形状は不明、3・4は身の断面が平造の斧箭式平根鏃である。1に比べると身巾は広く、頭部は両刃である。3の基部には装着痕を残している。3の現存長は 9.2cmである。

工具 (Fig 77-5)

刀子 両側式の背部の関が鋒に近く、茎部の断面形は台形、関部に金具を装着している。
現存長 7.7cm。

装身具 (Fig 77-6)

耳環 短径 3.7cmを測る。残存状態は悪く、断面は円形で約 7mmの径である、銀製であろう。

5) D-5号墳

D-4号墳の5m東側の丘陵南側斜面に位置する。調査時には主体部のほとんどを削られ、わずかに奥壁と側壁の一部を残している。地山整形面での規模は径4mを測る。

(1) 主体部 (Fig 42)

石室掘り方は等高線に直交するように長軸をとっている。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。おそらく無袖形式のものと考えられる。石室平面形は奥壁に1石を使う。床面には小礫が敷かれている。石材には安山岩質と珪化木が使われている。

(2) 出土遺物 (Fig 68、Fig 78)

I区より須恵器が1点、玄室奥壁よりの床面より耳環を出土している。

須恵器 (Fig 68-57)

杯身 全体に薄手のつくりで、受部立ちあがりは直線的に内傾して、端部は尖る、受部は短く横に引き出され、端部は丸い。受部内側は体部との境が曲する。体部は膨みをもつ。底部はやや平坦化している。調整は体部をへう削り、底部は不整方向のへう削り、受部は横なで調整。内面の底はへう状工具によるなでを施している。色調は灰色。砂粒を多く含み、焼成は良好。

装身具 (Fig 78-1)

耳環 径 2.6cmの円形状である。断面は円形で厚さ 4.5mmを測る。銅を地に金箔を置いたものと思われるが、残存は悪い。

6) D-6号墳

D-5号墳から東へ中心距離にして6mの丘陵南側斜面に位置する。調査時には墳丘を失っており地山整形面での規模は5~7mの不整円形の形状である。トレンチ調査により、D-5号に先行することがわかった。

(1) 主体部 (Fig 43)

石室掘り方は長軸を南北にとり、等高線と直交するように掘られており、墓道を付設している。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は東北でゆがみがあるが、ほぼT字形となる。玄室石材は花崗岩を主体とする面取りの悪いもので、D群中最も粗雑な感を与える。腰石は奥壁に3石、側壁に各2石使っている。腰石上の石積みも3壁ともに雑な積み方である。床面は荒らされているが、小礫を敷いている。袖石は玄室と同じ大きさの石材を使っ

た両袖式である。袖石間40cm。羨道部は左側に小ぶりの石材を使った2列の貼石状の石積みがある。石材の使い方からすると、本石室は羨道部をもたずに、直接墓道が付設する構造をとるものと考えてよい。このことは、急斜面に立地するための地形的制約と考えられる。

(2) 出土遺物 (Fig 69)

遺物はBトレンチから須恵器1点、墓道から須恵器2点、IV区からは土師器が出土している。須恵器 (Fig 70-58~61)

杯蓋 (60) 口縁部破片で、体部と天井部との境は不明瞭であり、ゆるやかな膨みをもって口縁部につづく。口端部は丸い。調整は天井部へう削り、その他は横なで調整を施している。色調は暗灰色。砂粒を含み、焼成良好。

平瓶 (58) 底部を欠くがほぼ完形である。短い頸部は外反して立ちあがる。口縁部はやや肥厚し、口端部は尖り気味である。体部は偏円形で、体部最大径はほぼ中位にくる。底部は平底である。体部全面にカキ目調整、口頸部と内面は横なで調整。体部内面下半には同心円文がみられる。頸部にへう記号をもつ。色調は黒灰色。胎土、焼成とも良好。

埴 (61) 墓道より出土した完形品である。頸部は短く外反し、口端部は尖る。体部上半には横がつき、体部と底部の境も明瞭となる。底部は平底となる。体部下半から底部はへう削り。その他は横なで調整を施している。色調は暗灰色。胎土に砂粒を含み、焼成良好。

土師器 (Fig 70-59)

高杯 石室東側の地山にはりついた状態で出土した杯部の破片である。器壁は厚手で杯底部は浅く、ゆるやかに広がる。底部と体部との境は弱い段がつき、口縁部にかけては小さく外反して外方へのびる。口端部は丸い。器面はへう状工具による横方向の磨きが見られる。色調は赤茶褐色。胎土には砂粒を多く含み、焼成はあまい。器形は弥生時代終末期の高杯を思わせるが古墳の立地あるいは土器の資料からすると判断しかねる遺物である。

7) D-7号墳

D-6号墳の東側の中心距離にして7mの丘陵南側斜面に所在する。調査時には玄室の一部と羨道部が破壊されており、崖断面に石材が露出していた。Bトレンチにより溝を検出し、径7~8mの規模をもつことがわかった。

(1) 主体部 (Fig 44)

石室掘り方は長軸を南北にとり、等高線と平行するように掘られているが、羨道部から墓道にかけては逆に直交するようになる。石室は羨道部を失っているが、南に開口する単室の横穴式石室である。玄室は3壁とも2石を使って腰石をたてている。腰石より上には石材を横長に多く使って積みあげている。玄室床面は大小の石を使って敷かれている。袖石は両袖と考えられる。羨道部は失っているが、敷石の状況からは2ヶ所に掘石構造をもつものである。羨道部床にも敷石がある。羨道部には小さい墓道が付設するが、途中で削平を受けている。石室の石

材には礫岩と花崗岩が多く使われている。

(2) 出土遺物 (Fig 69、Fig 78)

土器は全て須恵器であり8点出土している。玄室埋土中から2点、Bトレンチ内から3点、墓道から3点出土する。鉄器は武具と工具が出土している。玄室から9点、墓道部から3点、墓道から1点出土。

須恵器 (Fig 69-62~69)

杯蓋 (62・63) 天井部と体部との境は不明瞭である。体部から口縁部は膨みをもって、やや開き気味につくられる。口端部は丸い。天井部はへら削り、天井部内面は不整方向なで、他は横なで調整を施している。色調は暗青灰色。胎土には砂粒を多く含み、焼成はややあまい。63はナマ焼けで口縁部は歪んでいる。天井部は平坦で、体部との境は明瞭である。体部は膨みをもってゆるやかに開き、口縁部に続く。口端部は丸い。器面の剥落がひどく、調整は不鮮明。色調は黄褐色。胎土に砂粒を多く含む。焼成不良。

高杯 (64) 脚裾の破片である。ラッパ状に広がる裾は段がつき、下端は下方に少し引き出される。器面は横なで調整。色調は灰黒色。胎土、焼成とも良好。

台付碗 (65) 完形品であるが口縁部は歪んでいる。杯部の底部は厚手である。体部は膨みをもって立ちあがり、口縁部は小さく外反する。口端部は丸い。高台部は巾広く裾へ向かってやや直線的に開く。裾端はコの字形で中央が凹む。杯部はカキ目調整後になで調整を施している。底部近くはへら削り。杯部内面は横なで調整。高台部は横なで調整。色調は灰黒色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

長頸壺 (69) 底部破片で、長頸壺と思われる。器壁は厚手となり、底部は上げ底気味の平底である。全体になで調整を施している。色調は灰黒色。胎土に砂粒を含む。焼成はあまい。

平瓶 (66~68) 66は頸部から上を欠いているが、残存部の上端部での粘土の貼り付け方が平瓶に似ており、ここでは平瓶として扱った。体部は安定感があり、最大径は底部近くにある。底部は平底となる。体部下半は不整方向のへら削り後なで調整。その他はなで調整を施している。色調は灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。67は玄室内出土の完形品である。頸部は直線的に外開して立ちあがり、口端部は丸い。体部の最大径は中位より上にある。底部は平底である。体部下半は横方向の静止へら削りを施している。他はなで調整。色調は暗青灰色。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。68は底部片である。体部の感じは壺を思わせるが、ここでは平瓶としておく。器面はなで調整、色調は灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。

武具 (Fig 78-1~12)

鉄鏃 (1~11) 1・2は斧箭式の平根鏃である。身の頸部は少し丸みをもち、刃部は1が両刃、2が片刃となる。鏃被の断面は長方形。3~11は斧箭式の平根鏃であるが、1・2よ

り身の頭部巾が広く、片側の長い非対称形である。頭部は断面両刃、莖被部分の断面は長方形である。茎部の断面は上部が長方形、先端は円形である。

刀(12) 茎部の破片である。断面形は長台形となる。

工具 (Fig 78-13)

鉄斧 羨道部床面からの出土で、完形品である。全長 8.4cm、月部巾 4.5cm。袋部は両側より折り曲げている。断面形は角丸の長方形である。体側部は小さく段がつく。

8) D-8号墳

D-7号墳から東へ12mの位置の丘陵南側斜面の崖際に所在する。調査時には崖の途中に石材が崩れ落ちており、崖の上に古墳があるものと推定できた。Bトレンチにより、古墳の規模は奥壁から5mの距離に墳裾がくる。このことから、径10m前後の円墳と考えられる。

(1) 主体部 (Fig 45)

石室掘り方は長軸を南西から東南に向けており、等高線に直交している。石室は東南に開口する横穴式石室である。玄室のみ残っており羨道部は崩落している。玄室の腰石は本古墳群中で最も大きいものを使っており、奥壁に1石、左右壁には各2石ずつたてている。腰石から上は、石材を横長にを使って積みあげている。床面は平石を使って敷きつめている。



Fig 15 D-7～D-10号墳調査前

(2) 出土遺物 (Fig 69、Fig 78)

土器は全て筑前器で、Bトレンチ内から1点、馬蹄形溝から4点を出土している。鉄器は埋土中および床面から8点を出土している。

須恵器 (Fig 69~70~74)

杯蓋 (70~72) 70は片の破片でつまみをもたない。天井部は中央がやや平坦化し、内面のかえりは内傾して下方に引き出されている。端部は尖る。かえりと天井部内面との境は明瞭である。天井部は $\frac{1}{2}$ にヘラ削り、他は横手で調整。色調は灰黒色。胎土に細砂粒を含み、焼成はややあまい。71は擬宝珠形つまみをもち、内面のかえりは口端部より上にくる。端部は尖り、天井部内面との境は不明瞭となる。天井部 $\frac{1}{2}$ にヘラ削り、色調はセピア色。胎土・焼成ともやや不良。72は小片であり、天井部のつまみの有無はわからない。内面のかえりは口端部より下方に内傾気味に引き出される。端部は尖る。かえりと天井部内面との境は明瞭となる。天井部はカキ目調整。色調はセピア色をなし、細砂粒を含み、焼成はややあまい。

杯身 (73) 小片である。体部から口縁部はほぼ直線的に立ちあがり、底部は平底である。体部の底部に近いところにヘラ削りが見られる。暗灰色をなし、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。

甕 (74) 大形甕の口頸部である。頸部は大きく外反して立ちあがり、口縁部へ続く。口端部はコの字形で中央が少し凹む。口縁部外側には段がつく。頸部には、上から2本、2本、4本の沈線が間をおいてめぐり、そのあとに波状文が3ヶ所巡る。体部内側には同心円文が見られる。器面は横手で調整。色調は赤褐色。胎土に砂粒を含み、焼成は不良。

武器 (Fig 78-1・2)

刀 1は鏝がひどく残りの悪い直刀片である。刃部最大巾 2.9cm、背部の厚さ 8mm である。2も直刀片であるが、1より小形である。刃部巾 2.5mm、背部の厚さは 7mm である。

工具 (Fig 78-3~7)

刀子 3は完形品で、両開式の開の位置は同じ部位にある。金具を装着しており、茎部には木質を残す。刃部は中央部が少し凹んでおり、使用により磨耗したものと思われる。全長 13.5cm。4は鋒部片である。5・6は両開式の開の位置は、背部の開が茎部に近いタイプのものである。7は刃部から茎部の破片である。両開の位置は同じ部位にくる。刃は1よりも強く凹んでおり、使用頻度の多さをものがたる。茎部には鹿角を装着する。

装身具 (Fig 78-8)

耳環 破片のため復原であるが径 2.2cmの円形である。断面形は偏円形である。中身は中空であるが、銅に金箔を置いたものである。

9) D-9号墳

D-8号墳から東北に20mの距離にあり、丘陵南側の斜面に位置する。調査時には石室の石積みが見面に顔を出しており、発見のきっかけとなった古墳である。トレンチ調査により、径8mの円墳であることがわかった。

(1) 主体部 (Fig 46)

石室掘り方は長軸を南北に置く。玄室部掘り方は隅丸方形となっている。石室は南へ開口する単室の横穴式石室である。羨道部の一部と墓道は崩落している。天井石を失っているが、現状の床面高が当初の高さと考えられる。壁体は奥壁に2石、左右壁にも2石を使った腰石をたてており、腰石からは主に石材を横長に使っている。玄室平面形は方形。袖石は左右に1石づつたて、その上に1段ないし2段の積み石をして、楣石がかけられる。楣石上には5段の石積みがあり、その上に天井石がのる。天井石は1石ないし2石と思われる。羨道部腰石は玄室と同じ大きさの石材で、花崗岩が多く使われている。

(2) 出土遺物 (Fig 69, Fig 78)

トレンチ内より須恵器が1点、玄室埋土中より鉄器5点が出土している。

須恵器 (Fig 69-75)

杯蓋 小破片であり、天井部中央部は平坦である。内面のかえりは口縁部よりやや下方に引き出される。天井部はヘラ削り。色調は茶褐色。胎土良好であるが、焼成不良。

武器 (Fig 78-1~5)

鉄鏃(1) 斧頭式平根鏃の身から鏃被の部分である。断面形は長方形。

刀(2~5) 2は直刀の鋒である。刃部最大巾2.0cm。背部厚さ5mmである。3は鞘金具、4・5は鐔である。

10) D-10号墳

D-7号墳の西南10mの丘陵南側斜面に位置している。調査時には古墳の所在は知られていなかった。墳丘は流失しており、古墳の大きさを知ることはできなかった。

(1) 主体部 (Fig 47)

石室掘り方は長軸を東北から南西に置いている。石室は右半分が崩落しており、羨道部の一部と墓道を失っている。石室は南西に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は方形に近い長方形である。壁体は奥壁に2石、左側壁に2石の腰石をたてている。腰石からは石材を横長に使っている。玄室床面は小礫が全面に敷かれている。玄門部は両袖式で、玄門間には2石を置いて楣石としている。

(2) 出土遺物 (Fig 69, Fig 78)

土器はいずれも須恵器で、玄室床面から5点出土している。玄室袖石よりに4点、奥壁際に1点である。鉄器は玄室床面より3点出土したが調査中に2点なくした。

須恵器 (Fig 69-76-80)

高杯 (76) 玄室床面で倒立して出土した完形品である。杯部の体部は膨みをもって立ちあがり、口端部はやや尖り気味である。体部と底部との境はやや不明瞭となっている。脚部はやや直線的に開き、裾で折れて端部に続く。脚端部は段がつき、脚端部下端は下方に引き出される。杯体部から底部にかけてはカキ目調整。脚部には4本の沈線がめぐり、器面はなで調整。色調は黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

甕 (77) 高杯の横にあった完形品である。ラッパ状に大きく外開する頸部にそのまま口縁部が続く。口端部は丸い。体部は偏円形をして、最大径は中位からやや上にくる。底部は丸底である。体部上半には径1.5cmの円形孔がある。体部上半はカキ目調整。その他はなで調整を施している。器面は灰を被って自然釉が見られる。色調は黒色。砂粒を含み、焼成良好。

平瓶 (78-80) 78は右側壁よりの床面出土である。頸部はやや直線的に立ちあがり、口縁部は少し内湾しており、端部は尖る。体部は偏円形をしており、最大径は中位にくる。底部はやや上げ底気味の平底である。頸部と体部上半にカキ目調整を施している。体部下半の底部近くは静止ヘラ削り、その他の器面はなで調整を施している。色調は暗茶褐色。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。79は78のとなりにあった完形品である。頸部は小さく外反して口縁部に続く。口端部は丸い。体部は最大径で上半と下半に明瞭にわかれる。上・下半とも膨みをもつが、78に比べるとやや直線的となる。底部はやや上げ底気味の平底である。体部上半と下半の中途までカキ目調整。その他はなで調整を施している。色調は黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は器壁に空気を含んでいて不良である。80は奥壁の床面出土。頸部はやや開き気味に直線的に立ちあがる。口端部は丸い。体部は偏円形をしており、最大径は中位にくる。底部はやや平底気味である。頸部には沈線が一条めぐり、体部上半はカキ目調整。体部下半はヘラ削り後なで調整。その他はなで調整。色調は黒色。砂粒を含み、焼成はややあまい。

工具 (Fig 78-1)

刀子 右袖近くの床面出土である。茎部の一部を欠いている。両開式の開の部位はほぼ同じ位置にある。刃部最大巾1.3cm背部厚さ4mmである。茎部の断面は長台形である。現存長11.9cm。

11) D-11号墳

D-6号墳の背後に墳丘が接するように立地している。古墳の位置は丘陵尾根から少し斜面に移るところである。調査時には石材の散布を見るだけで古墳の位置は限定できなかった。石室上半と墳丘は全て流失しており規模を明確にできず、またD-6号墳、D-12号墳との切り合い関係も明らかにできなかった。トレンチ調査は石室掘り方を確認するだけのものとなった。

(1) 主体部 (Fig 47)

石室掘り方は長軸を南北にとり、等高線と平行するように細長く掘られている。石室は単室

の横穴式石室である。玄室平面形は細長い長方形をしており、奥壁巾がやや広い。右側壁の腰石2石は内側に倒れこんでいる。腰石は奥壁1石、側壁は左右とも4石を使っており、石材を横長にたてている。腰石からは石材を横長にして積んでいる。床面は一部荒らされているが、小礫を敷いて、2重・3重となっており、敷石下から遺物が出土することから、追葬をものがある。最終追葬時の閉塞は掘石前面で行なわれており、塊石と小礫が使われている。石室前面には墓道が2mの長さに付設している。墓道の延長部はD-6、D-7号墳の間を通り抜けるものと考えられる。

(2) 出土遺物 (Fig 70、Fig 79)

玄室の床面から全て出土している。左側壁床面出土の須恵器は出土状況から見て、最終追葬時以前のものと考えられる。鉄器は13点出土した。鉄器については各々の追葬の時期を明らかにすることはできなかった。

須恵器 (Fig 70-81)

平瓶 床面から直立の姿勢で出土した完形品である。短く直線的に開いて立ちあがる頸部にやや内湾気味の口縁部がつづく。口端部はやや尖る。口縁部下には沈線状の凹みが一列めぐり、体部は最大径が中位にくる。底部は平底でやや上げ底である。体部上半はカキ目調整、体部下半はへう削り後などで調整が施されている。その他はなで調整。色調は黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

武器 (Fig 79-1~10)

鉄鏃 1~3は筈波と茎部の破片である。身の形状は不明。筈波の断面形は方形と長方形である。2の茎部には装着痕を残す。4~10は茅箭式の平根鏃である。身の形状は楕形をなす。身の頭部は両刃で、横断面は長方形となる。茎部の断面形は方形と長方形がある。

工具 (Fig 79-11~13)

刀子 (11・12) 11は刃部片で最大巾 1.0cm、12は刃部から茎部にかけての破片である。両開式で、背部の関が鋒に近い。刃部は厚手となる。茎部の断面形は台形で木質を付着する。

鉄斧 (13) 完形品で全長 8.2cmある。刃部は直線的となり、体側部には段がつく。袋部は両側より折り込んでいる。中身は錆がひどく厚さ等の観察はできない。

12) D-12号墳

D-11号墳から5m東側のほぼ丘陵尾根線上にD-11号墳と並ぶように立地している。調査時にはわずかに天井石が2石露出していた。調査が進む中で墳丘規模を求めたが、墳丘は全て流失しており、地山整形面によっても規模を明確にできなかった。そのためD-11号墳との切り合い関係もつかめなかった。

(1) 主体部 (Fig 48)

石室掘り方は長軸を南北にとり長方形に掘られている。掘り方の深さは天井石が埋まってし

まう程のものであった。

石室は単室の横穴式石室である。開口方向は南向きで、玄室平面形は正方形に近い長方形である。腰石には大ぶりの石材を使って3壁とも2石ずつ、奥壁は縦長、側壁は横長にたてている。腰石から上の積石も他の石室に比べて大ぶりであり、石材を横長に積みあげている。床面は一部荒らされているが小礫が敷きつめられている。玄門部は両袖式で、袖石上には1段の横積み石が置かれ、その上に天井石がのる。羨道部天井石は2石である。裾石は玄門からやや前面に出た位置にあり、地山を少し掘り込んでから、3列に置かれている。閉塞は裾石上で行なわれ、塊石で5段に積まれている。石室に墓道が付設し長さ5mある。墓道は途中で東へ向かっているが、このことは前面のD-7号墳を避けたものと考えられる。

(2) 出土遺物 (Fig 70、Fig 79)

土器は9点出土し、2点は土師器である。鉄器は玄室内床面から3点出土する。

須恵器 (Fig 70--82~88)

杯蓋 (82・83) 82は玄室床面出土のナマ焼け土器である。天井部中央は平担で口端部にかけてはやや直線的となる。内面のかえりは口端部より下方にまっすぐに引き出される。かえりの端部は尖る。内面のかえりと天井部内面との境は明瞭である。調整は剥落がひどく不明。色調は赤褐色。胎土に砂粒を含む。83は墓道出土。全体に扁平で器壁はやや厚手となる。内面のかえりは口端部より上にくる。かえりの先端は尖る。内面のかえりと天井部内面との境は明瞭。器面はなで調整で仕上げている。天井部内面に×印のヘラ記号がある。色調は黄褐色。細砂粒を多く含み、焼成不良。

壺 (85) 口頸部を欠く墓道出土の遺物。D-8号墳の馬蹄形溝の遺物と接合した。体部は高さのやや低い球形をしており、最大径は中位にとる。体部上半には2本の沈線がめぐる。体部上半はカキ目調整。体部下半はヘラ削りを行っており、このケズリはカキ目調整に先行する。色調は暗灰色。砂粒を含み、胎土不良。焼成はあまい。

平瓶 (84・87) 84は体部下半の破片であるが平瓶とした。体部最大径は中位より上にくる。体部下半の底部近くはヘラ削り、他はなで調整を施している。底部内面には布痕を認める。色調は灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成はややあまい。87は玄室床面出土の完形品である。頸部は直線的に開き、口端部は尖り気味となる。体部は上半の膨みが大きく、最大径は中位にくる。底部はやや上げ底気味の平底である。頸部から体部上半にかけてカキ目調整。体部下半はなで調整で、底部近くはヘラ削り、色調は淡赤褐色。砂粒を多く含み、焼成は不良。

横瓶 (86) 墓道出土の完形品である。短く外反して立ちあがる頸部に口端部コの字形の口縁部が続く。口縁部下には段がつく。体側部はやや直線的となる。底部は丸底である。体部は縦方向のカキ目調整と不整方向のカキ目状調整が見られる。自然釉の流れ具合から横にたてて焼いたものである。体部の数カ所には他の土器片が癒着する。色調は黒色。砂粒を多く含

み、焼成は良好。

甕 (88) 石室外側の表土層中の採集である。短く外反する頸部に、口端部が尖り気味の口縁部がつく。口縁下には小さな段がつく。器面は横なで調整である。色調は暗灰色。砂粒を多く含み、焼成良好。

土師器 (Fig 70-89・90)

高杯 89は杯部破片である。膨みをもって立ちあがる体部に口端部丸みをもつ口縁部が続く。外面はへら磨き、内面は横なで調整である。色調は黄褐色。砂粒を多く含み、焼成は不良。90は脚部片である。筒部は直線的で、裾にかけて大きく開く。端部は丸みをもつ。筒部は縦へら磨き、内面は横へら削り、他は横なで調整である。色調は赤褐色。砂粒を含み、焼成はややあまい。

武器 (Fig 79-1~3)

刀 1は2か3に伴う金具である。断面卵形の長径は 3.1cmある。2は推定全長28.6cm。両開式の小形の刀で、刃部側の開部が鋒に近い。刃部最大巾は 2.7cmある。茎部の断面は台形となる。3は刃部の一部を欠くがほぼ完形品である。茎部に鏝をのせたままの出土である。両開式で背部側の開巾が大きい。刃部最大巾は 2.8cmある。茎部は 9.0cmあり断面は長台形となる。鏝の形は平面が卵形、断面は長方形である。



Fig 16 雪の浦谷古墳群

5. E群の調査

D群ののる丘陵の尾根に立地する1群である。3基の古墳で形成されており、1基は石材と溝を残すのみで消滅しており、2基の古墳について調査を実施した。

1) E-2号墳

E群の中央に位置し、標高54mの尾根線上にある。調査時には天井石の一部が覗いている状態であり、墳丘は流失していた。石室を取り巻く溝状遺構は認められなかった。

(1) 主体部 (Fig 49)

石室掘り方は南北に長軸をとり、 $2.3 \times 1.8m$ の楕円形の掘り方となる。掘り方の深さは0.8mである。石室は石棺系の小型壺穴式石室と呼ばれるもので、南側天井石の1石が抜かれている。石室平面形は北側の巾がやや狭くなる。壁体は短側壁1石、両側壁3石ずつの石材を横長に据えて腰石としている。腰石から上には塊石を横積みにより2～3段おいて、石材間を小礫で目張りし、その上に4石の天井石がのる構造である。床面は大小の大きさの敷石がある。

(2) 出土遺物 (Fig 79)

石室床面より刀子1点と鉄鏃2点が出土している。

武器 (Fig 79-1・2)

鉄鏃 1は完形品である。片刃の細根鏃で身の片側に逆棘が1本、身と平行にのびている。身の断面形は二等辺三角形である。箆部の断面は長方形、基部の断面は隅丸方形となる。基部には木質を付着する。全長14.9cm。2は1と同様の型式であろう。

工具 (Fig 79-3)

刀子 刀部から基部の破片である。両側の屈曲は弱い。刀部平面形は湾曲する。基部断面は台形である。基部に木質を付着する。

2) E-3号墳

2号墳の東側の丘陵尾根線上に立地している。調査時には天井石が露出していた。墳丘は流出しており、地山整形面の調査から径7～8mの円墳とわかった。

(1) 主体部 (Fig 50)

石室掘り方は長軸を北西から東南にとり、約3.5mの長さの掘り方である。掘り方の深さは最深部で0.9mとなる。墓道側では2段に掘り込まれている。石室は北西へ開口する壺穴系横口式石室である。玄室平面形は奥壁巾が横口巾よりやや広い長方形となる。壁体の構築は石棺を基本としており、4壁の腰石の高さが同じになるように石材を立てている。腰石から上は塊石を横積みにして6～7段の高さとなる。石材の間には小礫を置いて目張りしている。天井石は6石の板状石がのる。横口部の構造は柵石の上面が玄室床面より45cm高くなって、前庭部床面とつながる。玄門部袖石は、地山から立てられたものではなく、玄室の壁体に寄りかかるように立てかけられている。袖石の前面は塊石を使って貼石状に2～3列、4～5段積まれている。

る。前庭部は段をもって短い墓道につづく。閉塞は欄石上で行なわれ、板石を1板立てかけて、基部を小塊石で控えている。敷石は小礫を使って敷かれたものであるが、全て原位置を失って横目部付近によせられていた。石室内はベンガラが塗布されている。

(2) 出土遺物 (Fig 70)

溝内より須恵器が1点出土している。

須恵器 (Fig 70-91)

甕 口頸部破片である。短く外反する頸部に外面に段のつく口縁部がつく。体部はカキ目調整。内面には同心円文が見られる。色調は赤褐色。砂粒を多く含み、焼成不良。



Fig 17 E-3号墳石室剖面

6. F群の調査

F群は古墳群中最高所の丘陵南側斜面に分布しており、標高は80m近い。古墳5基で1群を形成しているが、1基の古墳については現状保存の処置をとった。古墳の立地は急斜面にのっており、調査時の観察からは墳丘を失っている状態であり、石材の散布により古墳の位置を推定できる程度であった。1・3号墳はすでにブルドーザーによる破壊を受けていた。

1) F-1号墳

F群中最高位にあり、最も西側に立地している。調査時には玄室の位置を防火帯のブルドーザーが走り、大半を破壊してしまっている。墳丘そのものもほとんど残っていない状態であり、地山整形面の調査によっても古墳の規模は明らかにできなかった。

(1) 主体部 (Fig 51)

石室掘り方は長軸を南北にとり、玄室部では隅丸方形に掘られ、羨道部側は途中で自然傾斜面に消えている。石室は長軸を南北にとる単室の横穴式石室である。石室平面形は奥壁巾が玄門側巾より少し広い方形に近い長方形となる。腰石は3壁とも2石ずつ使ってたてており、腰石から上は横積みしている。床面は奥壁側が荒らされているが玄門側には小礫が敷かれている。袖石は右袖を失っているが両袖式のもので、各1石を縦長に据えている。羨道部は左右とも4石ずつを縦および横に据えている。羨道部には貼石が左羨道側に3列見られる。掘石は羨道部中ほどに2列に板石を置いている。敷石は玄室から掘石まで敷かれている。羨道部に墓道が短く付設し、前面は自然傾斜面に消えている。

(2) 出土遺物 (Fig 70、Fig 79)

墓道から須恵器が、玄室埋土中から鉄器が出土している。

須恵器 (Fig 70-92)

長頸蓋 口縁部が歪んでいるが完形品である。頸部はやや直線的に開き、口縁部はさらに外反し、口端部はやや下方に引き出され、端部は丸くおさまる。体部は上半部の肩が張り、体部の最大径は中位より上にくる。底部は平底で高台が外側下方へ引き出される。端部は段がつく。体部上半はカキ目調整後横なで調整、体部下半の底部近くをヘラ削り、その他は横なで調整を施している。色調は灰黒色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

武器 (Fig 79-1~4)

鉄鏃 1は異形の平根鏃である。小さな楕形の頸部は右側へL字形に屈曲している。頸部の断面は両刃形、莖部の断面は長方形である。3・4は頸部形が楕形をした平根鏃である。莖部の断面は薄手の長方形、茎部の断面は長方形である。4の頸部巾 3.6cm。

2) F-2号墳

F-1号墳の東南5mに隣接する。調査時には自然地形を思わせ、わずかに石材が露出している程度で、墳丘は全て失っている。トレンチ調査によっても古墳の規模は明らかにできなかった。

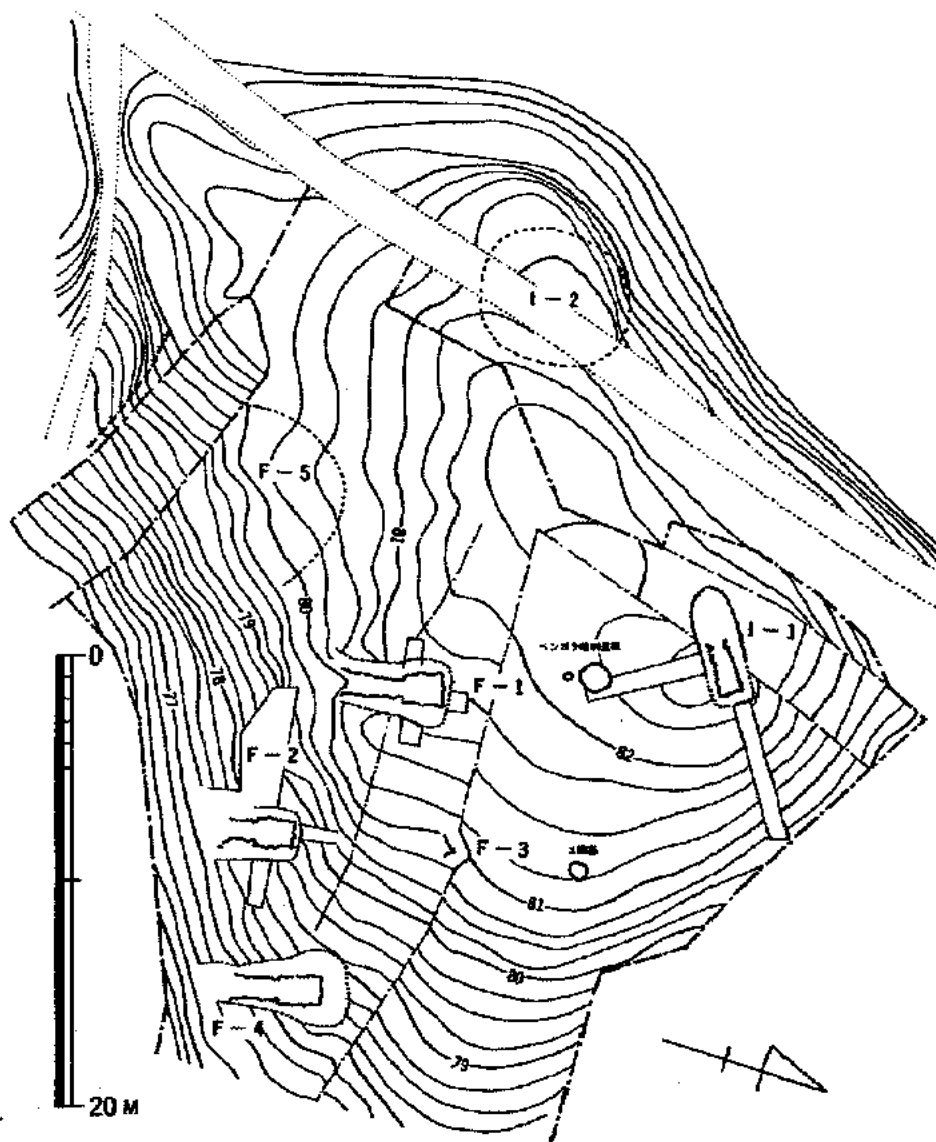


Fig 18 F・1群地形測量図 (1/300)

った。

(1) 主体部 (Fig 52)

石室掘り方は長軸を南北にとり等高線と直交するように掘られており、羨道部前面では自然傾斜面に消えている。奥壁の掘り方の深さは3段目の石積みの高さとなる。石室は単室の横穴式石室である。石室平面形は長方形で、床面は小礫が敷かれている。壁体は奥壁に2石、左右に2石ずつの腰石をたてており、腰石から上は石材を横長に使った積み方である。玄門部は袖石を縦長に置いた両袖式で、袖石間には3石の平石が置かれ、梱石となる。羨道部は平面形が途中で左右に開いており、羨道部前半は天井石の乗らない前庭部をつくる。墓道は短く、途中で自然傾斜面に消えている。閉塞は梱石の前面で行われ、塊石で4列に置かれ、現状では2段積みまで確認した。石材は礫岩と花崗岩が多く使われている。

3) F-3号墳

F-2号墳の背部に位置している。調査時にはブルドーザーによって大半を削られており、側壁の石材が露出していた。墳丘は全くなく、地山整形面での規模も明らかにできなかった。

(1) 主体部 (Fig 53)

石室掘り方は長軸を東北から西南にとるものと思われる小型の石室であろう。石材は礫岩と花崗岩を使って横長に置いて腰石としている。床面は小礫が敷かれている。

4) F-4号墳

F-2号墳の東側に並んで立地する。調査時には主体部上をブルドーザーが走っており、大半を破壊されていた。墳丘および地形整形面の調査はできなかった。

(1) 主体部 (Fig 54)

石室掘り方は南北に長軸をとる、丘陵南側の急斜面を掘り込んでおり、墓道の掘り込みは途中で自然傾斜面に消えている。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は正方形に近い長方形である。壁体は奥壁2石、左右側壁各3石を横長に置いて腰石としている。腰石から上は石材を横積みしている。床面は小礫が敷き詰められている。玄門部は両袖となり、羨道部は袖石を含めて3石ずつ縦長に石材を置いている。左羨道部壁の前面には4列の貼り石が置かれている。閉塞は羨道部の途中で行われ、塊石を使って5列3段まで積まれている。墓道は1.5mほど付設したあと自然傾斜面に移る。石材は礫岩と花崗岩がほとんどである。

(2) 出土遺物 (Fig 71、Fig 79)

玄室床面から3点の須恵器と墓道から8点の須恵器が出土した。鉄器は玄室床面より1点出土している。

須恵器 (Fig 71-93~103)

杯蓋 (93~95) 3点とも同じ型式のもので口径14.4~15.3cmを測る。天井部は低く平坦化している。体部の口縁部側では屈曲して下方に引き出され口縁部をつくる。95の屈曲は不明

隙となっている。口端部は丸い。天井部の中央につまみがつく。天井部の $\frac{1}{2}$ にヘラ削り、その他の器面は横なで調整。色調は灰色～灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好、95はあまい。

碗 (96～98) 3点とも高台がつくものと思われる。98は口径13.3cmを測る。体部は直線的に開き、口端部はやや尖り気味となる。体部と底部との境は少し明瞭となり、底部は平底である。底部には低い高台がつき、端部は横に引き出される。色調は灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。97の体部は内湾気味に立ちあがって、下半はヘラ削りが施されている。

高杯 (99) 杯部の体部は直線的に開いて立ちあがり、口端部は尖り気味となる。体部と底部との境は明瞭で、小さな張り出しが横へ引き出される。底部は小さく膨み、脚部は短くラッパ状に開き、裾端部は凹みをもった段がつく。裾端部は尖り気味となる。器面は横なで調整で仕上げている。色調は灰色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

平瓶 (100) 玄室床面から高台付碗にのった状態で出土した。口縁部を欠いている。頸部は細く直線的に開く。体部は膨みをもち最大径部分が少し張る。底部は平底である。体部上半はカキ目調整。体部下半の底部寄りをヘラ削り後なで調整。その他の器面は横なで調整。色調は暗灰色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

長頸壺 (101) 完形品が玄室から出土している。101の細長く立ちあがる頸部は外反気味であり、口縁部は外反が強くなり、口端部を丸くおさめて横方向に引き出している。体部は膨み小さく、最大径で屈曲する。底部は平底で体部と底部との境から高台が外側下方に引き出され、端部に小さく段がつく。頸部には上から3本、2本、2本の沈線が3ヶ所にめぐる。体部上半にも2本の沈線が2ヶ所にめぐっている。体部はカキ目調整後なで仕上げ、体部下半はヘラ削り後なで調整を施している。器面は横なで調整で仕上げている。色調は暗灰色。砂粒を多く含み、焼成は良好。器高25.9cm。

甕 (102・103) 102は全体の器形を明らかにできないが、体部の肩が張る部分の直下には、把手が巾2.5cmの広さで上方へ向けて立ちあがっている。この把手の上部は器体につかないものであろう。体部最大径は21.8cmとなる。器面は横なで調整で仕上げている。色調は灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。103は底部片で、短い高台が下方へのびている。体部下半の器面はヘラ削り、その他はなで調整を施している。高台部径13.7cmを測る。色調は灰色。胎土、焼成とも良好。

工具 (Fig 79～1)

刀子 玄室床面出土で推定全長14.6cmを測る。やや細身の刀部は中央部が少し凹んでおり砥ぎ減りしたものと思われる。両開式で刀部側の張りが大きく、両開の部位は同じくらいである。刀部の断面はやや膨みをもつ、茎部の断面は台形となる。木質を付着する。

なお、F-4号墳の東側丘陵尾根線上には石材の散布が見られ、小石室の存在を推定したが

明確にすることができなかった。またⅠ-1号墳の墳裾には円形の土壇が見られたが古墳との
関連を明らかにできなかった。



Fig 19 F群調査前

7. G群の調査

D群ののる丘陵は東へ細長く延びて、標高68~69mの範囲で鞍部をつくる。この鞍部の南側斜面に5基の古墳が分布している。1号墳は40mほど西側に単独に位置するが、ここではG群としてあつかう。いずれも丘陵の急斜面に立地して地山掘り方内に石室が入るのみで墓道はほとんどつかない。石室は全て南へ開口する横穴式石室である。G群の東よりの丘陵尾根上には埴土墳が4基分布している。1号墳から5号墳までの平面距離は80mある。

1) G-1号墳

G群の最も西側に離れて丘陵南側の急斜面に立地する。調査時には、自然地形と変わらぬ状態であり、わずかに石材が露出する程度であった。墳丘は全て流失しており、地山整形面の調査で墳丘規模を追求したがわからなかった。

(1) 主体部 (Fig 55)

石室掘り方は南北に長軸をとり、平面形は方形に近い。奥壁側は地山から1.4mの深さに掘られ、床の平坦面の長さ3mである。石室は南北に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は長方形で壁体の構築は腰石として奥壁に2石、左右側壁に3石ずつ使って置いている。腰石から上には小ぶりの石材を横積みしているが、石材の面は揃っていない。玄室の床面は小礫が敷かれるが、玄門側は荒らされている。袖石は両袖となる。裾石は抜かれたものと思われる。羨道部は短く、羨道部前面は自然傾斜面となる。閉塞は玄門間で行われ、塊石を使って3列3段に積まれている。

2) G-2号墳

丘陵南側の急斜面に立地している。調査時には自然丘陵の地形となって墳丘を流失して、石材の一部が露出していた。石室背部には溝遺構等は認められず、墳丘の規模を明らかにできなかった。

(1) 主体部 (Fig 56)

石室掘り方は長軸を南北にとり、等高線と直交するように掘られている。掘り方の深さは奥壁部で1.6mあり、床の平坦面の長さは約6mある。石室は長軸を南北にとる単室の横穴式石室である。玄室平面形は長方形であるが右側壁長が少し短くなっている。玄室の腰石は奥壁2石、左右壁各3石を使って置かれている。腰石から上は小ぶりの石材を横積みしている。玄室床面は荒らされている。玄門部は両袖となり、袖石の上には1~2段を横積みして裾石がのせられる。羨道部は左側3列、右側4列が立てられている。裾石は羨道中ほどに2石を置いてつくられている。閉塞は裾石上で行われ小塊石が積まれている。羨道部の前面は両側壁とも貼り石構造となって小塊石で床から積みあげた前庭部をつくっている。石室実測図 (Fig 56)の破線には石積みがあった。墓道は傾斜をもちながら東に曲がっており、途中で丘陵傾斜面に消えている。石材には礫岩が多く使われている。

(2) 出土遺物 (Fig 71)

玄室内から須恵器が、墓道から須恵器と土師器が9点出土している。

須恵器 (Fig 71-104~113)

碗 (104) 底径 5.3cmの底部片である。高台は低く、端部は横に引き出される。

長頸壺 (105) 玄室埋土中の出土である。体部上半は膨みが小さく、最大径部で曲曲する。体部下半はやや直線的となる。体部と底部との境から高台が下方へ引き出され、端部は横に引き出される。体部カキ目調整。色調は灰黒色。胎土、焼成とも良好。

甕 (106・107) 106は頸部が短く外反して立ちあがり、口縁部外側に段がつく、体部最大径は中位より上にあり、底部は丸底となる。体部は成形後の調整が粗く凹凸が多い。体部大半はハケ目調整後なで調整、内面は同心円文が見られる。色調は暗灰色。胎土は良好、焼成は不良。107は短く外反して立ちあがる頸部にやや厚手の口縁部がつづき、口縁部外側には弱い段がつく、体部は縦方向の平行タタキ、内面は同心円文が見られる。色調は赤褐色。胎土は精良、焼成不良。

土師器 (Fig 107~113)

碗 (109・112) 109は径が小さく、膨みも浅い。109・112とも器面を横方向のヘラ磨き、内面を横なで調整後放射状に暗文が入る。109・112とも色調は赤褐色。砂粒を含み、焼成は良好。

脚付碗 (108・113) 113は体部が浅く膨んで立ちあがり、口端部は丸みをもつ。脚部は裾へ向かってラッパ状に開き、裾端部は丸くおさまる。碗の器面はヘラ磨き仕上げ内面なで調整。脚筒部は縦ヘラ削り、内面は横ヘラ削り。脚裾は横なで調整。色調は赤褐色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。

皿 (110・111) 2点とも体部は浅く湾曲しながら立ちあがり、口端部は丸い。内面には放射状にのびる暗文がある。器面はヘラ磨き、内面はなで調整。色調は赤褐色。砂粒を多く含み、焼成良好。

3) G-3号墳

丘陵南側急斜面に立地する。調査時には斜面に石材をのぞかせていた。トレンチ調査によって斜面上部に地山整形の跡が見られた。

(1) 主体部 (Fig 57)

石室掘り方は長軸を南北にとり、等高線と直交するように掘られている。奥壁側の掘り方の深さは1.6mで、地山平坦面は長さ4.6mにつくられている。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。石室平面形は長方形で玄門部は両袖である。石材は燧岩と花崗岩を多く使い、壁体は石材を横積みしている。玄門部には4石の平石を置いて細石としている。閉塞は細石上で行なわれ、塊石を使って3列3段に積まれている。墓道は短く丘陵傾斜面に消える。

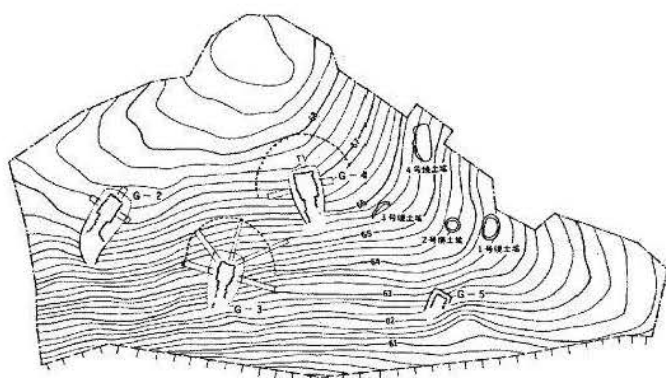
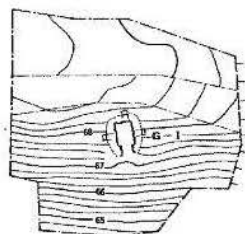


Fig 20 G群地形測量圖 11/200

(2) 出土遺物 (Fig 72, Fig 80)

墓道から土師器が1点、玄室床面から刀が出土している。

土師器 (Fig 72-114)

高杯 杯底部は浅く途中で上方へ湾曲する。脚の筒部はやや直線的となり裾部は大きく開いて端部は丸くおさまる。脚の筒部は縦へラ磨き。その他はなで調整。色調は赤褐色、胎土は砂粒を含み、焼成は良好。

武器 (Fig 80-1~6)

刀 1・2は直刀片で刃部最大巾 2.9cmと 2.5cmを測る。3~5は刀装具。4は透しのある鏝で長径 8.4cmを測る。5の内面には木質を残している。6の直刀片は現存長80.4cm、刃部最大巾 3.5cmを測る。両側で、基部は厚さ 4mmの断面長方形となる。

4) G-4号墳

丘陵南側斜面に立地する。古墳の背後には地山整形面が見られる。墳丘は全て流失している。古墳の形は調査時には自然地形に消えていた。

(1) 主体部 (Fig 58)

石室掘り方はほぼ南北に長軸をとり、奥壁側の掘り方の深さは 1.4mとなり、墓壇の床面は長さ 3mに平坦面をつくっている。石室の平面形は長方形で、両袖をもつ単室の横穴式石室である。壁体は腰石に大きめの石材を立て、その上には石材を横積みしている。玄室床面は奥壁側が荒らされているが、小礫を敷きつめたものである。玄門間の榧石は存在しないが、抜かれたものかどうかは不明。羨道部は腰石のみ残しており、羨道部前面は自然傾斜面に移っている。石材には花崗岩が多く使われている。

5) G-5号墳

G群中最も東側の丘陵南側斜面に立地している。調査時には石材が露出する程度であり、墳丘は流失しており、調査においても、古墳の規模は明らかに出来なかった。

(1) 主体部 (Fig 59)

石室掘り方は長軸を南北にとり、奥壁側での掘り方の深さは 0.7mあり、長さ 2mの地山平坦面をつくりだしている。石室は南へ開口する横穴式石室である。石室前半の構造は崩壊しており、不明である。石室は腰石のみで、石材も小ぶりであり、小型の石室となっている。敷石の有無は不明。石室前面は自然傾斜面に移っている。

(2) 出土遺物 (Fig 72)

石室内左側壁際から須恵器が2点出土している。

須恵器 (Fig 72-115・116)

埴 2点とも同じもので頸部は内傾して短く立ちあがる。体部は最大径が中位より上にくる。底部は平底となる。器面は風化しているがなで調整が施されている。色調は黄灰色。砂粒

を多く含み、焼成不良。



Fig 21 F・G・H群全景

8. H群の調査

F・G群と同じ丘陵にのり、南側斜面に7基が分布している。F・G・H群は同一谷を共有する。調査時には4ヶ所で石材の露出が見られたが、墳丘は全て失われて自然丘陵面に消えていた。

1) H-1号墳

丘陵の高い位置にあり、表土を削いだ時点で発見された。石室上半が失われており、古墳の規模は不明。

(1) 主体部 (Fig 60)

石室掘り方は南北に長軸をとり、奥壁側の深さは0.4mとなる。床面の平坦面は約3mの長さにつくられている。石室は南に開口する横穴式石室で、明瞭な袖石構造をもたない。壁体は小ぶりの石材が使われる。床面には小礫が敷かれている。欄石は置かれていない。墓道は明瞭でなく、羨道部前面から自然傾斜面に移る。

2) H-2号墳

1号墳の南側に位置し、調査時には墳丘を失って自然傾斜面の中に石材が露出している状態であった。表土を削いだ段階での地山整形はみられなく、古墳の規模は不明。

(1) 主体部 (Fig 61)

石室掘り方は南北に長軸をとり、奥壁側では段をつくって深さ約1mに掘られている。石室地山平坦面は長さ4mとなる。石室は南に開口する横穴式石室で、明確な袖石の張り出しをもたない石室構造である。壁体は右側壁の1石が抜かれているが、腰石にはやや大きめの石材を使い、腰石上は横積みされている。玄室と羨道部の石積みは異なっている。玄室床面は小礫が敷かれ、玄門部には細石が2列、9石の小ぶりの平石が置かれている。羨道部の構造は細石のある位置までで、細石前面の側壁の石積みは貼石の構造となる。閉塞は細石直前で行われ、塊石を使って1列4段に積まれている。石室前面は自然傾斜面に移る。

(2) 出土遺物 (Fig 72、Fig 80)

玄室床面から3点の須恵器が出土しており、長頸壺と高杯は右側壁よりに座った状態で出土している。耳環が床面から出土している。

須恵器 (Fig 72)

高杯 (117) 完形品。器形の歪みが大きい。杯の体部は内湾気味に立ちあがり、口端部は尖る。体部と底部との境は小さな段がつく。脚部はラッパ状に大きく開き、裾部に段がつき、端部は下方に引き出される。底部上半にへら削り、その他はなで調整。色調は灰色。砂粒を含み、焼成は良好。

長頸壺 (118・119) 118 は口頸部を欠く。体部上半の膨みは小さく、最大径で屈曲する。底部は平底で、体部と底部との境から短い高台が外側下方へ引き出される。体部上半はカキ目

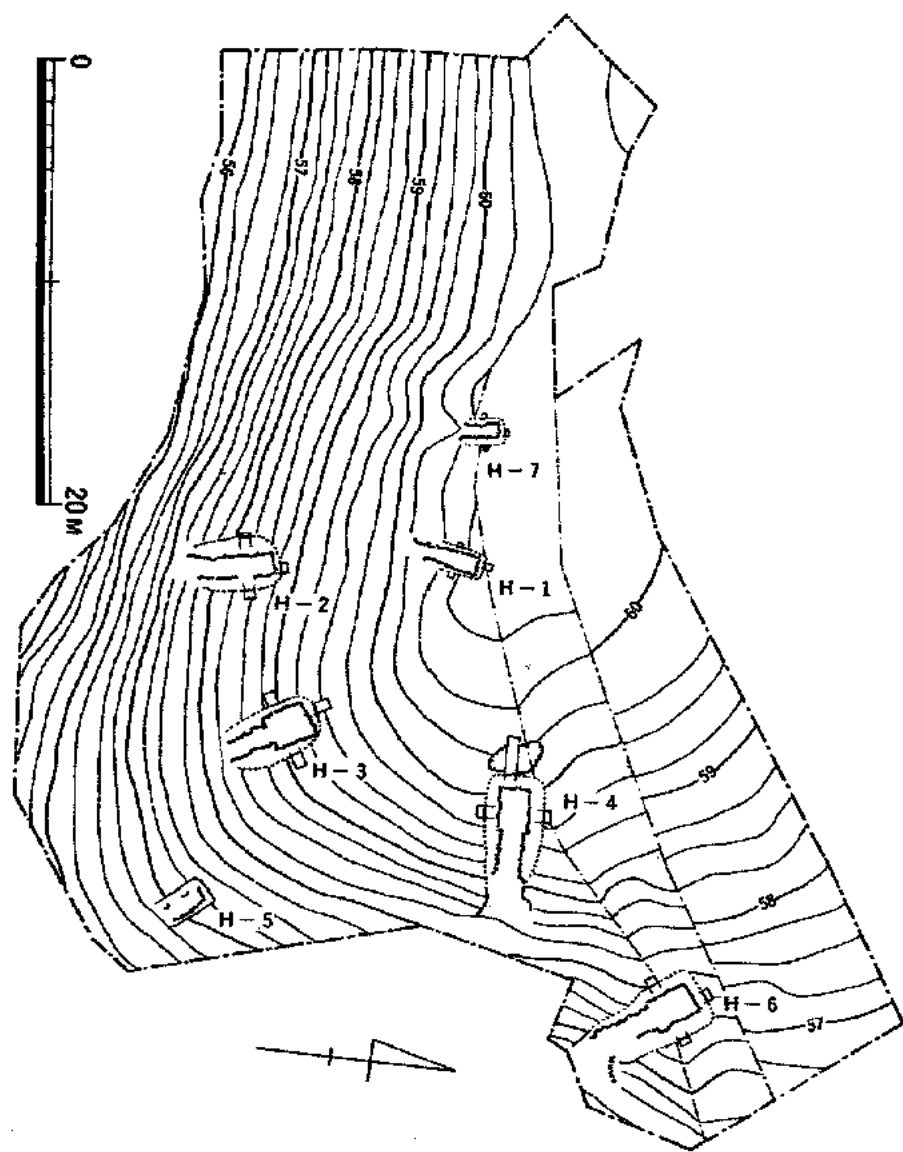


Fig 22 H群地形測量図 (1/300)

調整。体部下半はへら削り後なで調整を施している。色調は灰黒色。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。119 は完形品である。頸部は大きく外反して立ちあがり、口端部は丸くおさまる。口縁下には段がつく。体部の膨みは大きく、最大径は中位より上にくる。最大径部に一条の沈線がめぐり、底部は上げ底となり体部と底部との境からやや薄手の高台が外側下方へのびる。端部は段がつく。体部全面にカキ目調整。色調は暗赤褐色。胎土、焼成とも良好。

装身具 (Fig 80-1)

耳環 径 2.2m。上部の隙間はせまい。断面は偏円形となっている。鉄地である。

3) H-3号墳

2号墳と並んで丘陵南側の緩やかな斜面に立地する。調査時には石材の一部が露出する程度であり、墳丘は失っていた。古墳の規模については、地山整形による馬蹄形溝が見られず明確にできなかった。

(1) 主体部 (Fig 62)

石室掘り方は長軸を南北にとり、地山床面の長さは約4mに掘られ、奥壁側の深さは1mとなる。石室は南に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は正方形に近い長方形となっている。腰石にやや大ぶりの石材を置き、腰石から上には小ぶりの石材を横積みしている。玄門部は両袖となり、前面に羨道部がつづく。細石は羨道部中途に小石材3個を置いてつくられている。床面の敷石は小礎を使って、玄室から細石まで敷かれている。閉塞は細石上で行なわれており、小石材を使って3列5段に築かれている。羨道部前面は自然丘陵面となり、明確な竈道はない。

(2) 出土遺物 (Fig 72)

羨道部細石の前面の右側壁際に須恵器が1点出土している。

須恵器 (Fig 72-120)

長頸壺 口縁部を欠いているが、頸部はゆるやかに開いて立ちあがる。体部の膨みは小さく最大径で屈曲する。底部は平底で、底部と体部との境から短い高台が外側下方へのびる。端部は段がつく。色調は黄灰色。胎土に砂粒を含み、焼成は不良。

4) H-4号墳

3号墳と同じ等高線上の丘陵東側斜面に立地する。調査時には石材の一部が露出するのみであり、墳丘は失っていた。地山整形面での区画は見られず墳丘の規模は不明である。

(1) 主体部 (Fig 63)

石室掘り方は長軸を東西にとり、地山平坦面は約3mの長さに掘られ、奥壁側の深さは1mとなる。石室は東に開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は長方形で整っている。壁体はやや大ぶりの石材を腰石とし、腰石上には小ぶりの石材を横積みになっている。玄室床面には大小の礎が敷かれている。玄門部は両袖で、玄門間には2石を横に置いて細石としている。

羨道側は中途から貼石となっている。羨道部前面には墓道は付設されず、丘陵斜面に消える。

(2) 出土遺物 (Fig 72)

墓道より須恵器と土師器が出土している。また、墓道埋土中を掘り込んで、須恵器が埋められていた。この埋甕について後述する。

須恵器 (Fig 72-121)

平瓶 完形品である。短く直線的に開いて立ちあがる頸部に、外反する口縁部がつく。端部は尖り気味となる。体部の膨みは浅く、最大径は中位より上にきて屈曲する。底部は平底となる。体部上半はカキ目調整後などで調整。色調は灰色。砂粒を含み、焼成はややあまい。

土師器 (Fig 71-122)

高杯 杯の体部は浅くゆるやかに内湾して立ちあがる。脚部はやや直線的に開いている。杯体部はへら磨き、内面には放射状の暗文が見られる。脚部は縦へら削り。色調は赤褐色。砂粒を含み、焼成はあまい。

5) H-5号墳

3号墳の東側の丘陵南側斜面に立地する。調査時には石材の一部が露出していたが、地形は自然丘陵となっていた。墳丘規模は不明である。

(1) 主体部 (Fig 60)

石室掘り方は長軸を南北にとり、地山平坦面を2mの長さにつくり、掘り方の深さは約0.5mある。石室は南に開口する単室の横穴式石室で、袖石構造をもたない。石材は一律に小ぶりである。床面には小礫が敷かれていたが荒らされている。石室前面には墓道を付設せず自然丘陵面となる。

6) H-6号墳

H群の最も東側の丘陵南側斜面に立地する。玄室は防火帯により破壊を受けており、墳丘は全て流失していた。墳丘の規模は不明である。

(1) 主体部 (Fig 64)

石室掘り方は長軸を南北にとり、地山平坦面の長さは約5mあり、最大の深さは1mとなっている。石室は南へ開口する単室の横穴式石室である。玄室平面形は長方形である。床面には小礫が敷かれている。壁体は腰石にやや大ぶりのものを使い腰石から上には石材を横積みしている。玄門部は両袖の石材が置かれている。玄門部と羨道部中途に2石と1石を置いて2ヶ所の細石構造をつくっている。羨道部前面には墓道が付設されず、自然丘陵面に移る。

(2) 出土遺物 (Fig 73)

須恵器が3点玄室内から出土している。この中の長頸壺1点は口頸部が腰石の下にもぐり込む状態で出土しており、そのしめす意味は不明である。

須恵器 (Fig 73-123~125)

長頸壺 123 は口縁部を欠くが、頸部がやや直線的に立ちあがる。体部は120 より高く膨みも大きい。体部最大径で幅曲する。底部は平底となり、短い高台が外側下方へ引き出され、端部は段がつく。体部下半はヘラ削り、その他の器面調整は風化のため不明。色調は黄灰色。砂粒を多く含み、焼成不良。124 の頸部は緩やかに開いて立ちあがる。口縁部は外反して端部は丸い。体部は球形をして最大径は中位にくる。底部は平底で短い高台が外側下方へ引き出される。体部下半にはヘラ削り。体部上半はカキ目調整、色調は灰黒色。砂粒を多く含み、焼成良好。125 は腰石下に横たわっていたものである。高台部を欠いている。頸部はやや直線的に大きく開き、口縁部は外反して端部は丸い。体部は膨みをもち、最大径は中位より上にくる。底部は平底で、底部と体部との境から短い高台が外側下方に引き出される。頸部に二条の沈線がめぐる。体部上半にはハケ目調整。体部下半はヘラ削り。色調は灰黒色。砂粒を多く含み、焼成は良好。

7) H-7号墳

1号墳の西側に並んで位置している。表土除去後に発見されたもので、墳丘は流失していた。

(1) 主体部 (Fig 60)

石室掘り方は南北に長軸をとり、地山平坦面は長さ約2 mに整えている。掘り方の深さは最深部で0.4 mある。石室は南へ開口する単室の横穴式石室である。小型石室で1・5号墳と同じ形態のもので無袖構造である。石材は小ぶりで板状のものを使用している。床面には小礫の敷石が見られる。掘石構造はもたない。石室前面は墓道を付設せず自然傾斜面に移る。

9. I 群の調査

古墳群中最高位に位置している。I 群は5基の古墳で構成されているが、4基は事業区外となり現状保存された。4基とも、雑木林の中に石材を露出させており、墳丘を失っている。

1) I-1号墳

尾根の頂部に立地しており、最も見晴らしの良い場所である。墓道と前庭部の一部を防火帯により破壊されていた。墳丘は流失しており、地山整形面の調査でも規模は明らかにできなかったが、石室外に古墳に伴う遺構があり、ここを墳裾とすると径10~12mの円墳となる。またトレンチ調査では天井石は地山と同じ高さになっており、ことさらに墳丘を高くしなくても天井石を被うことができる。このことから、墳丘の流失ではなく、墳丘を高くつくっていないと判断できる。以上のことは同時期の他の古墳についても言えることである。

(1) 主体部 (Fig 65)

石室掘り方は東西に長軸をとり、現存長 5.4m、巾 1.9mの大きさである。奥壁側では掘り方の深さは 1.3mある。石室は西に開口する竪穴系横口式石室である。石室平面形は奥壁巾が横口巾より広い羽子板状をしている。壁体の構造は板状の石材を四壁に立てて石棺の構造をつくる。腰石上には塊石を横積みにして、7段の高さとなり、石材の間には小礎で目張りしている。天井石は奥壁側に1枚の板石がのっているが、当初は3石の天井石で構成されていたものである。玄室床面の奥壁際にはやや大ぶりの平石を置いて枕石としている。横口部は、2石の腰石のうち北側の腰石の上に塊石を4段積みあげて片袖につくりあげている。柵石上面と玄室床面の高さは30cmある。柵石と墓道との間の空間に土を埋めて、前庭部をつくっている。横口部前面は1列3段に塊石を中途から積みあげて前庭側壁としている。前庭部には、床面が玄室に向かって下向する墓道が 2.5m付設している。

(2) 出土遺物 (Fig 73, Fig 80)

玄室右側壁の奥壁よりに鉄鍔4点をまとまった状態で出土している。

武器 (Fig 80-1~4)

鉄鍔 1~4は同型式のものでE-3号墳のものと同じ類である。片刃の細根鍔である。身の片側には逆棘が1本6mmほどのびている。身の断面は三角形、筥袈の断面は長方形で、基部の断面は円形ないし隅丸の方形となる。基部には木質を装着し、筥袈よりには桜の皮で巻いてある。3の全長18.8cmである。4は身の平面形が菱形をする両丸造の平根鍔である。鋒を欠いているが残りはいい。筥袈の断面は長方形である。基部には木質を装着し、その上を筥袈近くで桜の皮で巻いている。身の最大巾 3.3cmである。

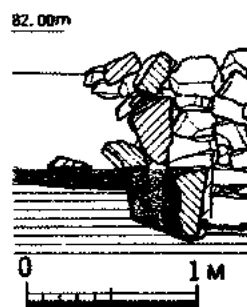


Fig 23

I-1号墳石室閉塞図 (1/40)

10. その他の遺構

浦谷古墳群の調査では、古墳の調査以外に、焼土壇、窯跡、火葬墓、遺物埋納遺構の調査が行われ、古墳そのものとは別の視点での関りをもつ資料が得られた。

1) 焼土壇

G-5号墳の背後の丘陵土面に4基の焼土壇が検出された。

(1) 1号焼土壇 (Fig 24)

掘り方は長軸を南北にとる $1.9 \times 1.25m$ の隅丸長方形の平面形である。床面は平坦で、深さは約 $0.4m$ ある。4隅には数cmほどの小穴があり、床面同様炭化物が埋まっていた。中央部の掘り込みは不自然で木根と思われる。床面から壁体にかけて赤く焼けており、床一面には炭化物が堆積していた。

(2) 2号焼土壇 (Fig 24)

径 $1.15m$ の円形で深さ $0.2m$ 。床面は平坦である。床から壁体は焼けており床には炭化物が見られた。

(3) 3号焼土壇 (Fig 24)

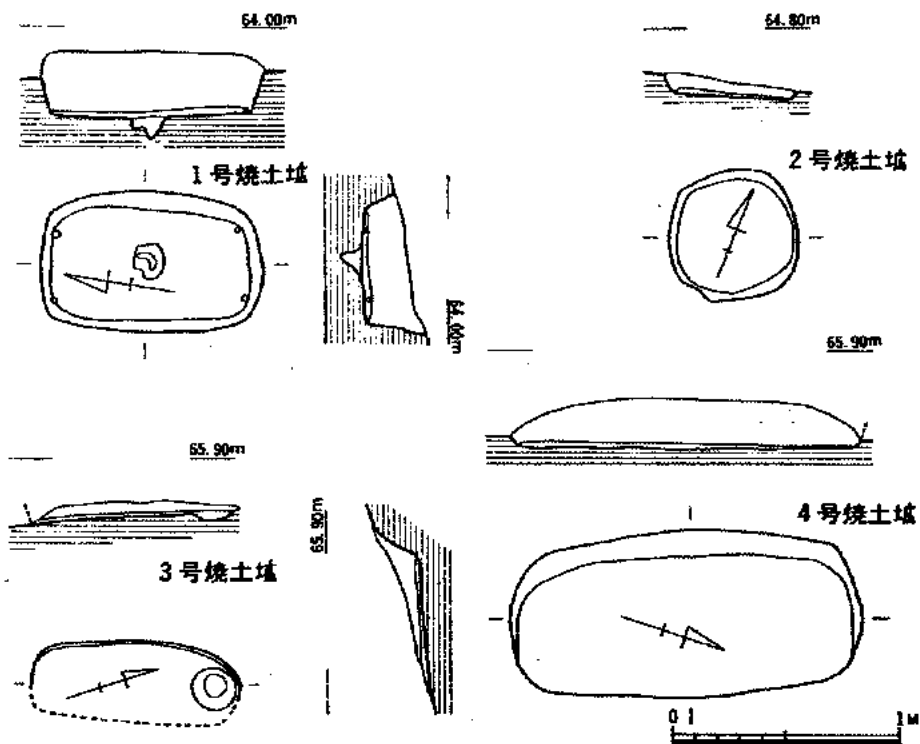


Fig 24 焼土壇実測図 (1/60)

南北に長軸をとる $1.8 \times 0.7m$ の楕円形の平面形をしている。掘り込みは浅く、床面は平坦である。左側には径 $0.4m$ の円形の浅い掘り込みが床面から掘られている。床から壁体は焼けており、床面は炭化物が堆積していた。

(4) 4号焼土壇 (Fig 24)

南北に長軸をとる $3.1 \times 1.5m$ の隅丸長方形の平面形である。床面は平坦で、深いところで $0.4m$ の掘り込みとなる。床から壁体は焼けており、床面には炭化物が一面に見られた。

2) 窯 跡

D-8号墳とD-9号墳の間の丘陵南側斜面に一基存在する。D-9号墳の調査中に発見されたものである。

(1) 遺構 (Fig 25)

焼成部の後半と煙出し部が残っていた。焼成部の天井部はすでに陥没していた。埋土を除去したのち砂混じりの堅い面を検出した。この面は最終焼成面と思われる。床面の土層観察では2回の焼成が考えられるが、煙出し部付近での観察であり、正確とは言えない。中央部の断面を見ると、焼成部の床面は水平面から25度から29度の傾斜をもっている。煙出し部は床面から奥壁をつたって立ちあがるのではなく、窯尻から後方の平坦面に向かって横方向に煙出しが行なわれたのではないかと考えられる。窯尻後方の平坦面の床面は赤く焼けており、とくに窯尻近くの焼け方が強い。窯尻後方の平坦面からは西側に向けて排水溝がのびているが、調査範囲が狭く全体の構造を知るには至っていない。現存焼成部の長さ $2.1m$ 、最大巾 $1.6m$ 。土層断面からD-9号墳より先行する。

(2) 出土遺物

窯尻近くであったため須恵器の出土はなかった。

1基単独であり、遺物のないこともあって、時期の決定は困難だが、東側 $300m$ の位置にIV期の須恵器を出す木山窯跡群があり、あるいはこの窯跡と同時期か、少し先行する時期のものではないかと考えられる。

3) 火 葬 墓

F・I群ののる丘陵尾根線上の標高 $81m$ に立地している。表土除去後1基単独で出土している。

(1) 遺構 (Fig 26)

遺構の上部が少し壊されているが径 $83 \times 72cm$ の楕円形の掘り方の南北にやや長い平面形である。掘り方の中央部に径 $20cm$ 強の平石を置き、その上に蔵骨器を正立させ、その回りを径 $15 \sim 20cm$ 前後の礫で補強している。蔵骨器の上部構造は不明である。蔵骨器の中には炭化物は少なく、むしろ礫の補強部分に炭化物を検出している。

(2) 遺物 (Fig 27)

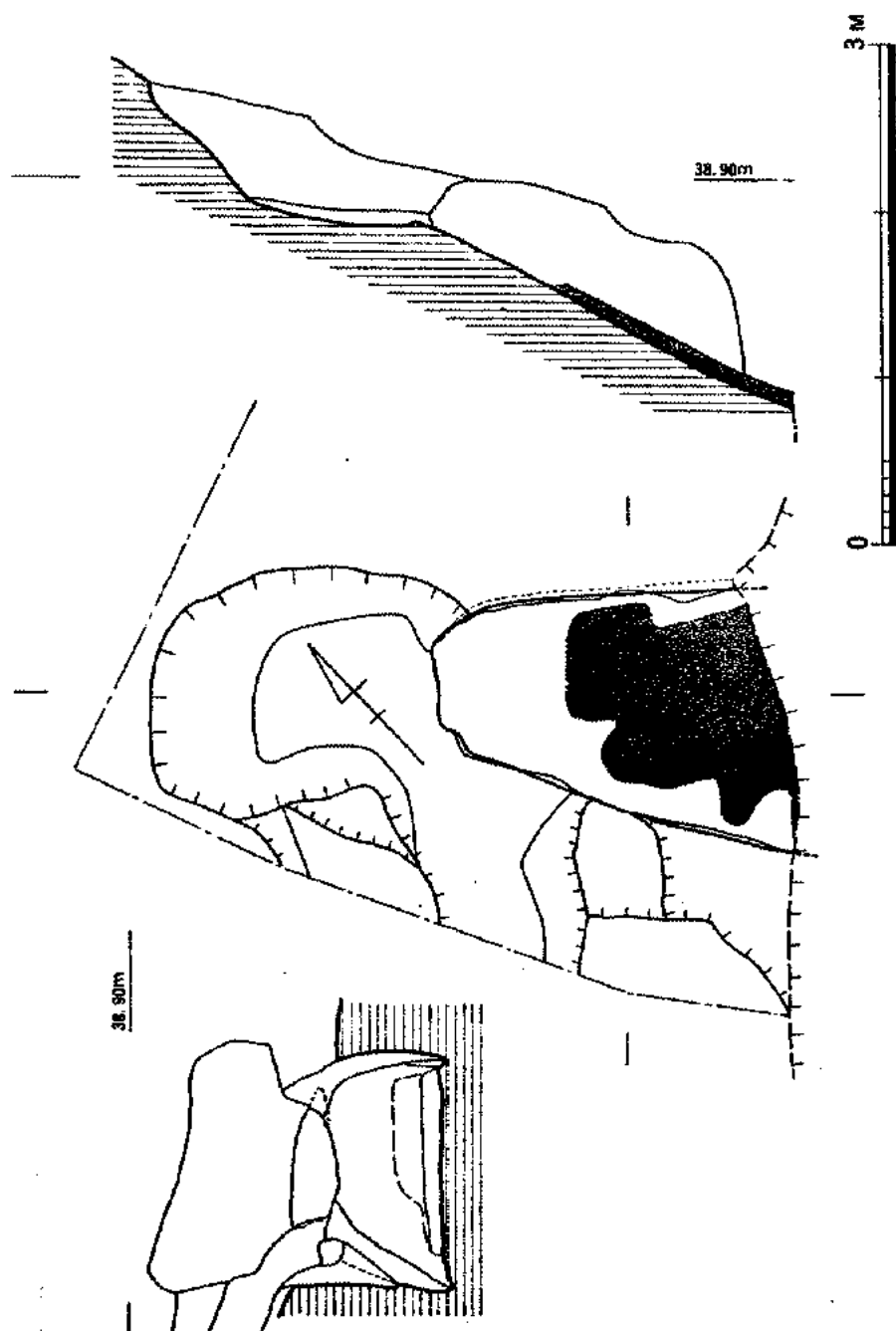


Fig 25 窯跡実測図 (1/40)

体部下半のみを残している土師質の甕形土器である。体部下半は膨みをもって立ちあがる。底部は平底であるが少し膨んでいる。底部と体部の境から高さ2.2cmの高台が外側下方へ引き出される。裾端部に段がつく。体部は横方向のヘラ磨き、内面はヘラを利用したなで調整。色調は赤褐色。胎土精良にして焼成良好。時期は不明であるが、古墳群が墓所としての利用の終わる8世紀以降のものと思われる。

4) 鉄滓埋納遺構

H-4号墳の石室前面の埋土中に位置している。H-4号墳の調査中に発見されたものである。

(1) 遺構 (Fig 28)

埋土中から掘り込まれたと思われるが、調査では地山面での掘り込みのみを確認した。現状では最深20cmの床の丸い掘り込みに須恵器の甕が正立して埋められ、その中に鉄滓1箇が入れられ、さらに土師器の皿で蓋をしたものである。

(2) 遺物 (Fig 29)

須恵器甕、土師器皿、鉄

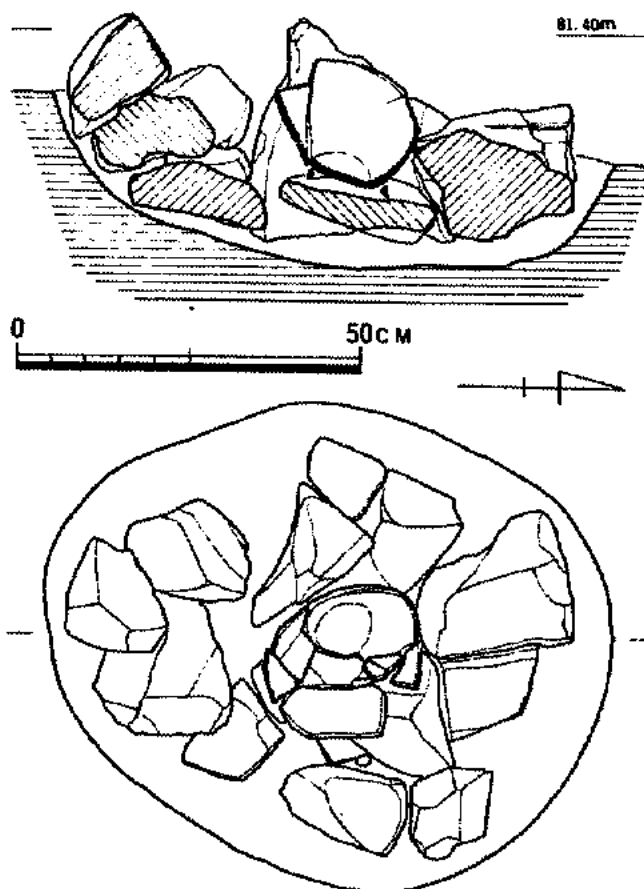


Fig 26 火葬墓実測図 (1/10)

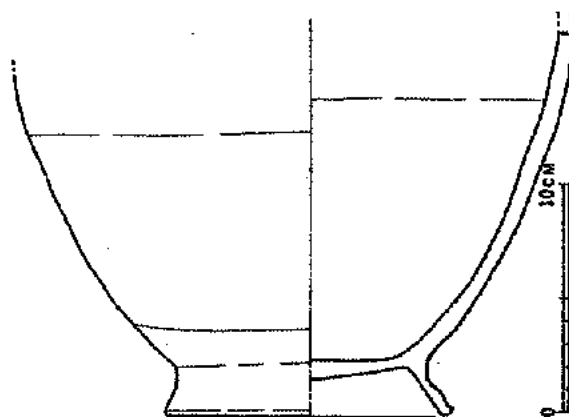


Fig 27 火葬墓土器実測図 (1/3)

澤1点の出土である。

須恵器壺 (Fig 29-2)

完形品である。頸部は短く外反して立ちあがり、口縁部は内側に凹みをもち、外側に面をつくって、口端部が上方に引き出される。口端部は尖り気味となる。体部は膨みをもって最大径は中位より上にくる。底部は丸底である。体部上半の成形後の調整不十分のため凹凸がある。口縁部から体部上半は横なで調整、体部下半は格子目タタキ、内面は同心円文が見られる。色調は暗灰色。砂粒を含み、焼成は良好。

土師器皿 (Fig 29-1) 完形品である。体部は浅く膨み、口縁部は内湾して、端部は丸い。底部はやや平坦化している。器面はなで調整が施されている。色調は赤褐色。砂粒を多く含み、焼成良好。

鉄滓 1個の鉄滓であるが、現在分析中であり、

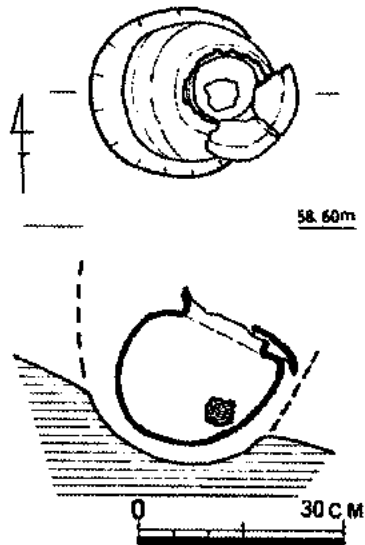


Fig 28 鉄滓埋納遺構実測図 (1/10)

5) ベンガラ埋納遺構

1-1号墳の墳裾に所在する。本来1-1号墳に伴う遺構として捉えるべきものであるが、特殊性を考慮して、単独に記述する。

(1) 遺構 (Fig 30)

1-1号墳の裾部に平面形34×31cmの円形で深さ約26cmの掘り込みをもち、中央部に土師器の甕を正立させて、その中にベンガラを厚さ4cmに入れ、さらに高杯で蓋をしたものである。

(2) 遺物 (Fig 73)

土師器の甕と高杯、それにベンガラを出土している。

土師器壺 (Fig 73-127) 完形品である。頸部は短く外反しており、口端部は丸い。体部は膨みを持ち、最大径は

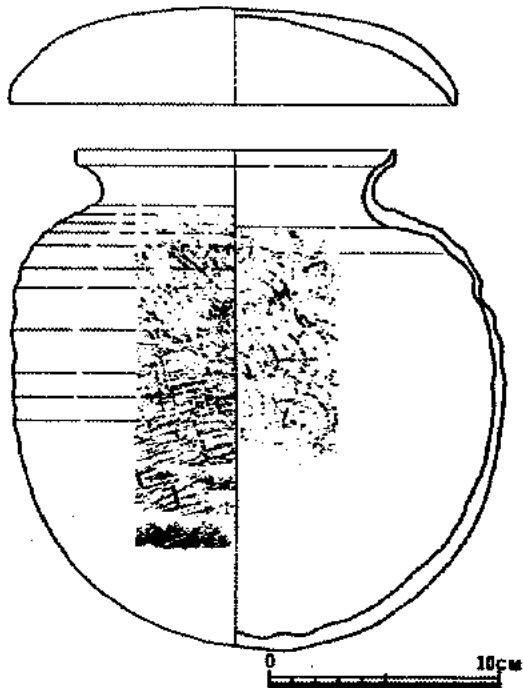


Fig 29 鉄滓埋納遺構土器実測図 (1/3)

体部中位にくる。底部は丸底である。体部にはハ
ツ目調整。内面は右上がりのヘラ削り。色調は赤
褐色。砂粒を多く含み、焼成はややあまい。

土師器高杯 (Fig 73-126) 脚部を欠く。
杯の体部は直線的に開いて立ちあがる。口縁部は
少し外反し、口端部は丸い。体部と底部との境は
明瞭である。底部は平底で厚手となる。器面はな
で調整。色調は赤褐色。砂粒を多く含み、焼成は
ややあまい。

ベンガラ 一握りのベンガラが出土しており
現在分析中である。

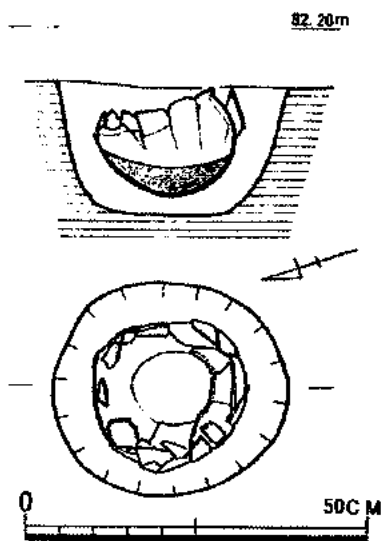


Fig 30

ベンガラ埋納遺構実測図 1 10.

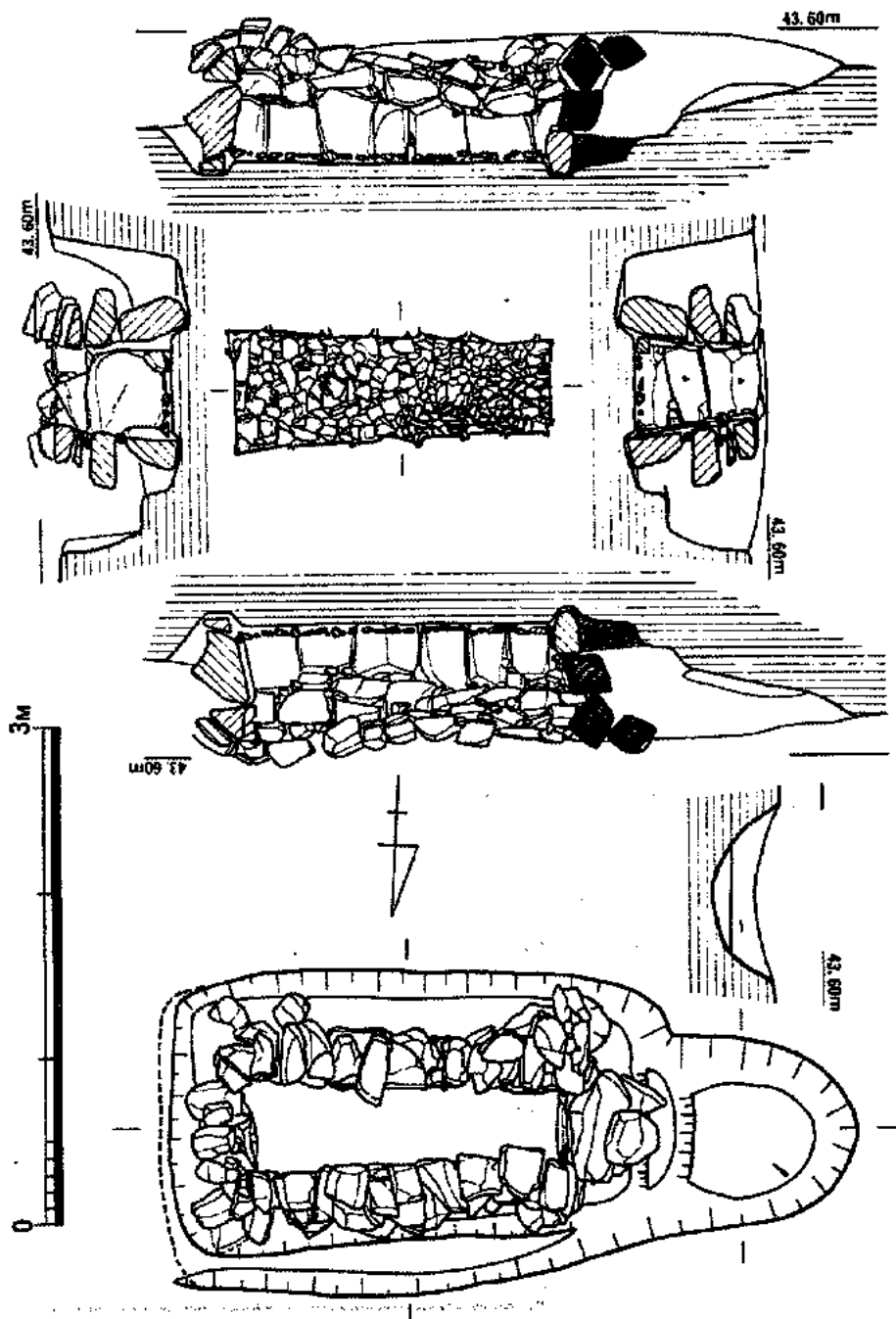


Fig 31 A-3号填石室实测图 (1/40)

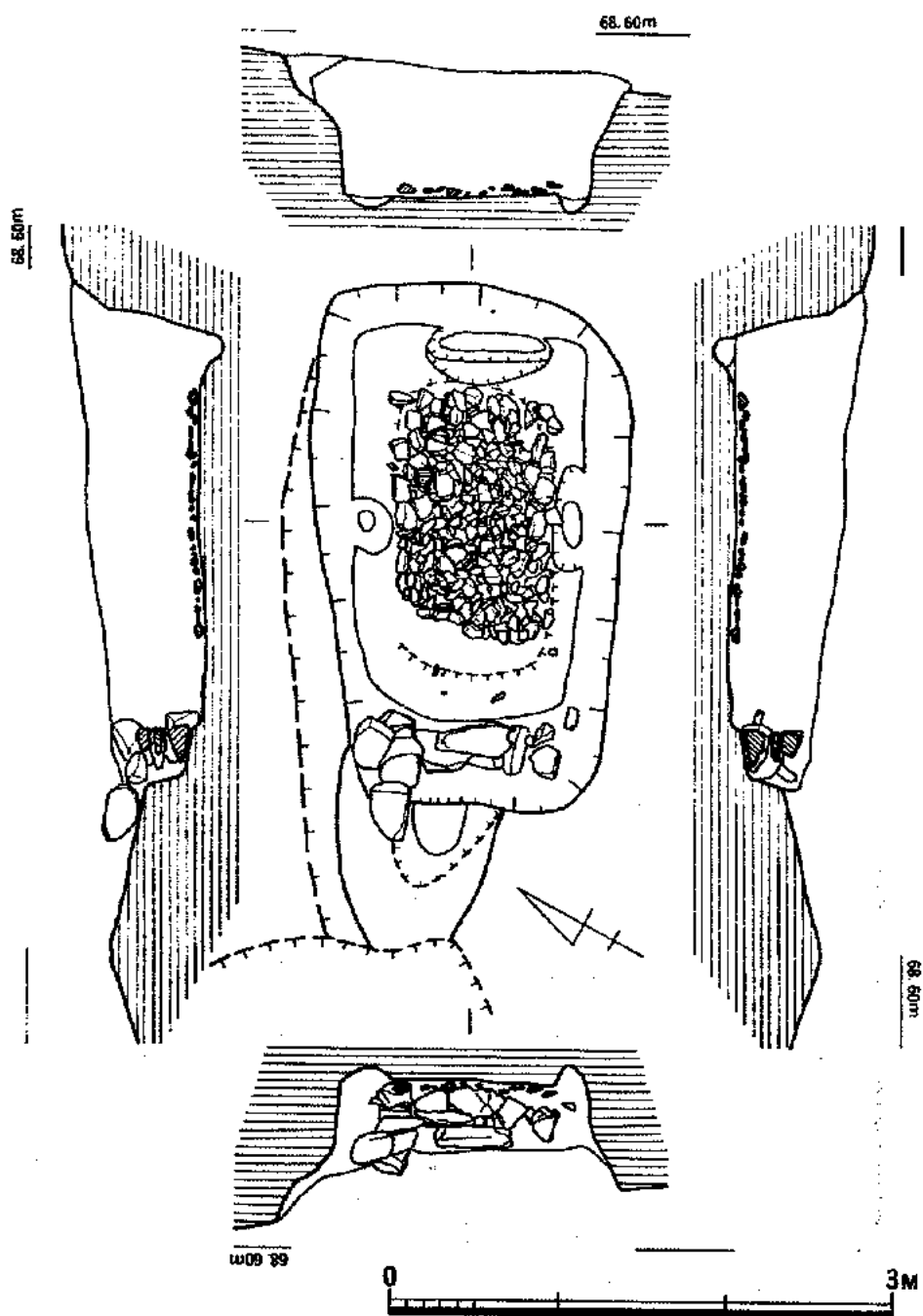


Fig 32 B-1 号填石室实测图 (1/40)

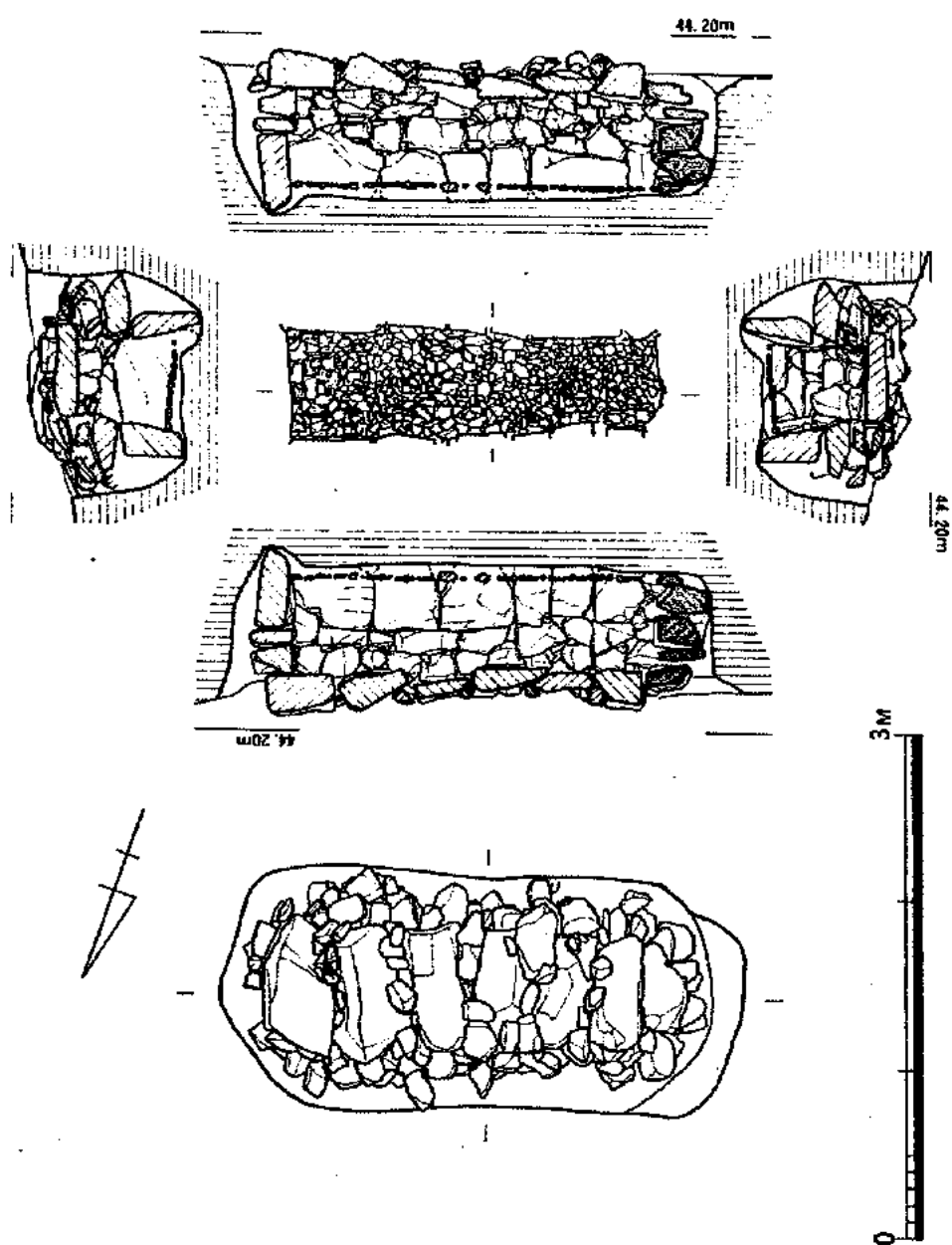


Fig 33 C-1 号填石室实测图 (1/40)

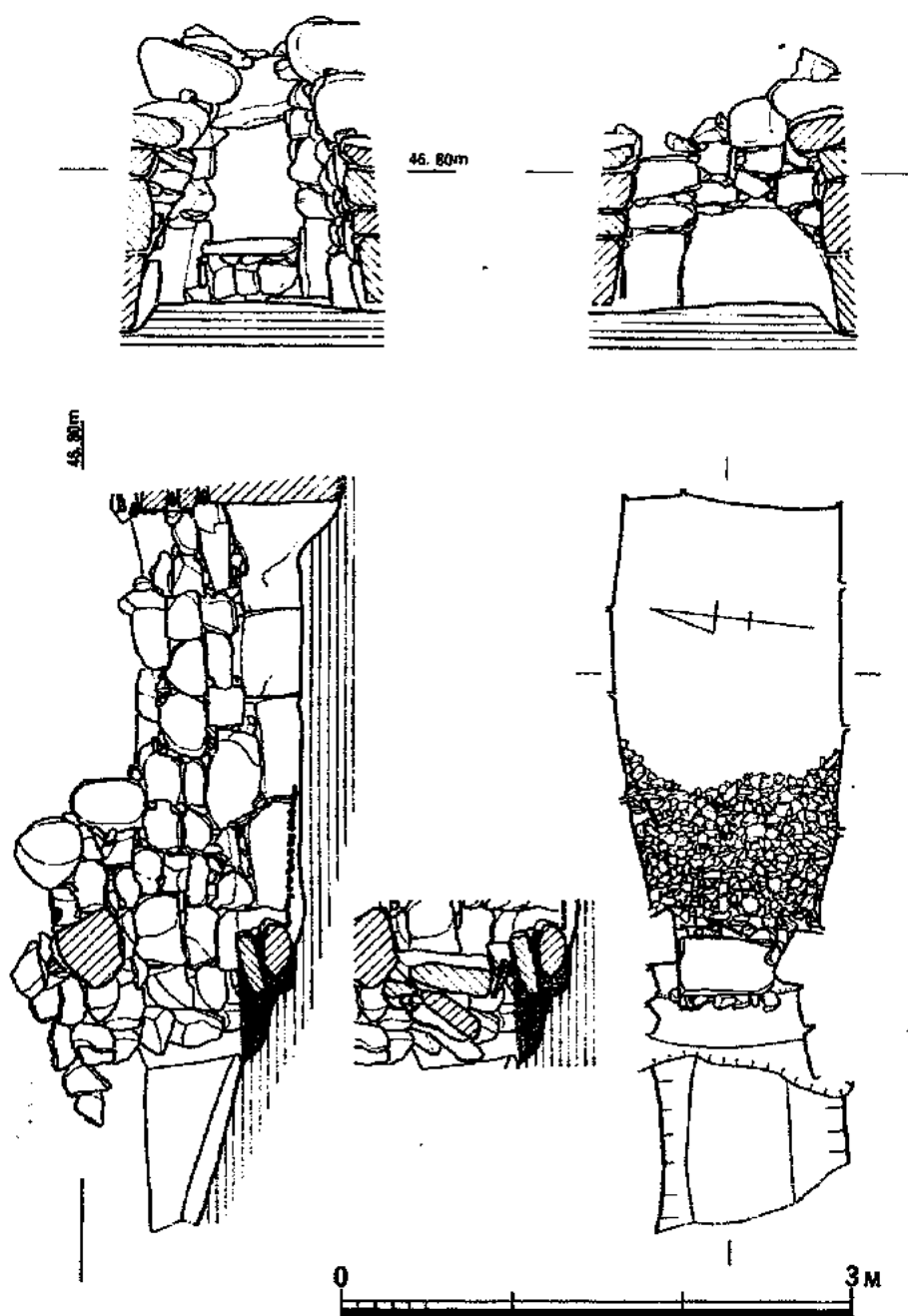


Fig 34 C-2号填石室实测图 (1/40)

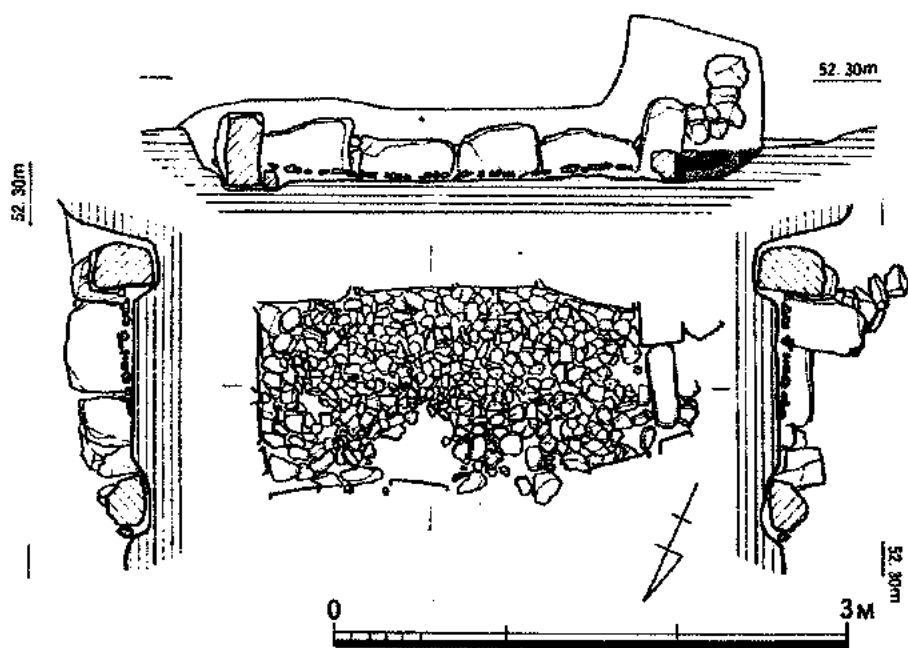


Fig 35 C—3号坑石室实测图 (1/40)

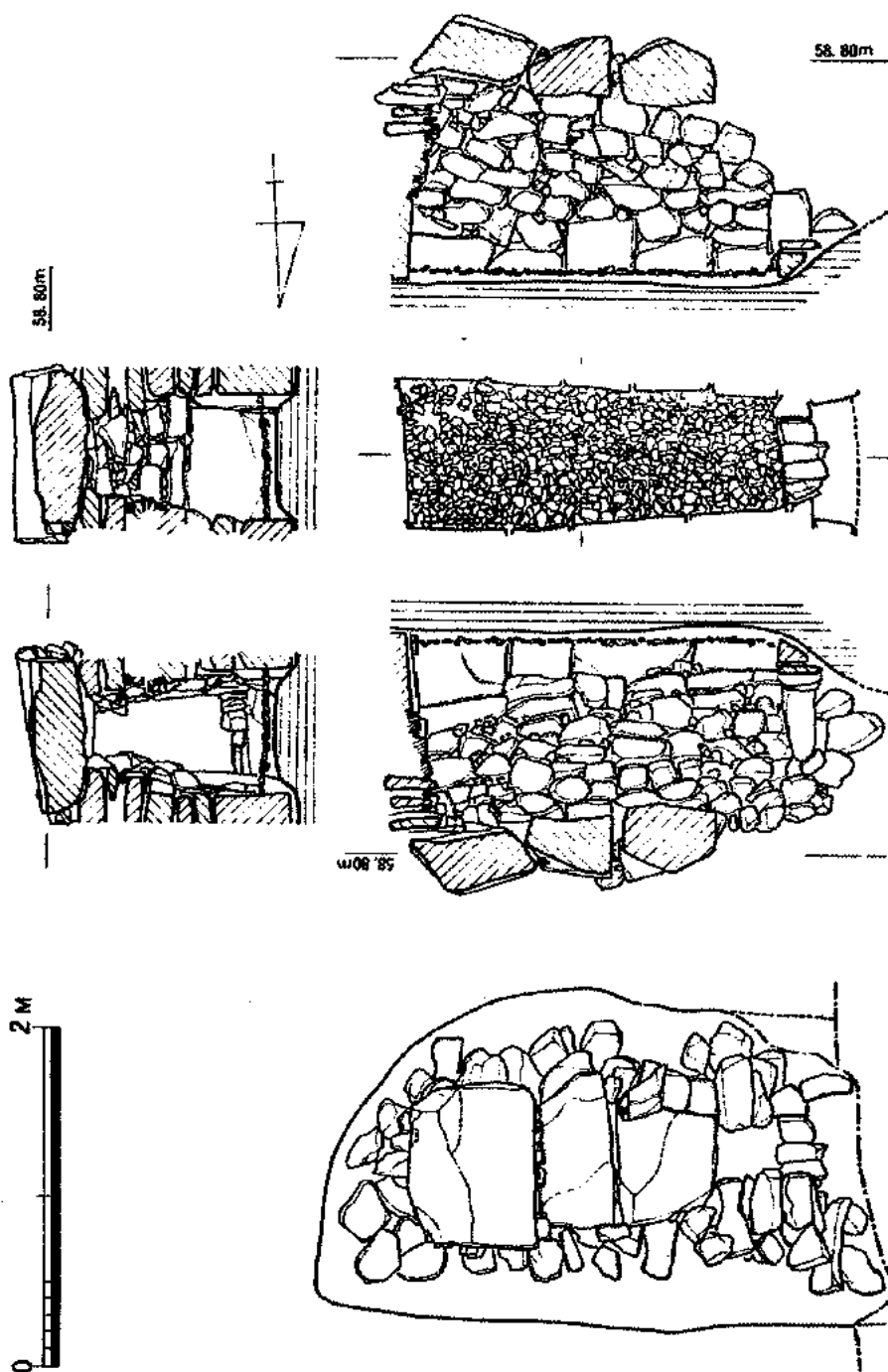


Fig 36 C-4号填石室实测图 (1/40)

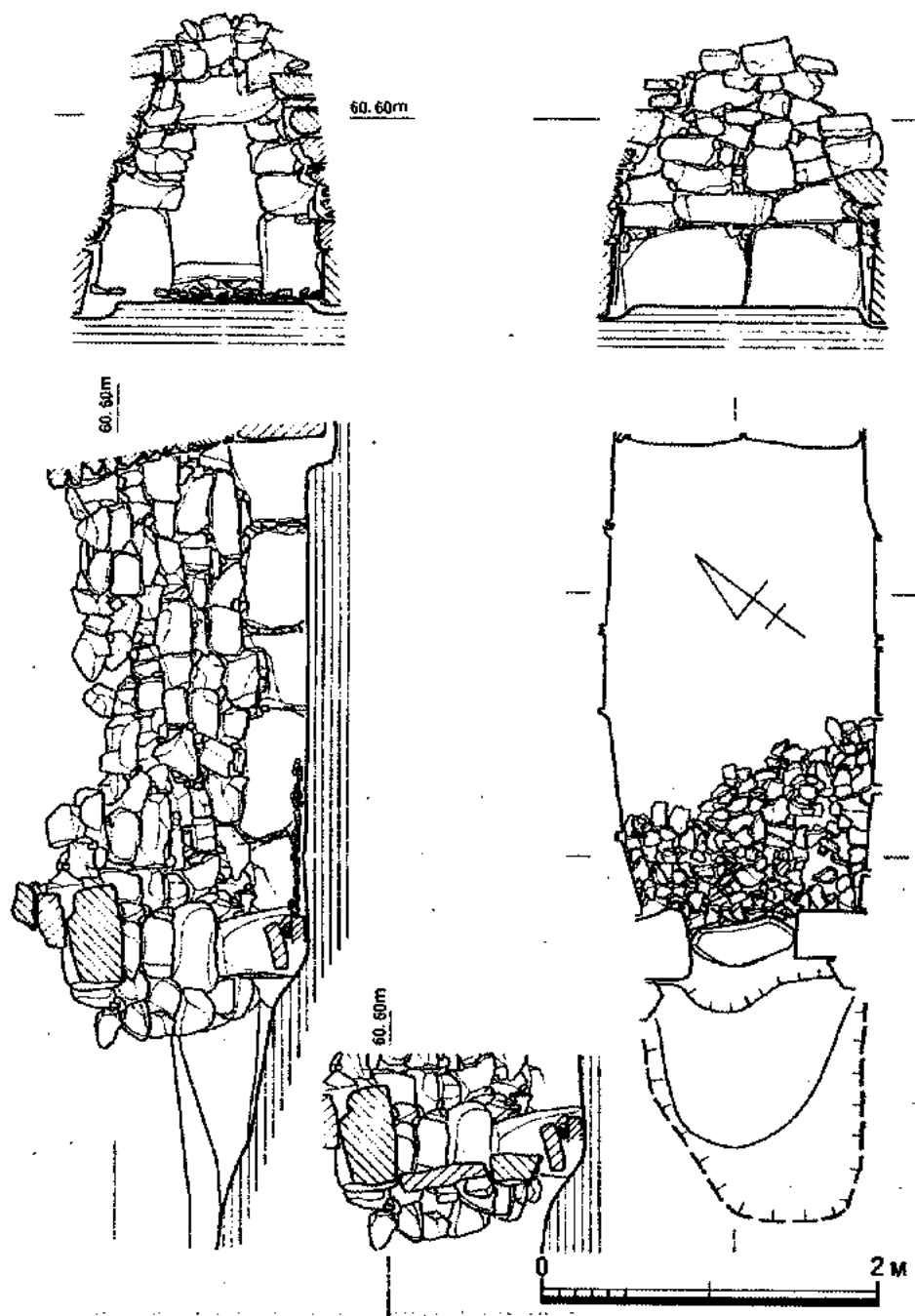


Fig 37 C-5 号墳石室実測図 (1/40)

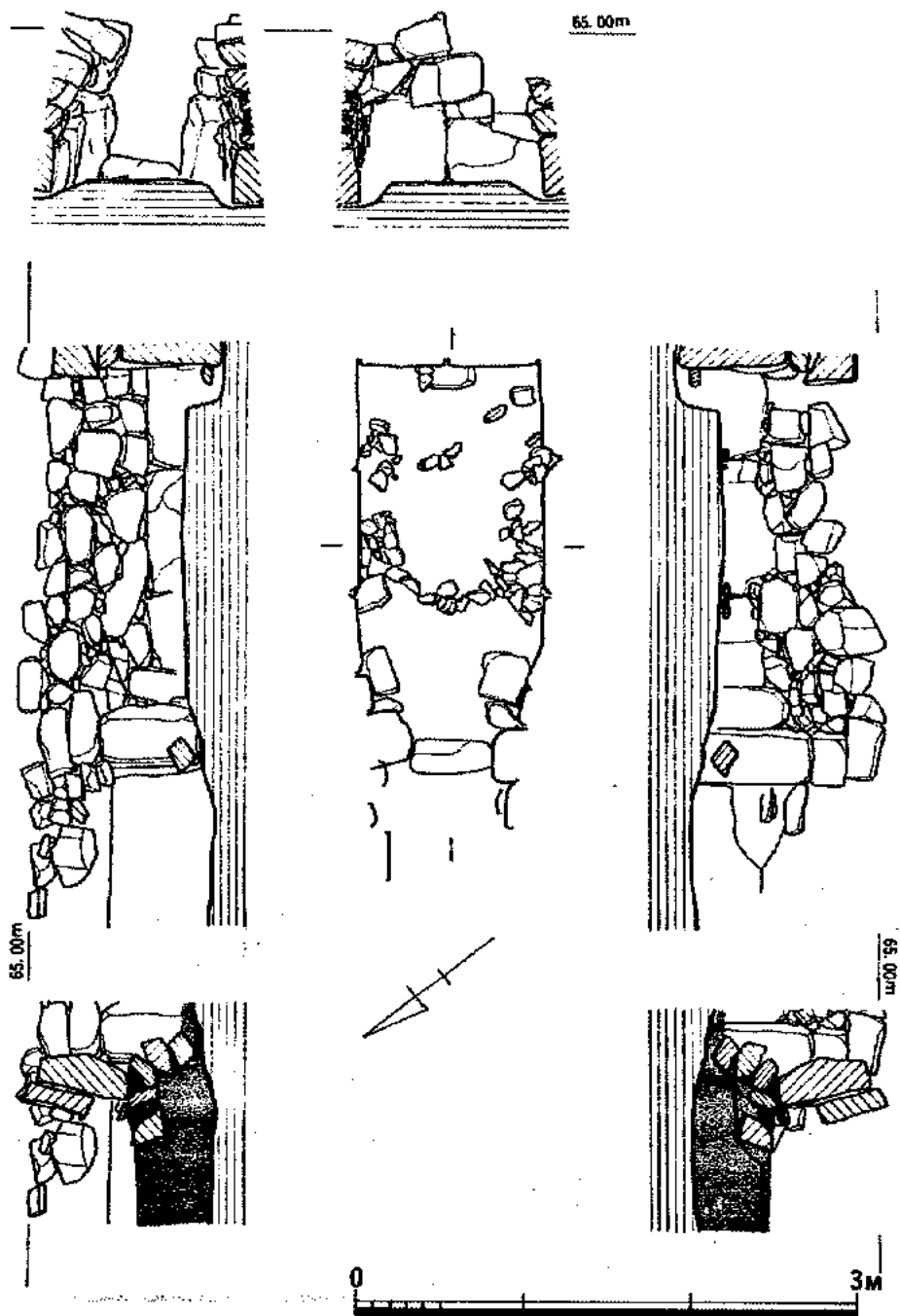
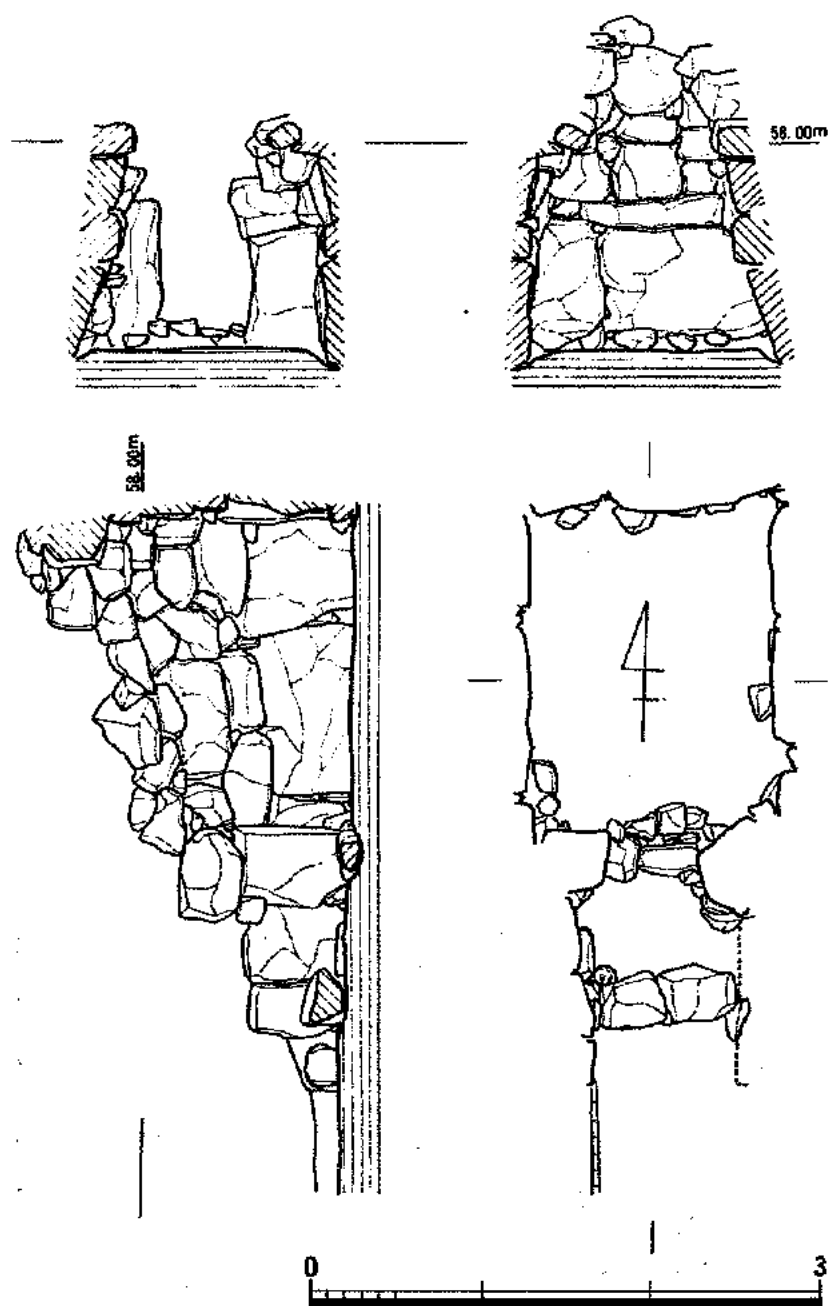


Fig 38 C-6号填石室实测图 (1/40)



D-1号填石室实测图 (1/40)

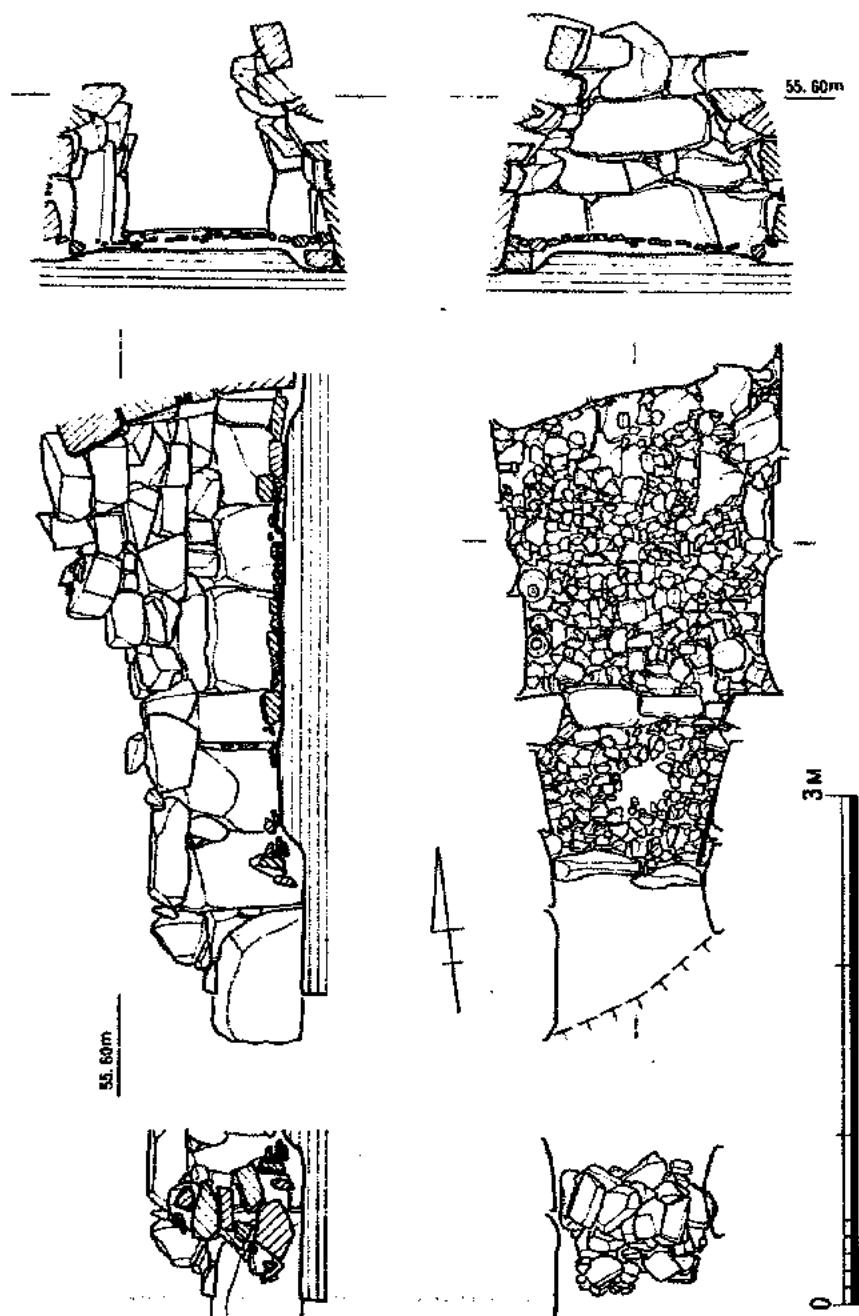


Fig 40 D-2 号填石室实测图 (1/40)

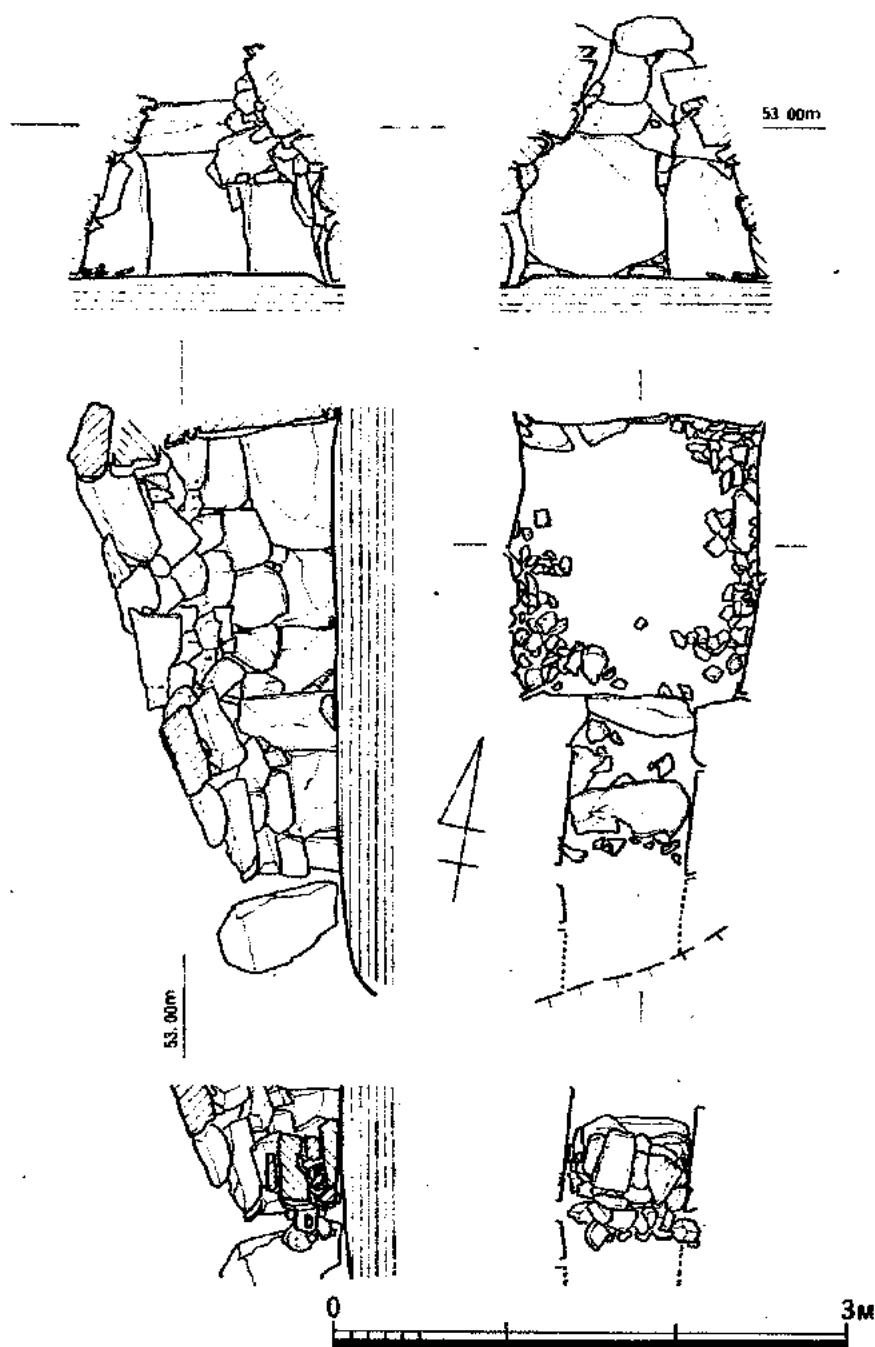


Fig 41 D-3 号填石室实测图 (1/40)

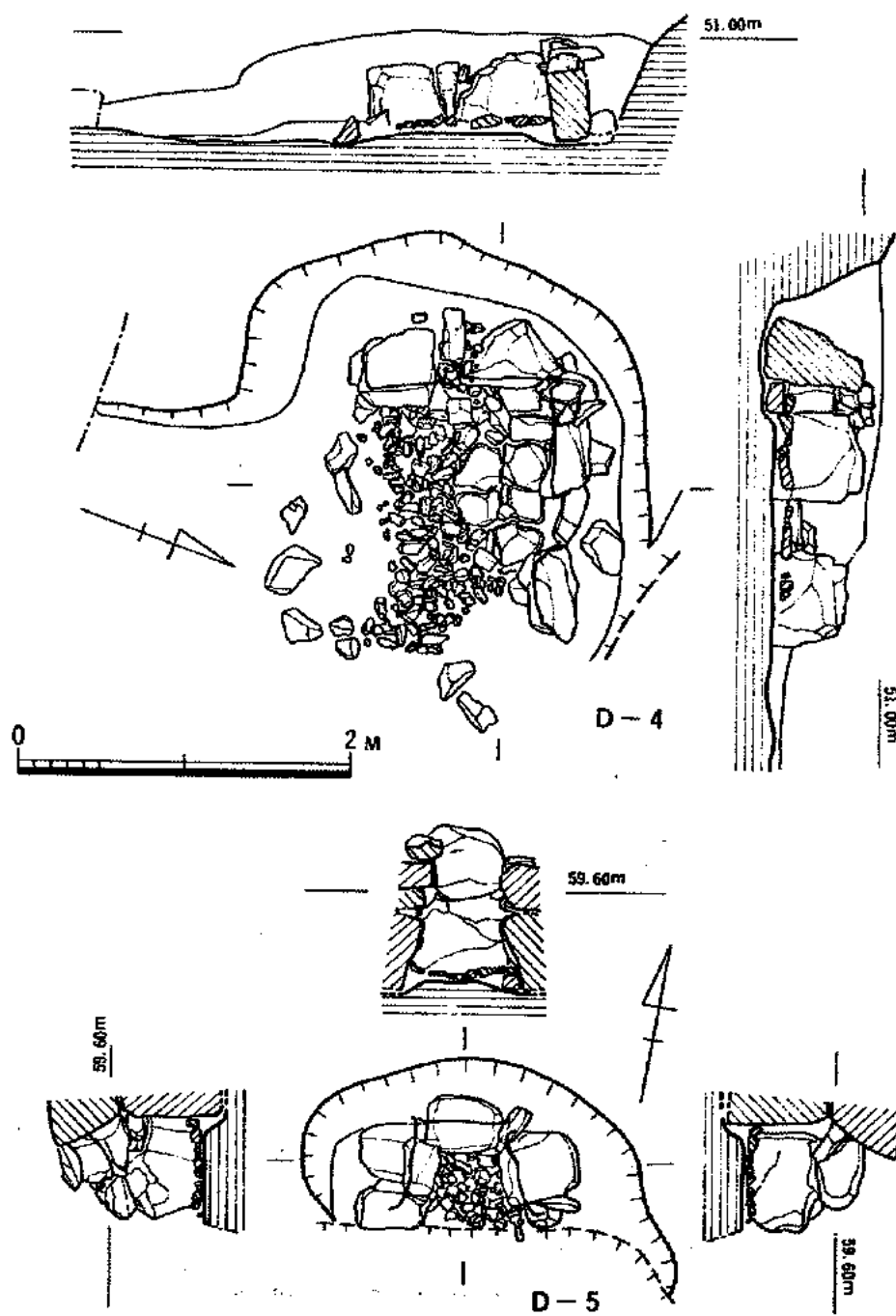


Fig 42 D-4 · D-5 号填石室实测图 (1/40)

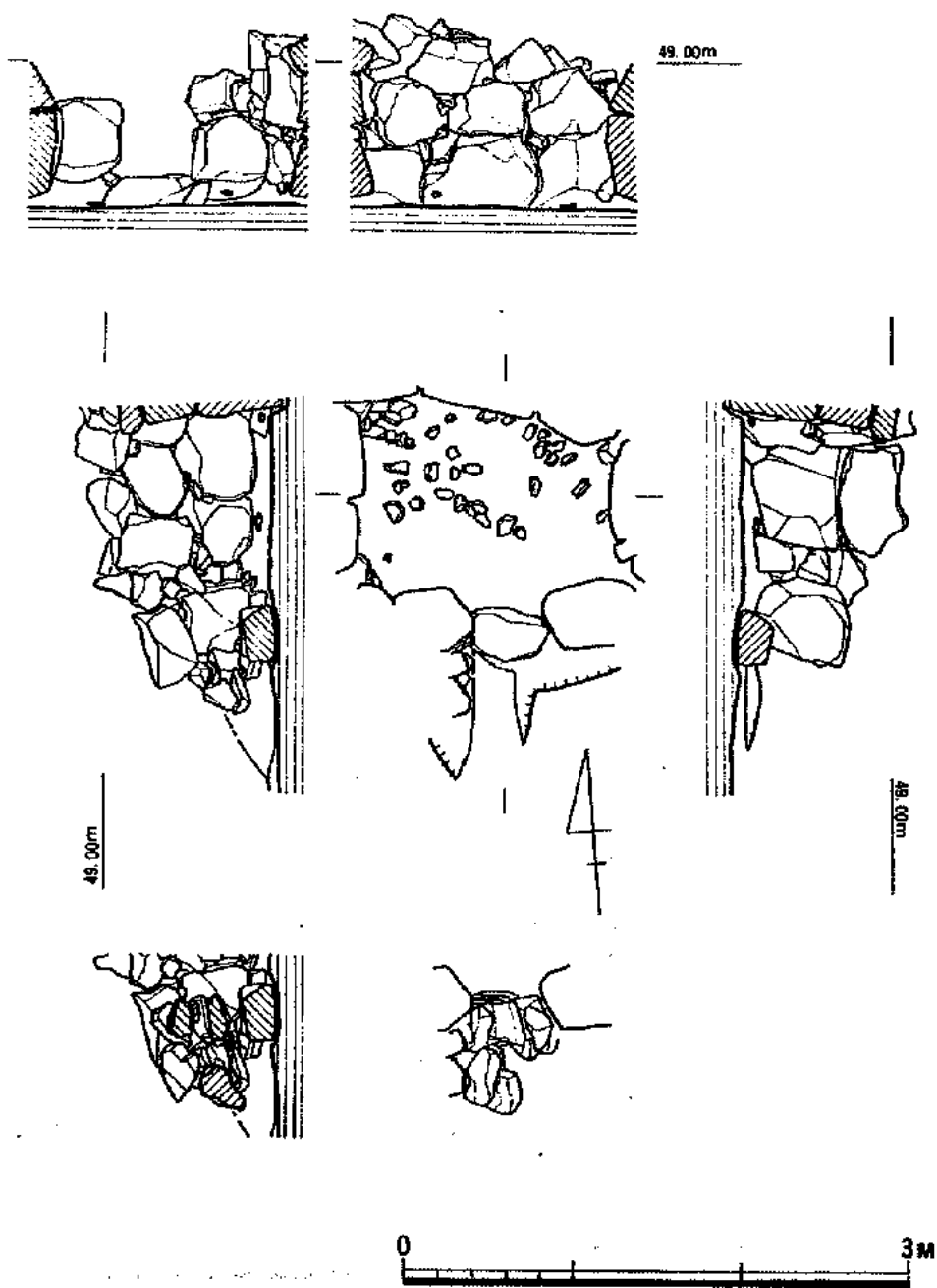


Fig 43 D-6号填石室实测图 (1/40)

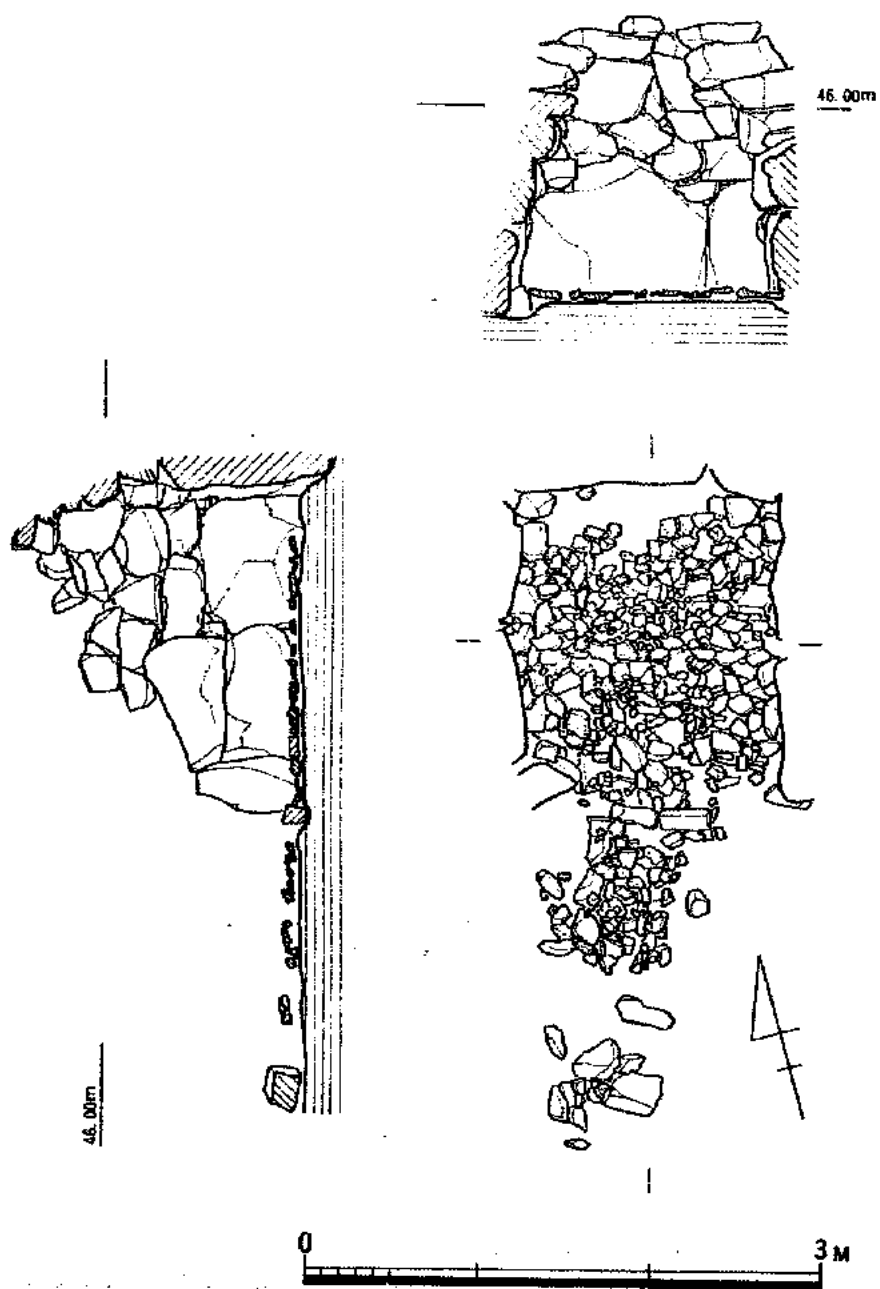


Fig 44 D-7号填石室实测图 (1/40)

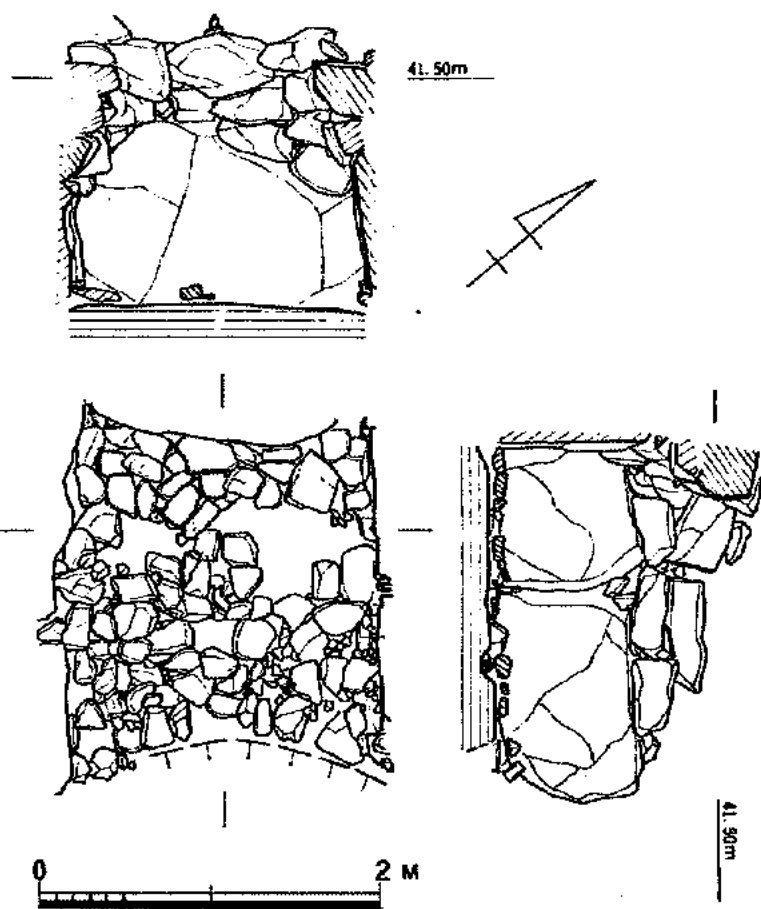


Fig 45 D-8 号墳石室実測図 (1/40)

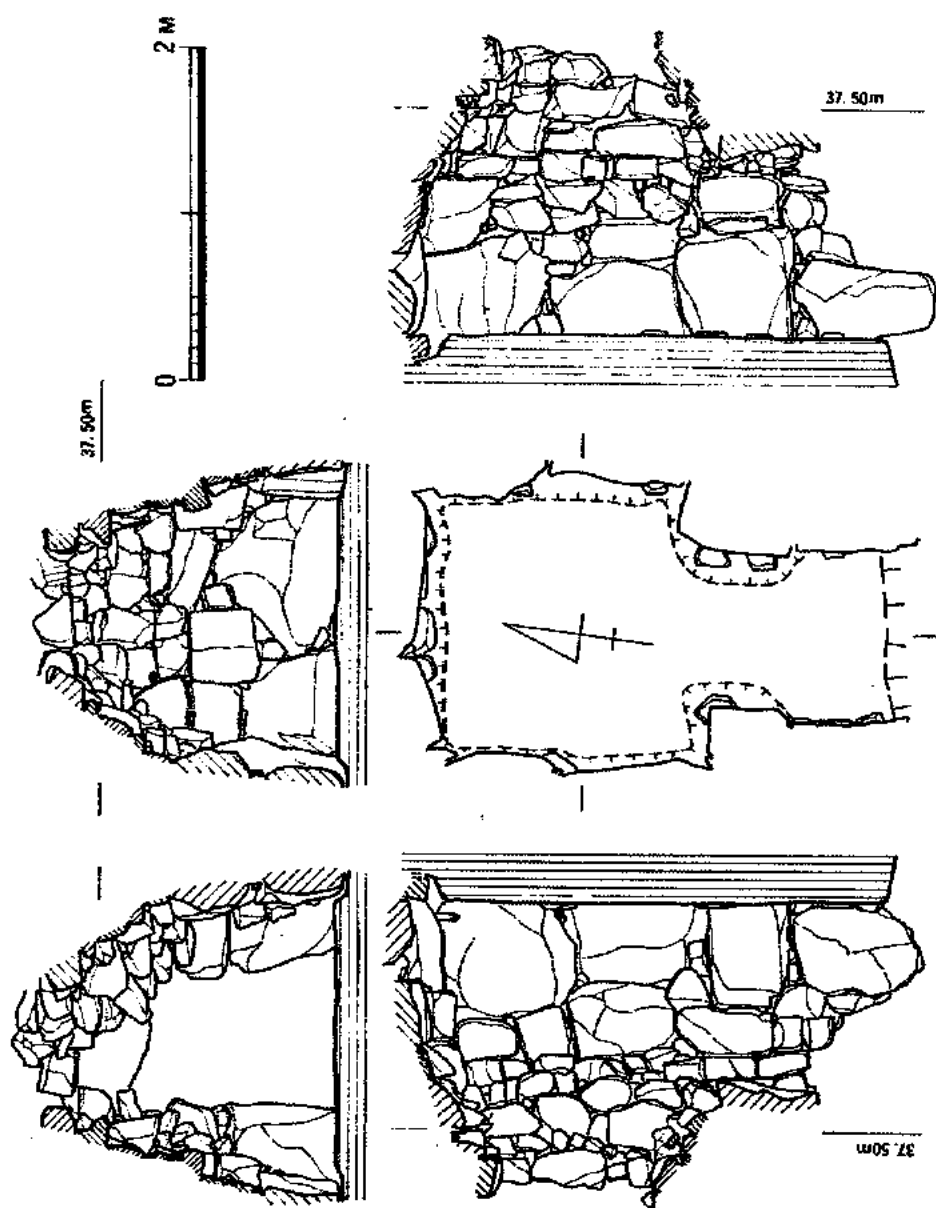


Fig 46 D-9 号墳石室実測図 (1/40)

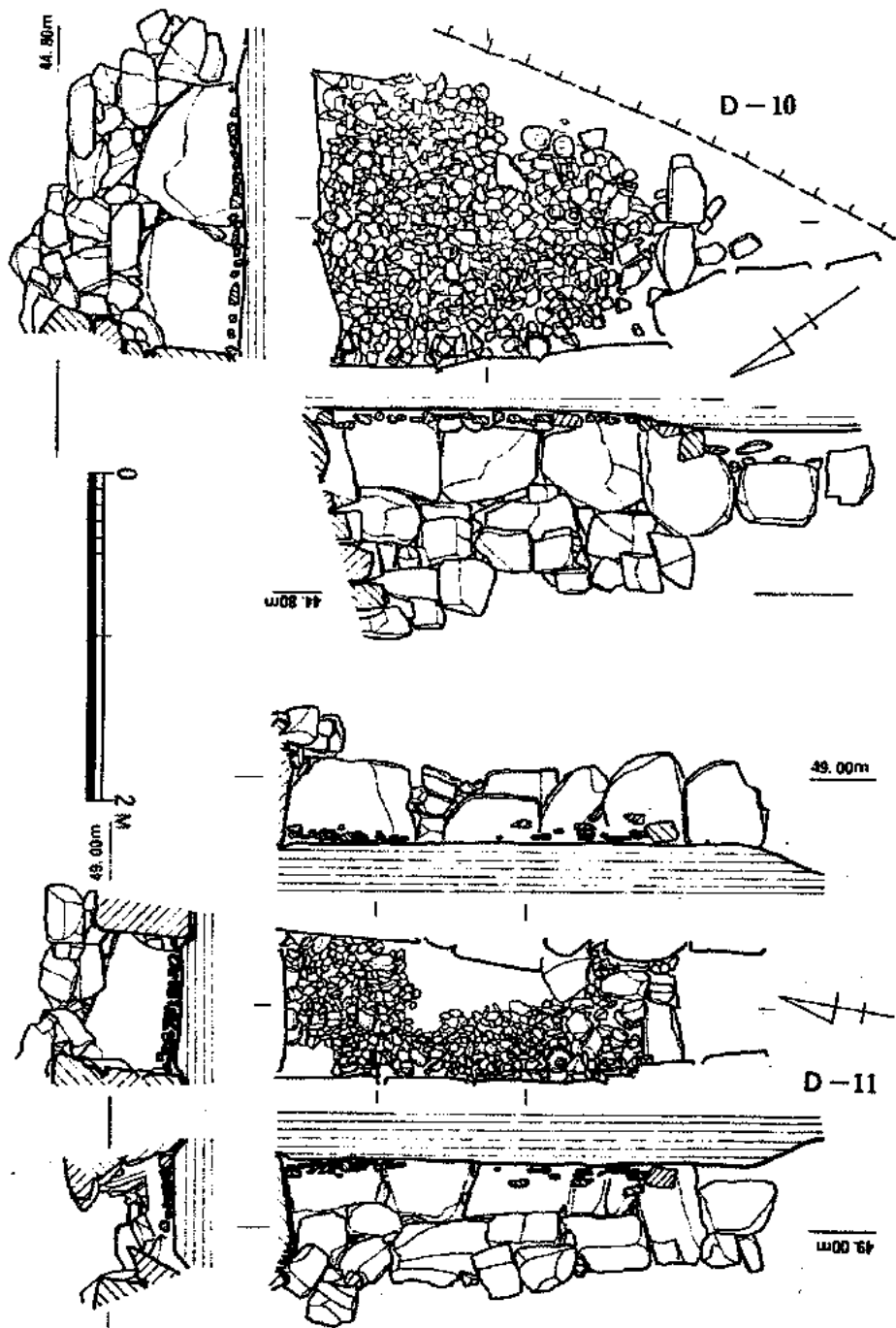


Fig 47 D-10 · D-11号填石室实测图 (1/40)

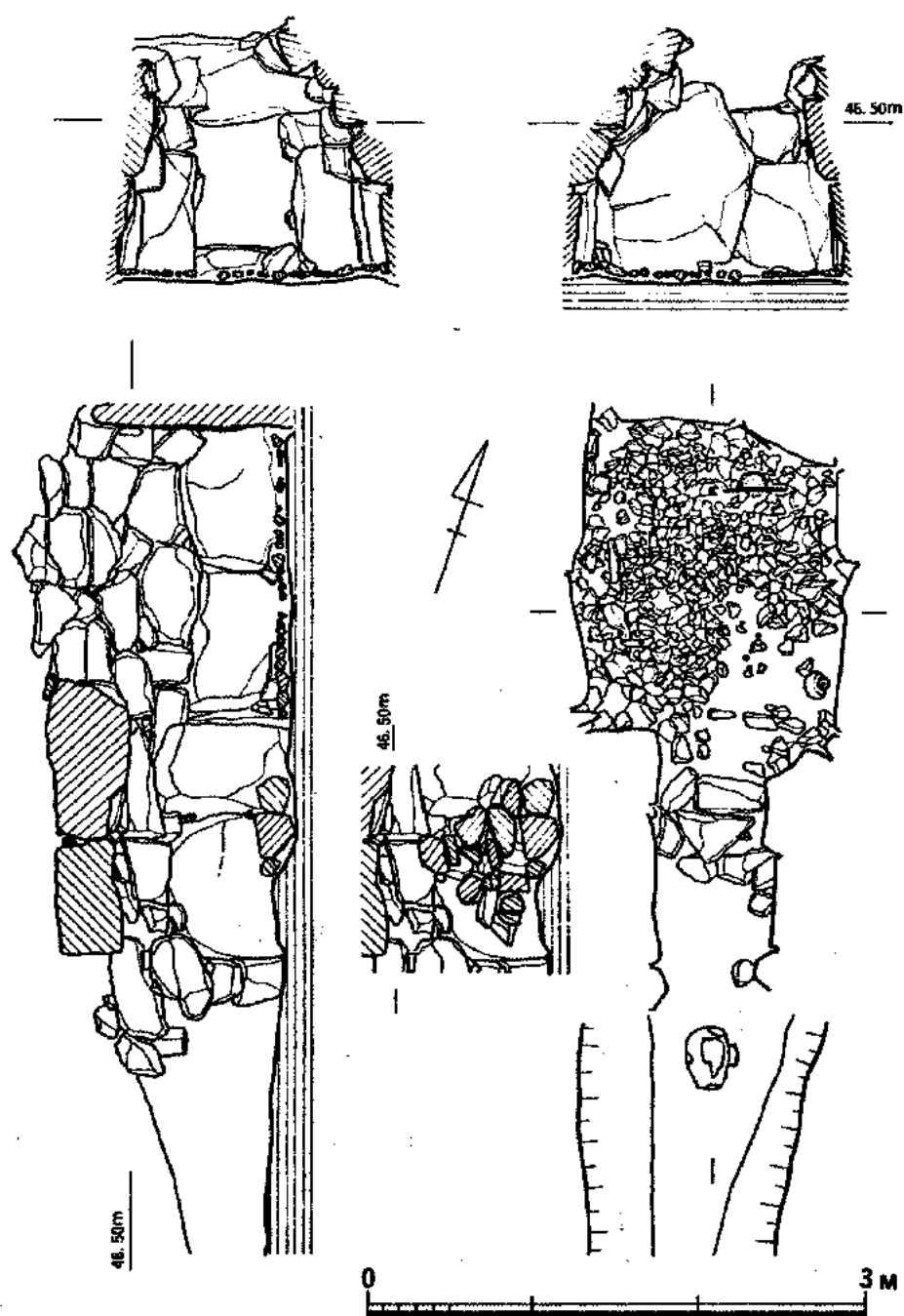


Fig 48 D-12号填石室实测图 (1/40)

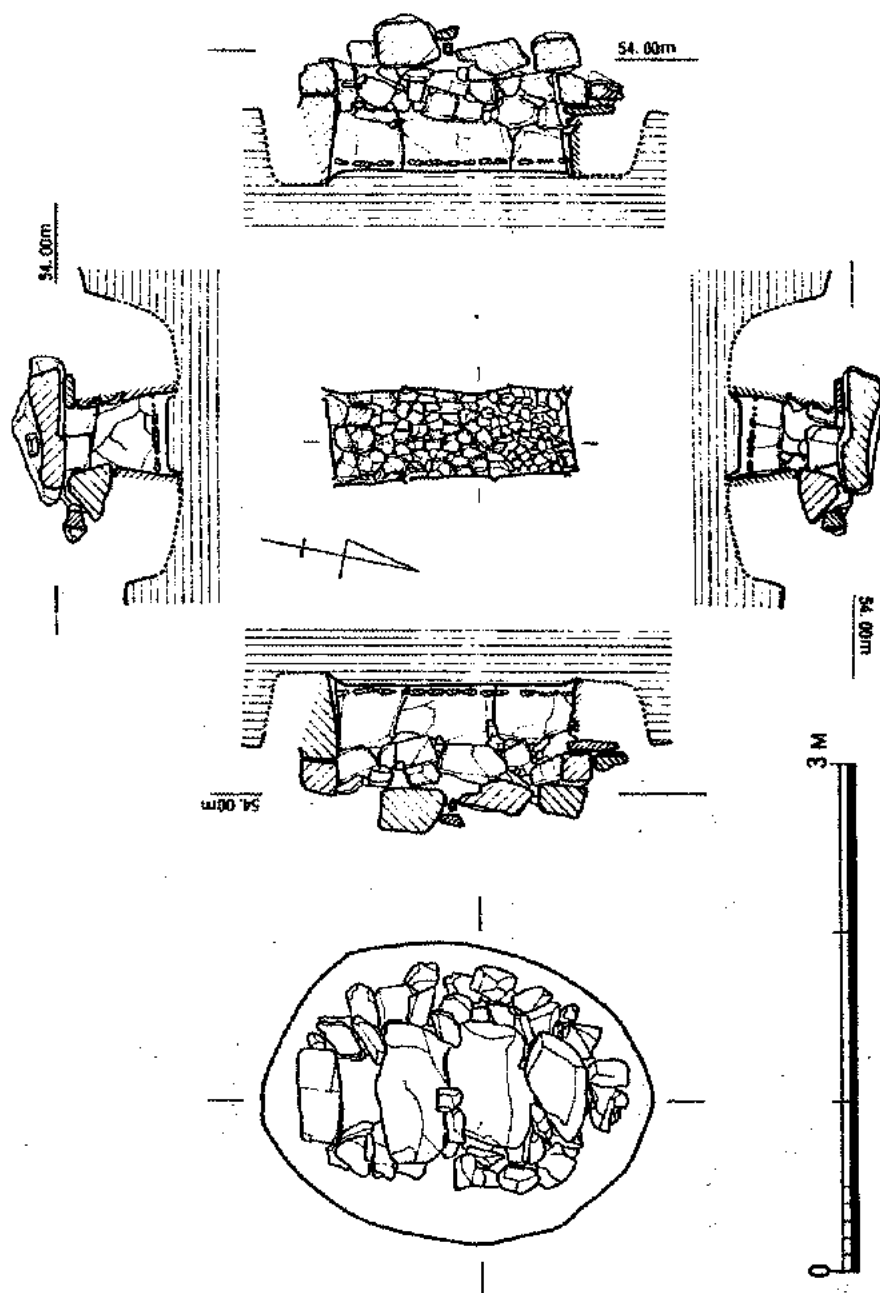


Fig 49 E-2 号填石室实测图 (1/40)

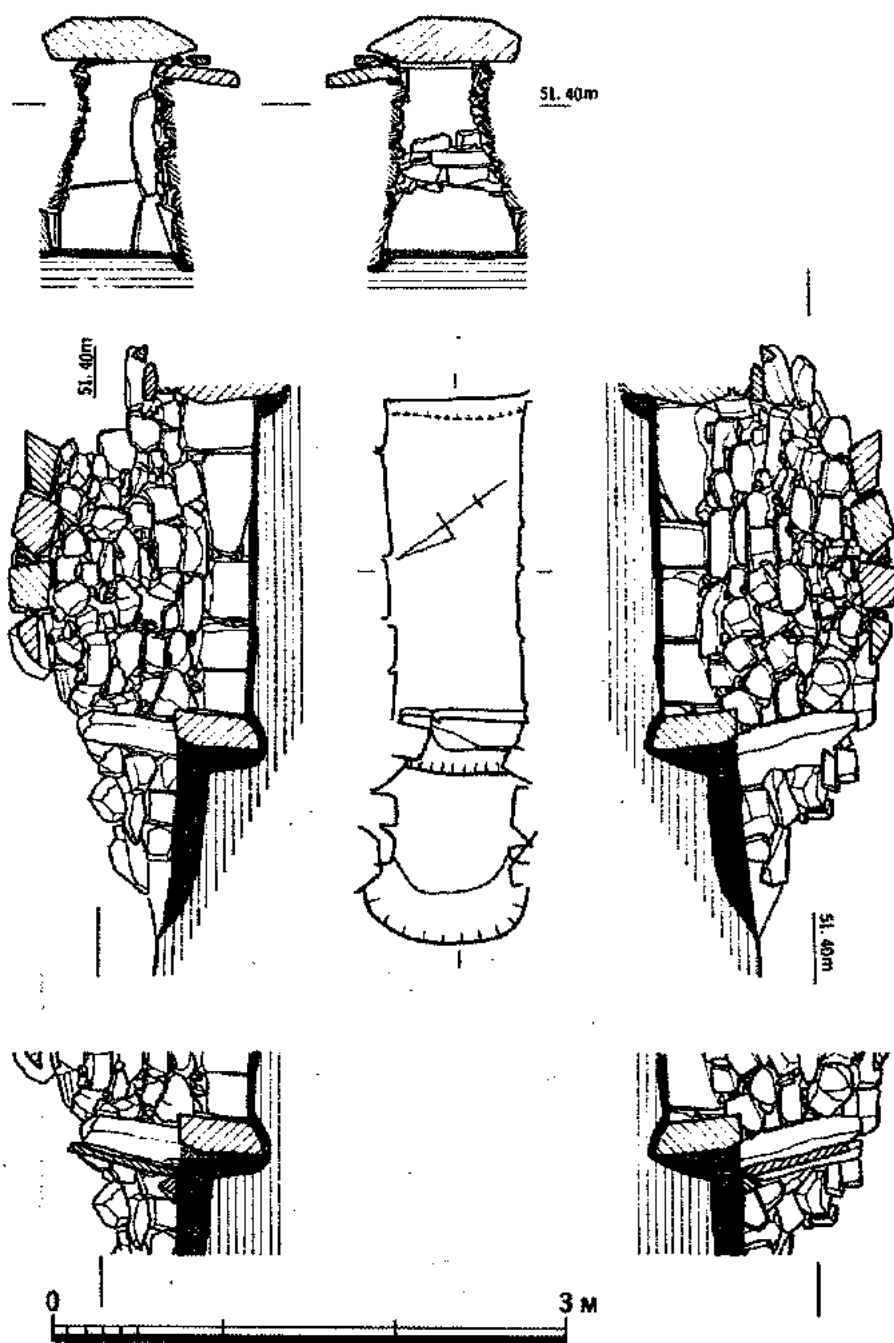


Fig 50 E-3号填石室实测图 (1/40)

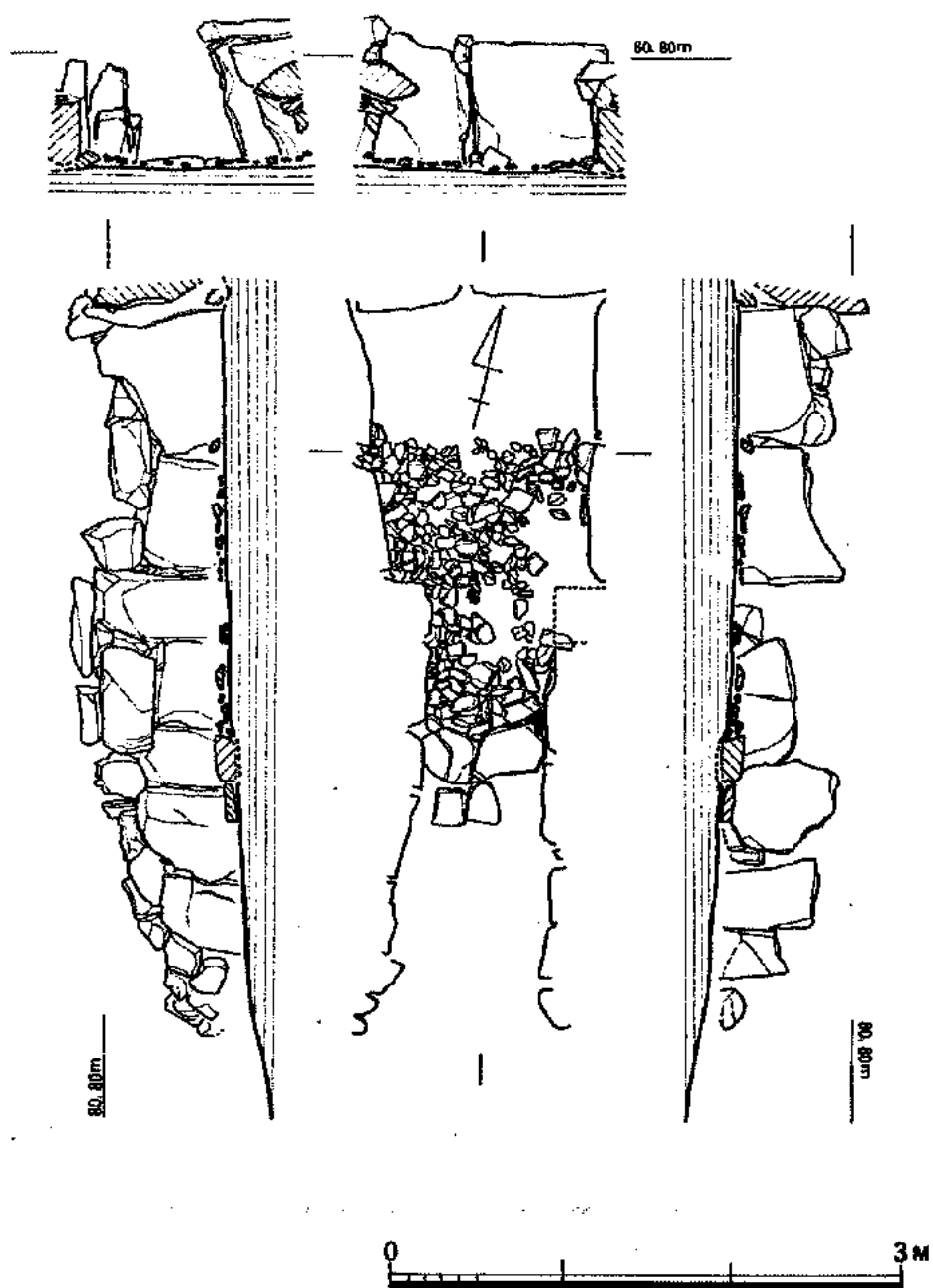


Fig 51 F-1 号填石室实测图 (1/40)

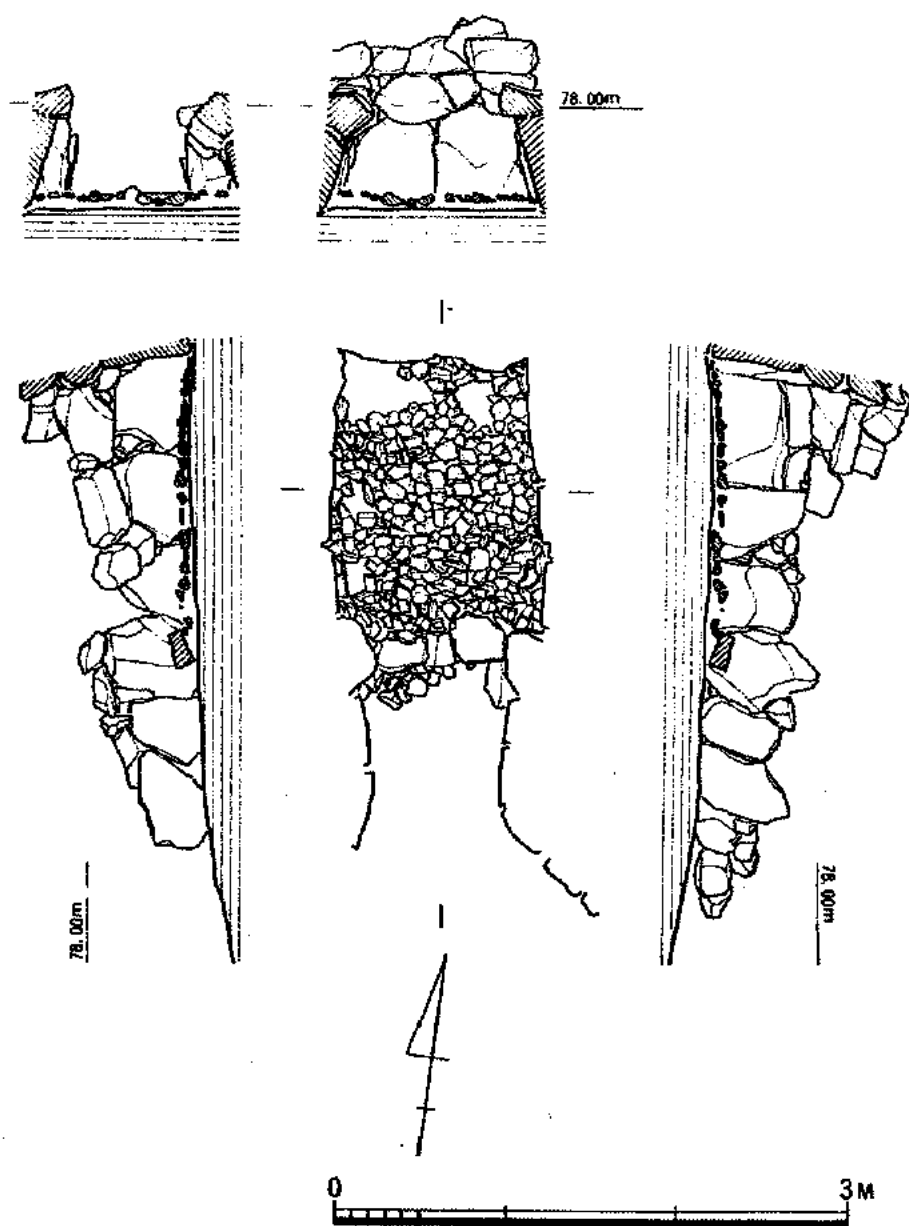


Fig 52 F-2号填石室实测图 (1/40)

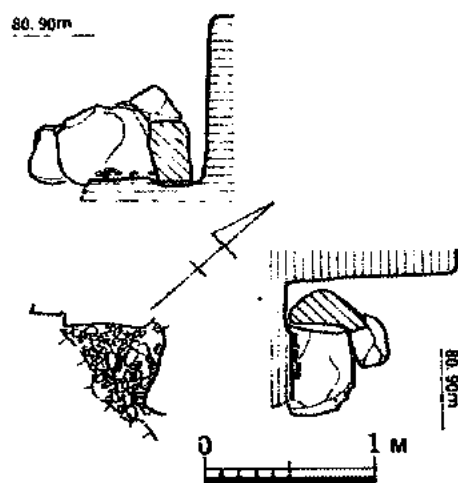


Fig 53 F-3 号填石室实测图 (1/40)

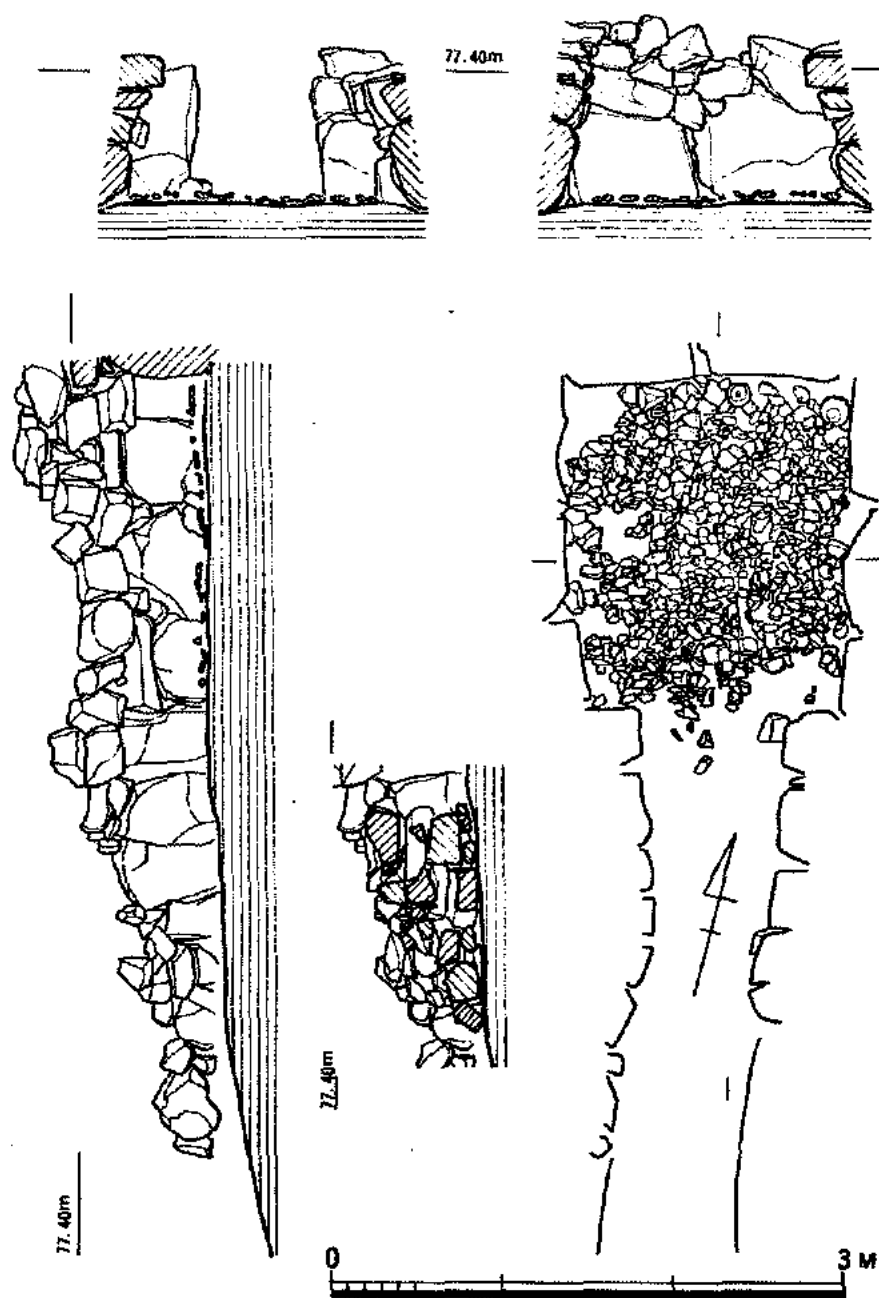


Fig 54 F-4号填石室实测图 (1/40)

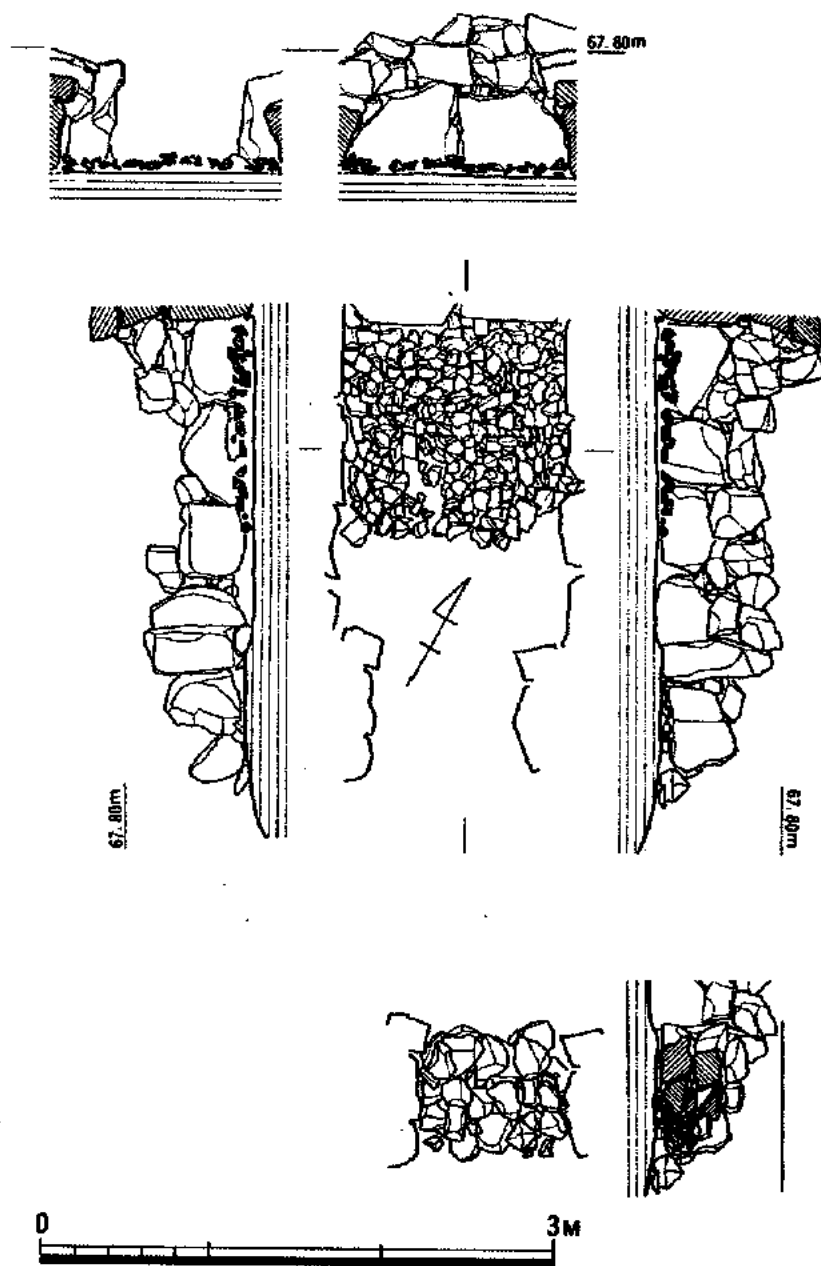


Fig 55 G-1 号填石室实测图 (1/40)

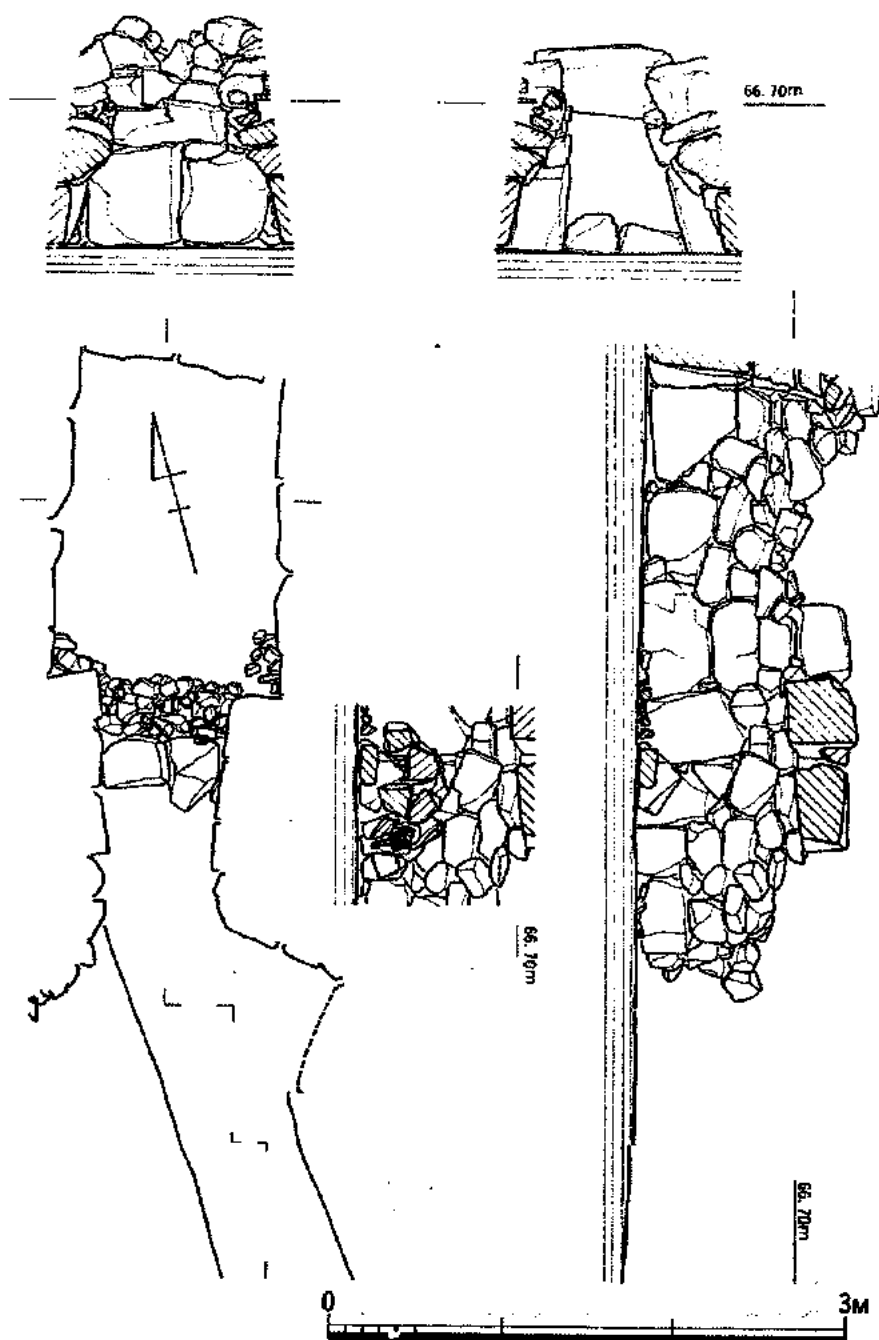


Fig 56 G-2 号填石室实测图 (1/40)

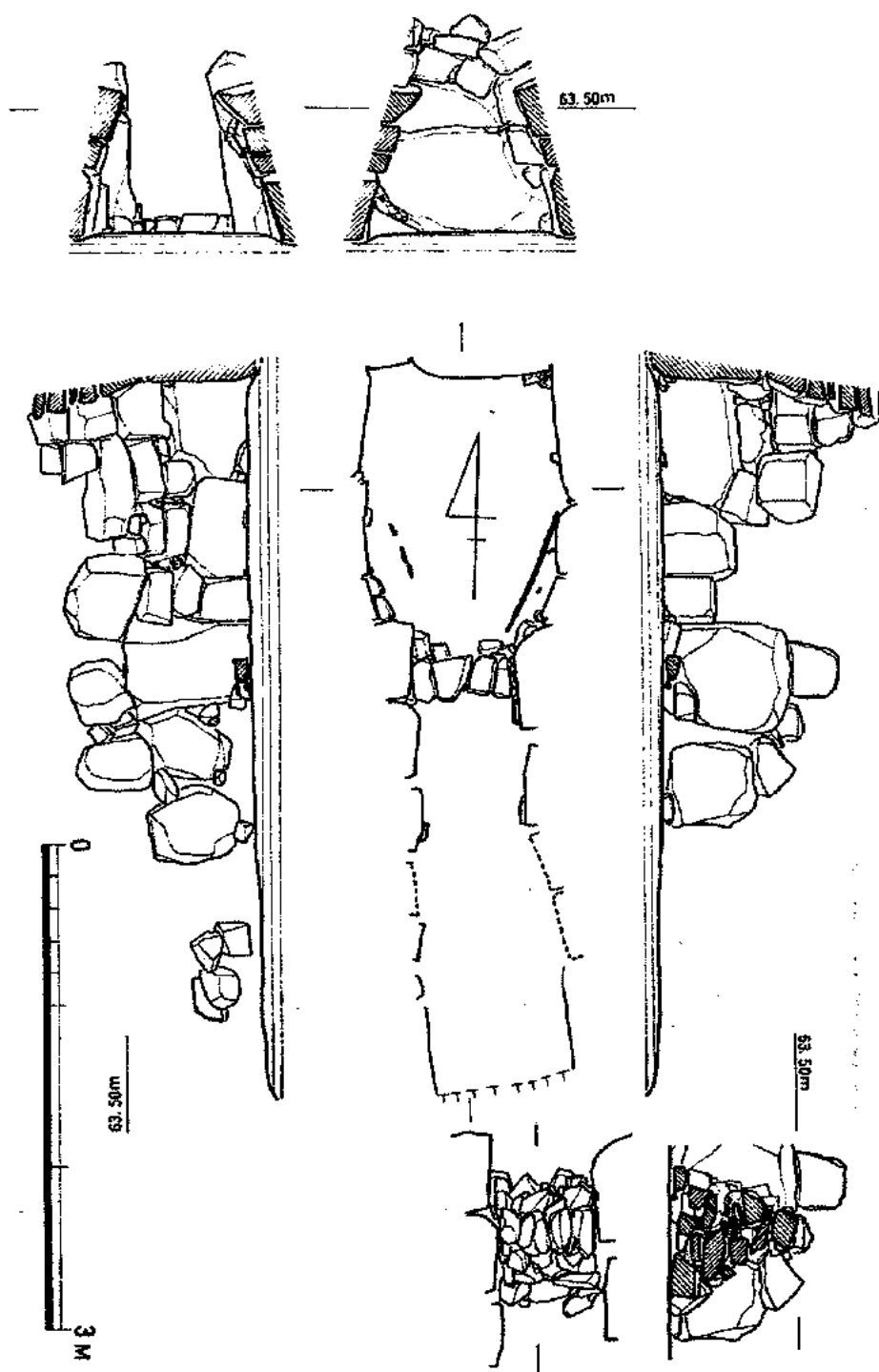


Fig 57 G-3 号填石室实测图 (1/40)

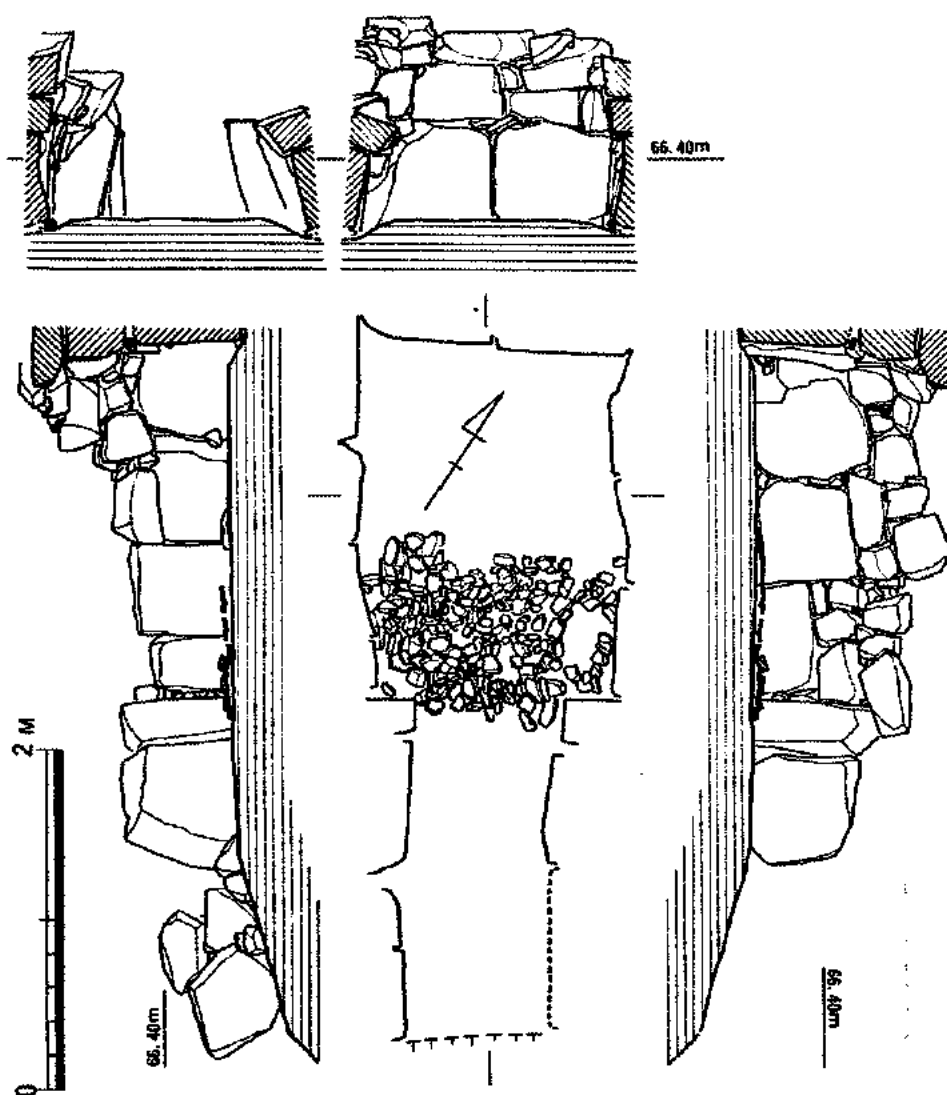


Fig 58 G-4号填石室实测图 (1/40)

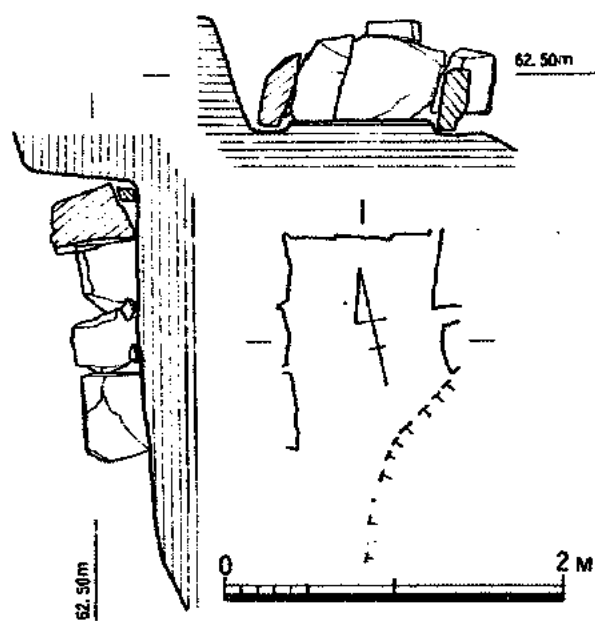


Fig 59 G-5 号填石室平面图 (1/40)

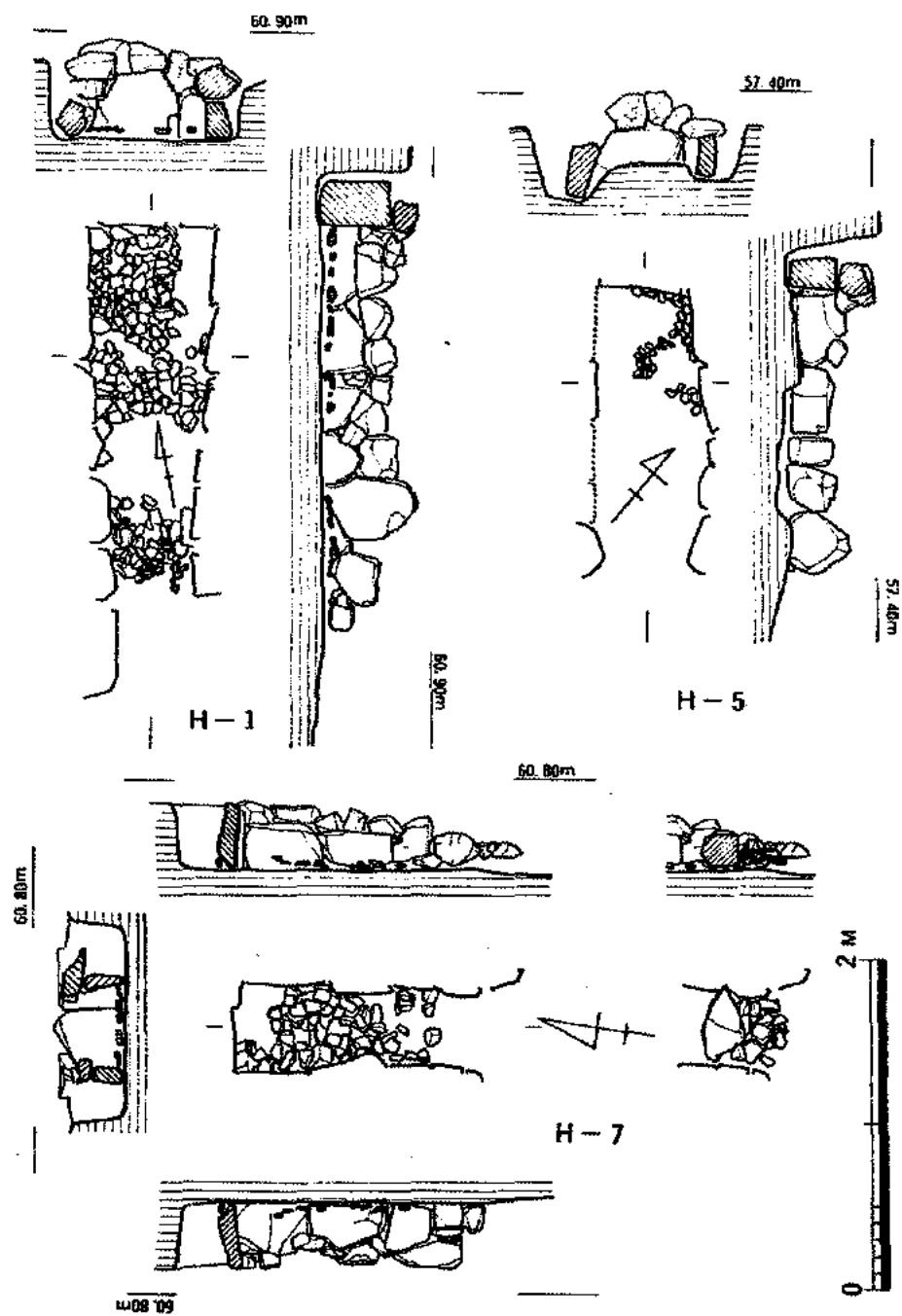


Fig 60 H-1 · H-5 · H-7 号填石室实测图 (1/40)

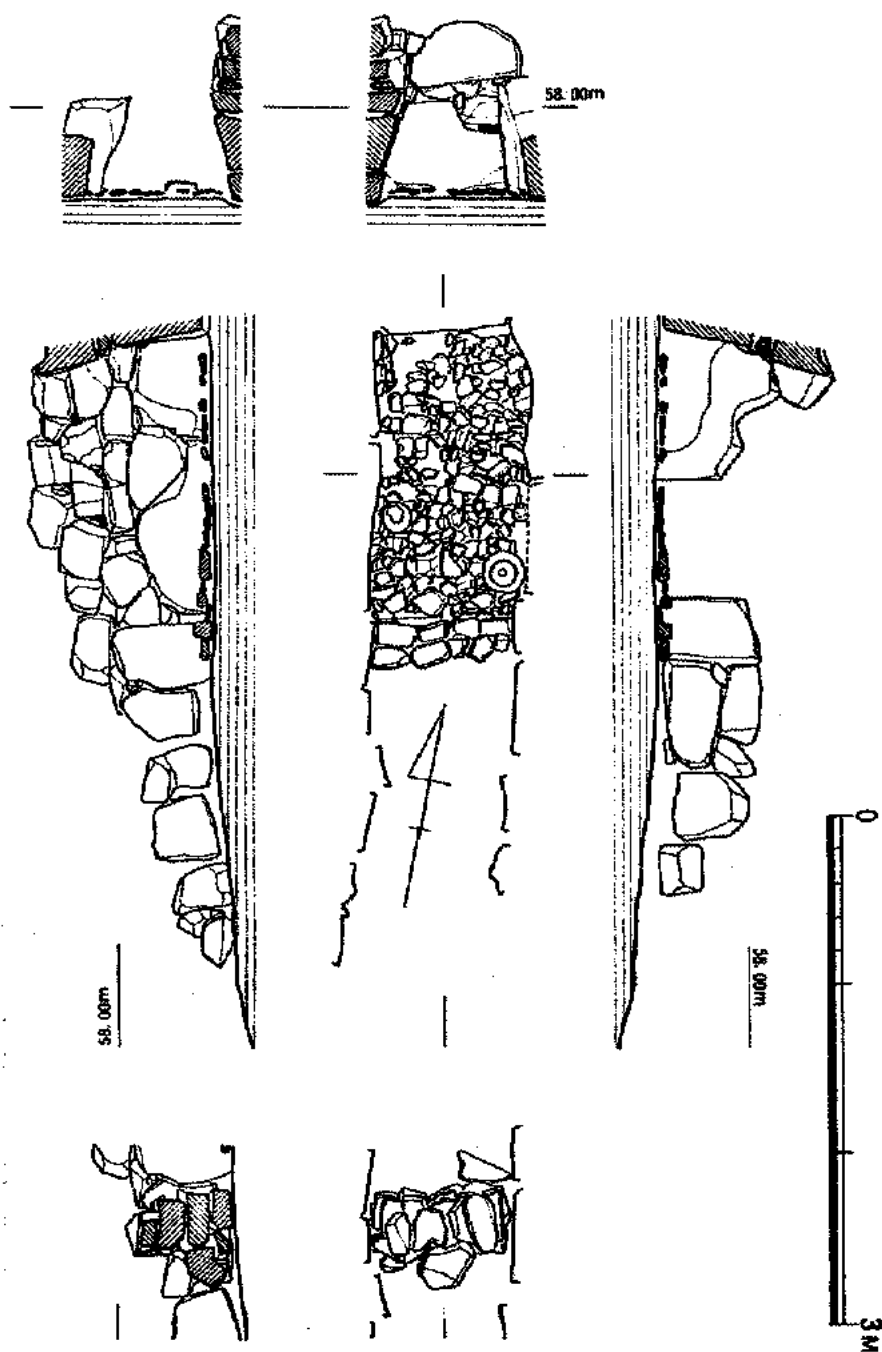


Fig 61 H-2 号填石室实测图 (1/40)

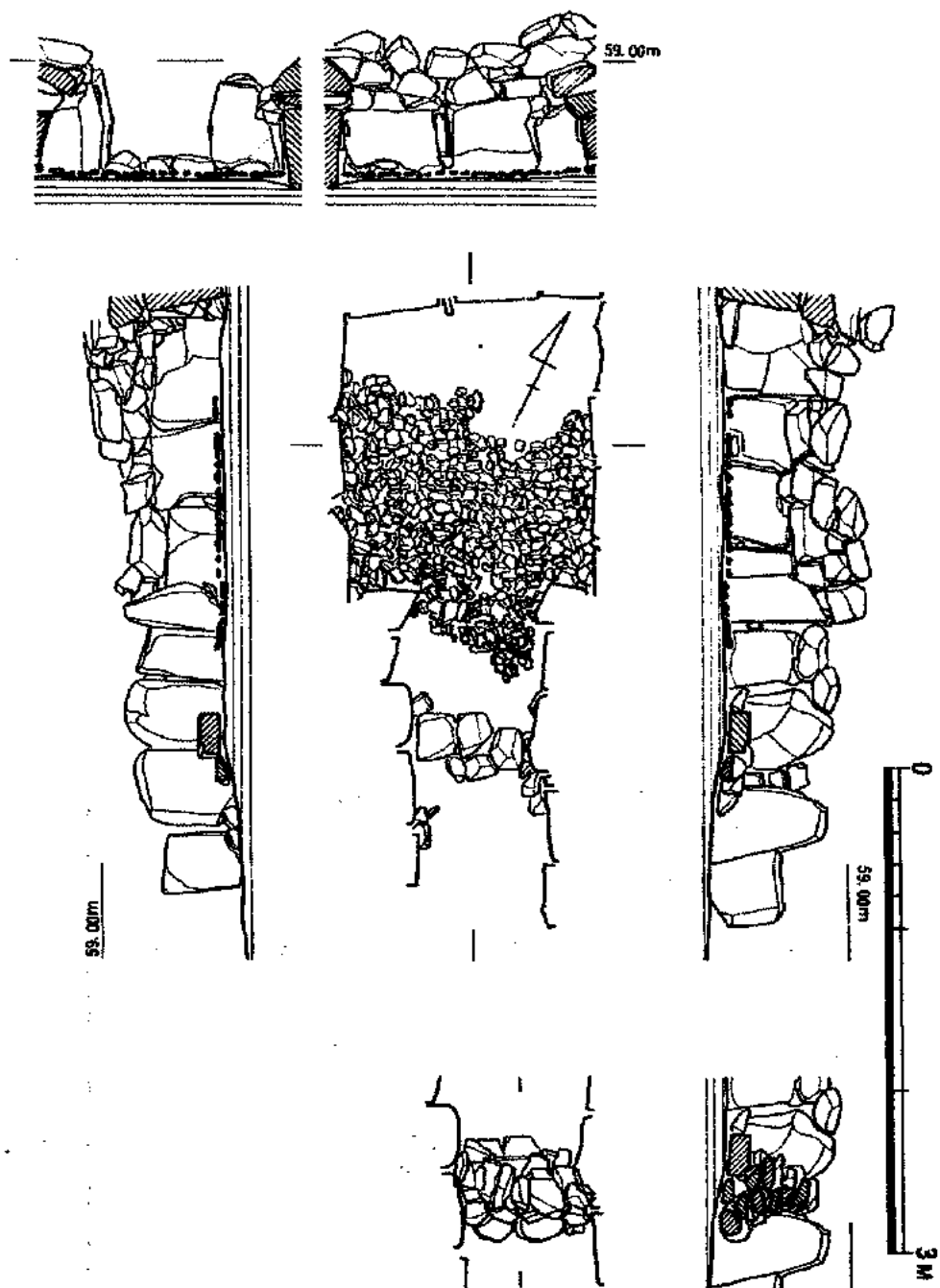


Fig 62 H-3号填石室实测图 (1/40)

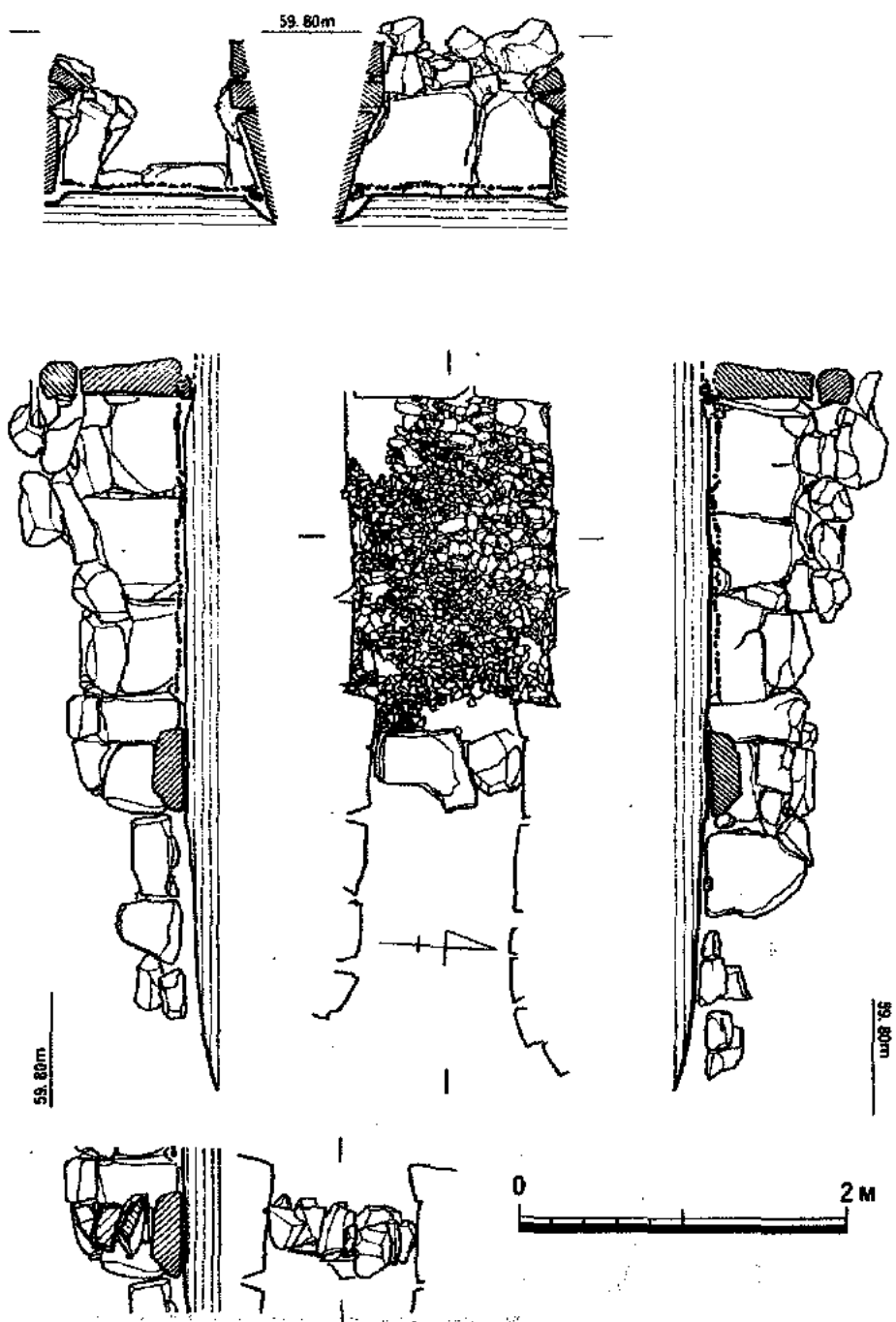


Fig 63 H-4 号填石室实测图 (1/40)

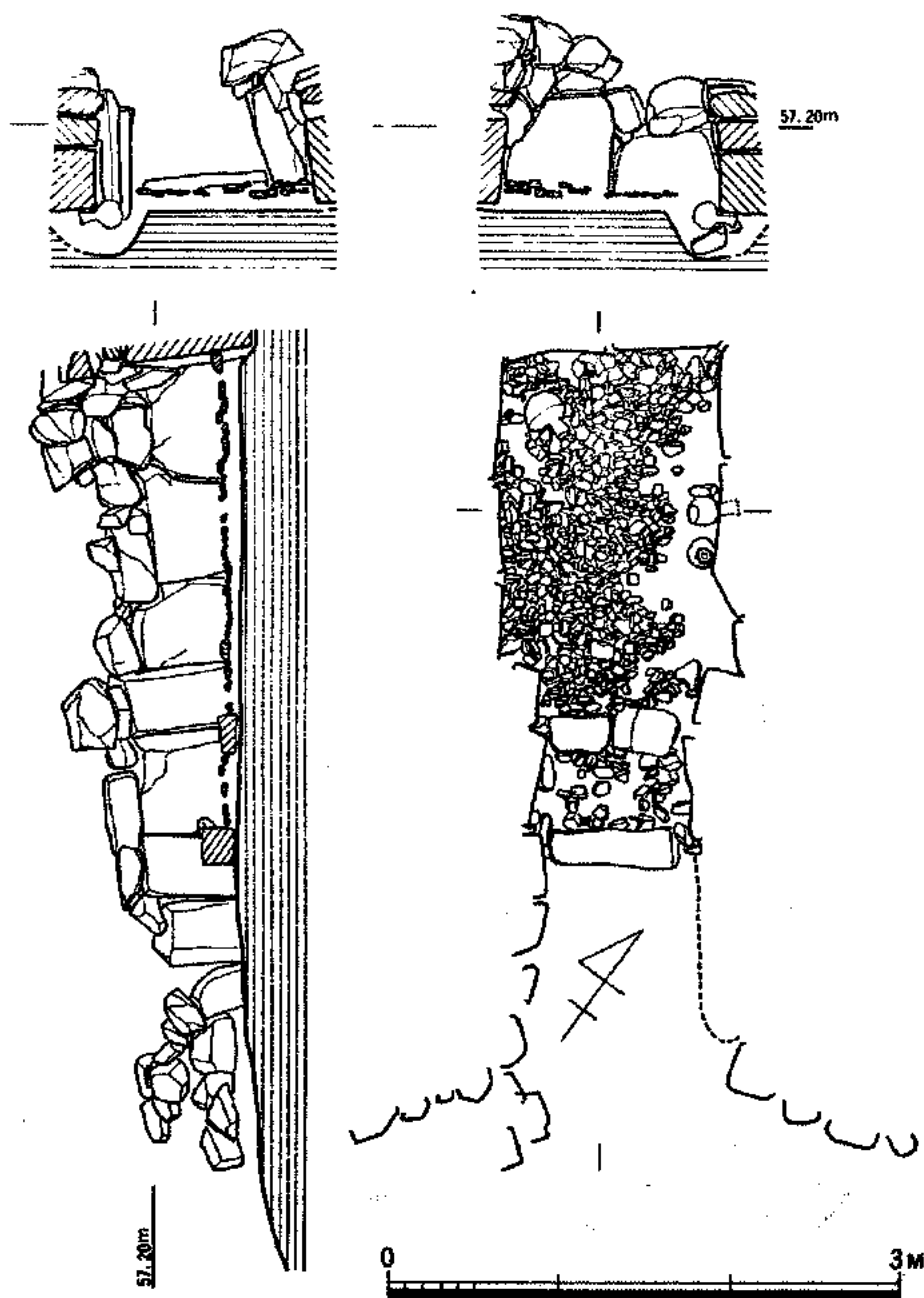


Fig 64 H-6 号填石室墓测图 (1/40)

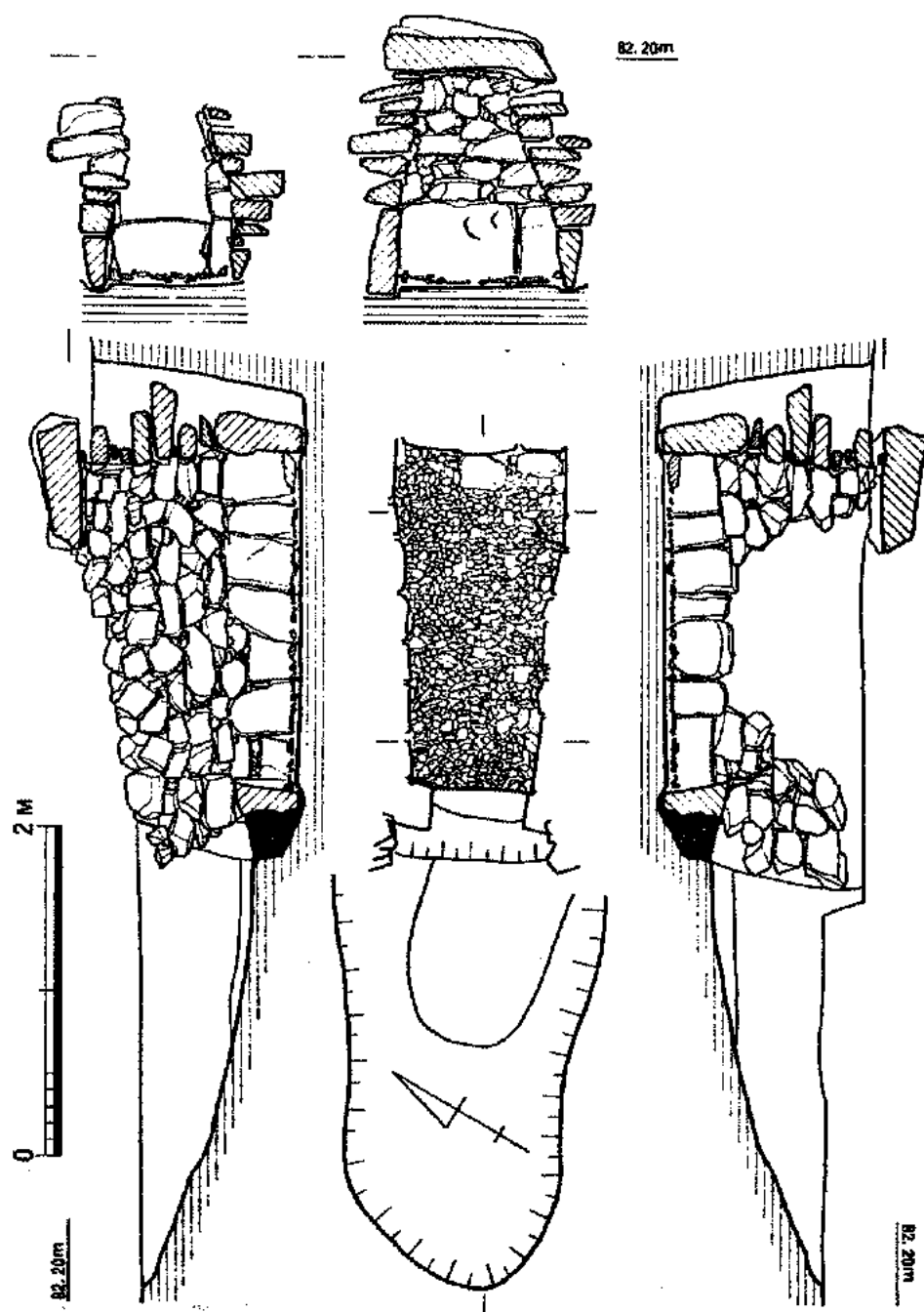


Fig 65 I-1 号填石室平面图 (1/40)

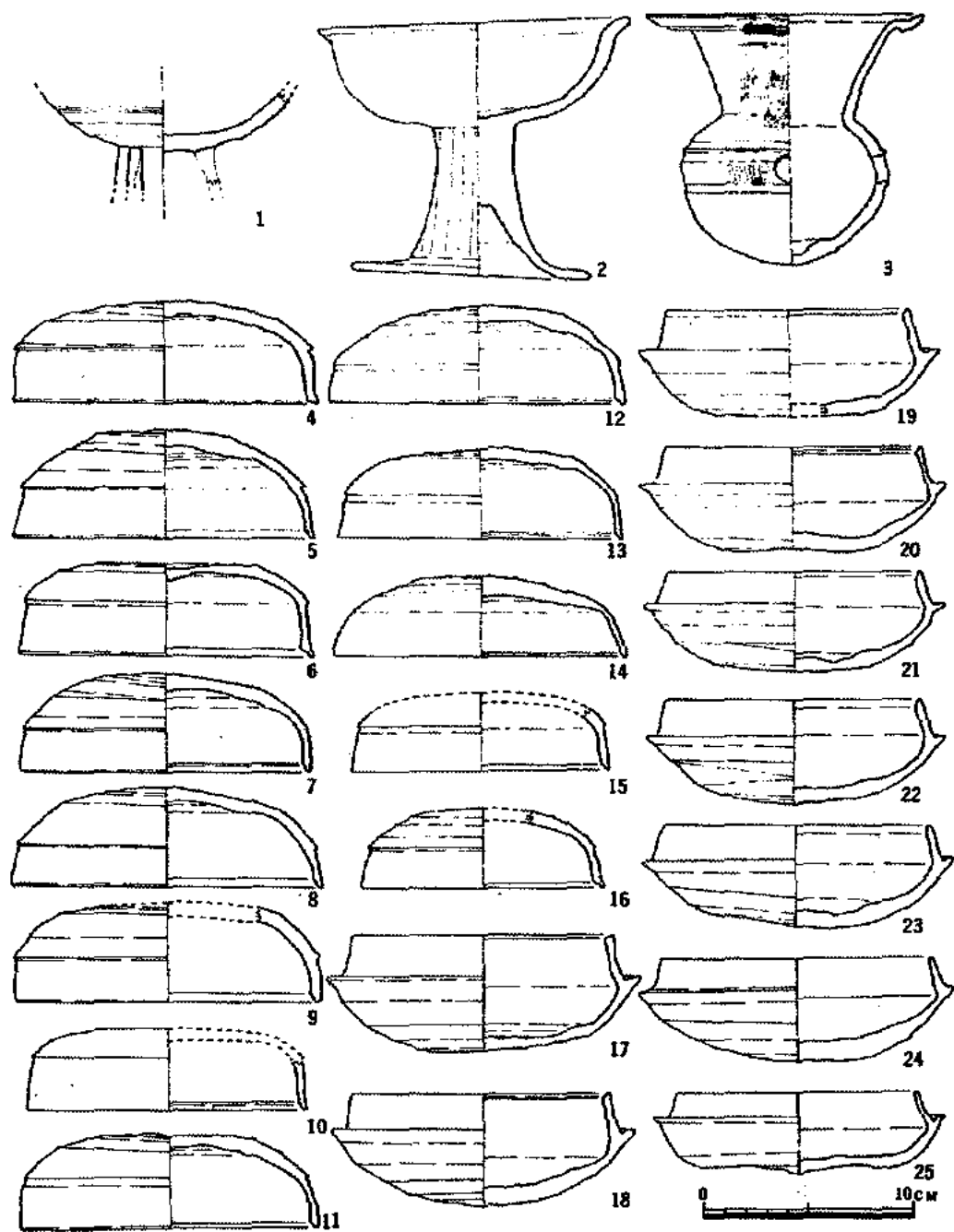


Fig 66 土器实例图①

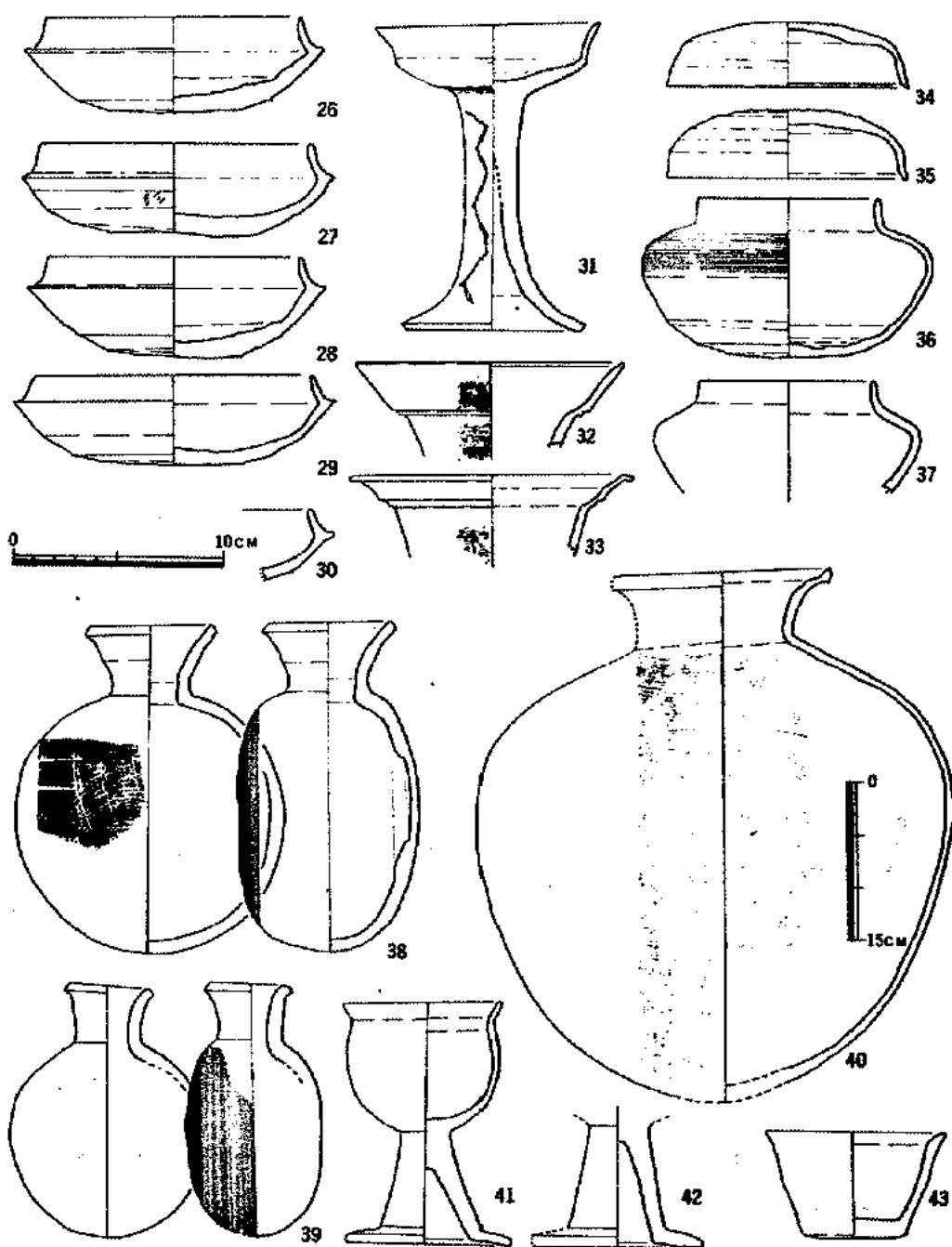


Fig 67 土器実測図②

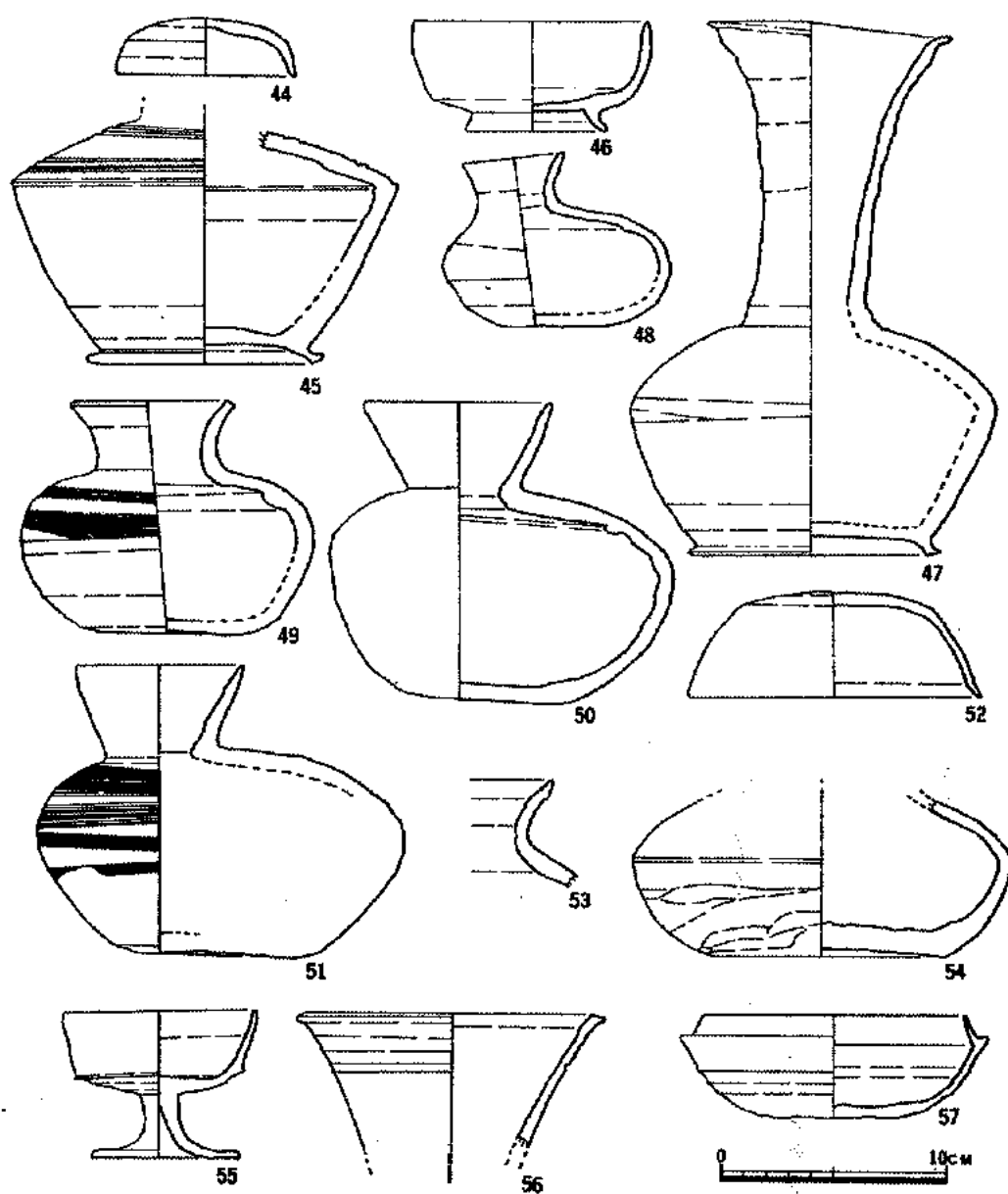


Fig 68 土器実測図③

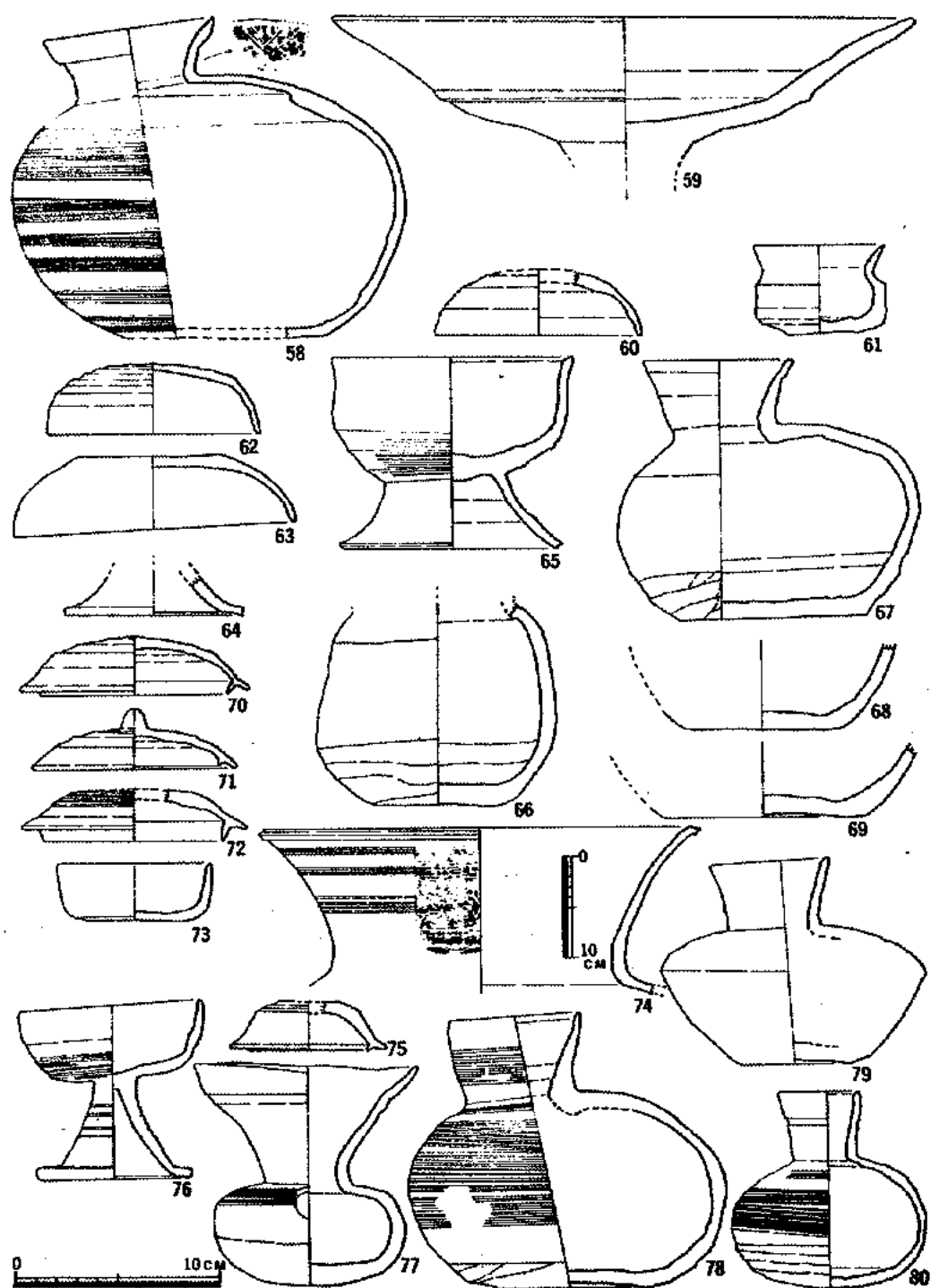


Fig 69 土器実測図④

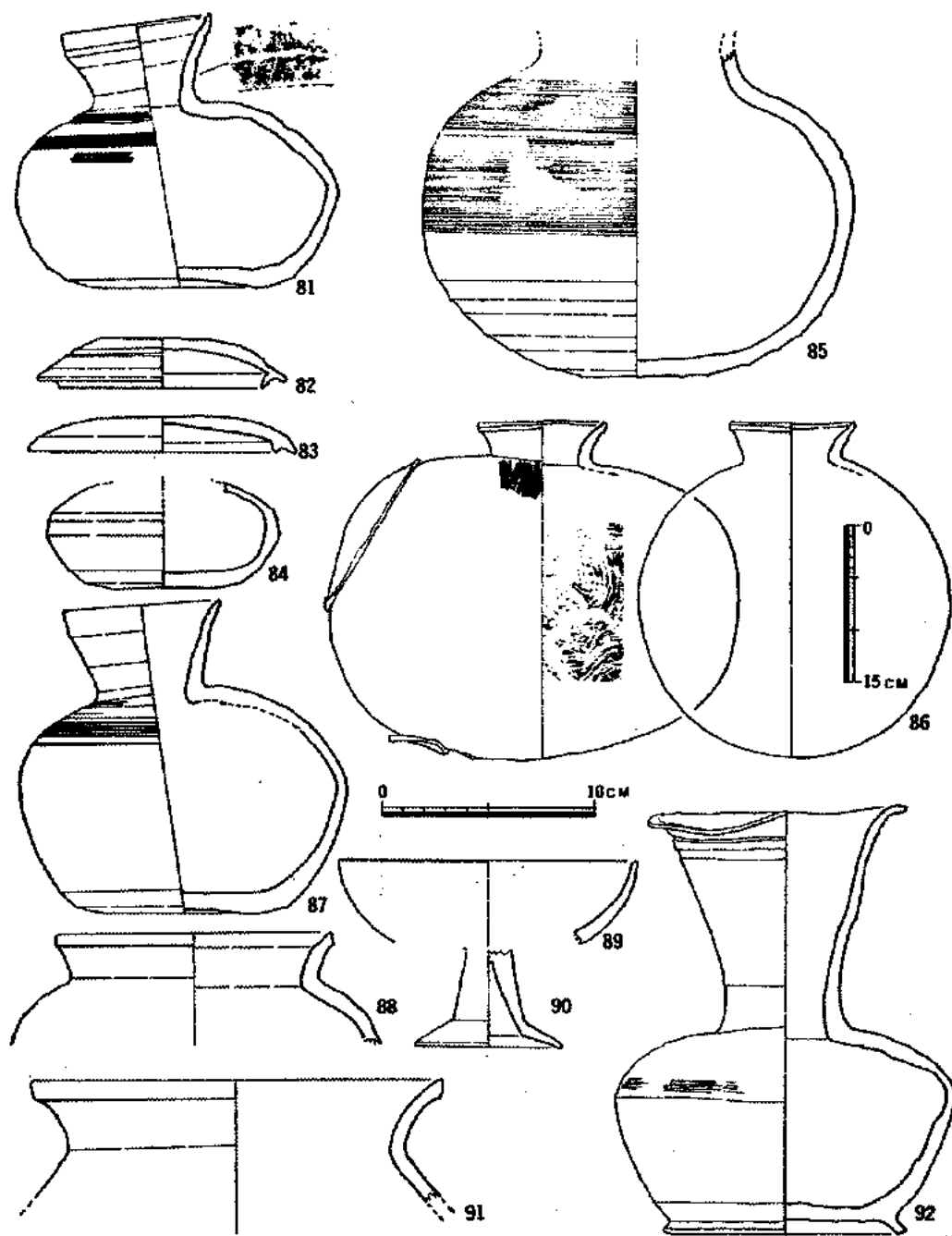


Fig 70 土器実測図⑤

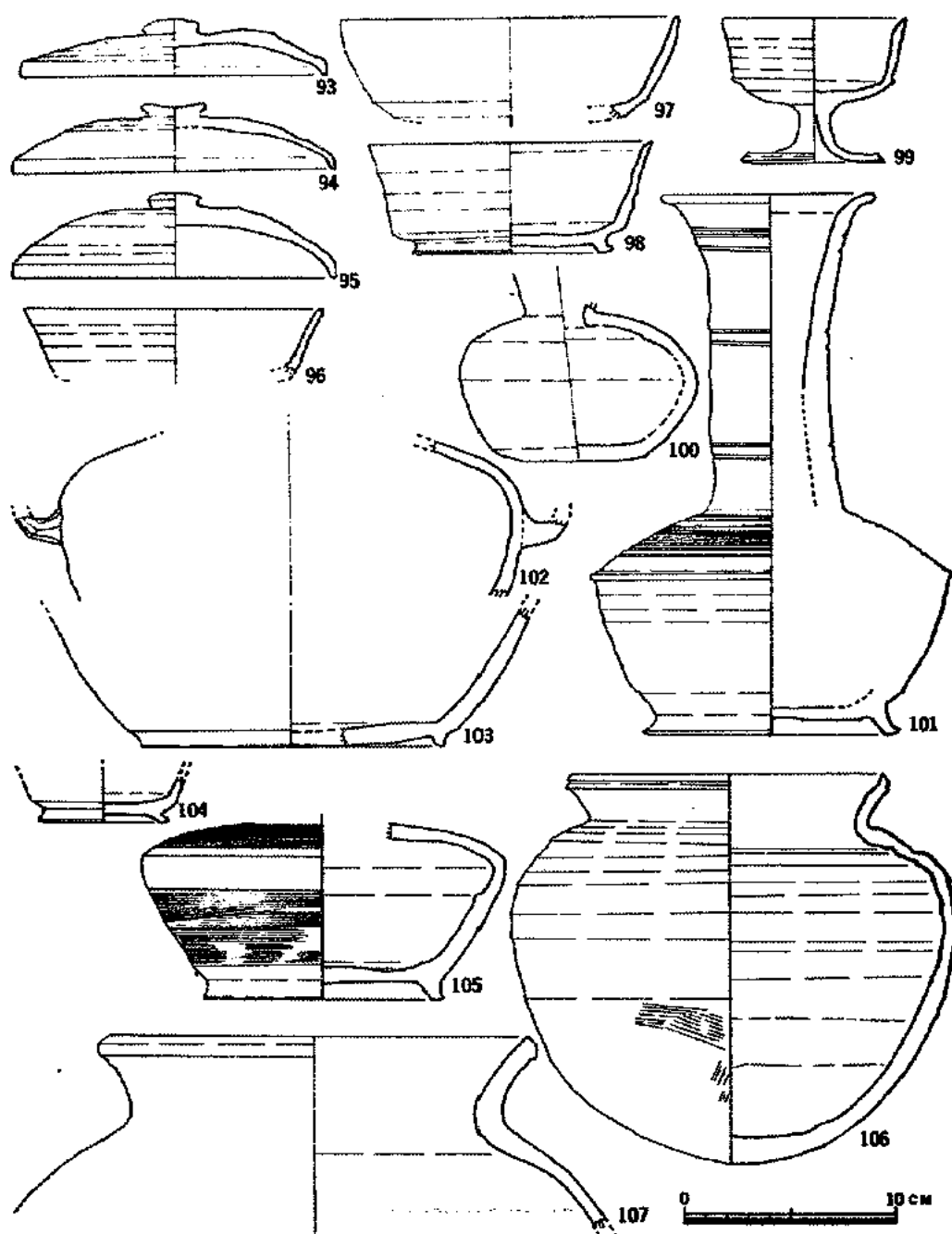


Fig 71 土器実測図⑥

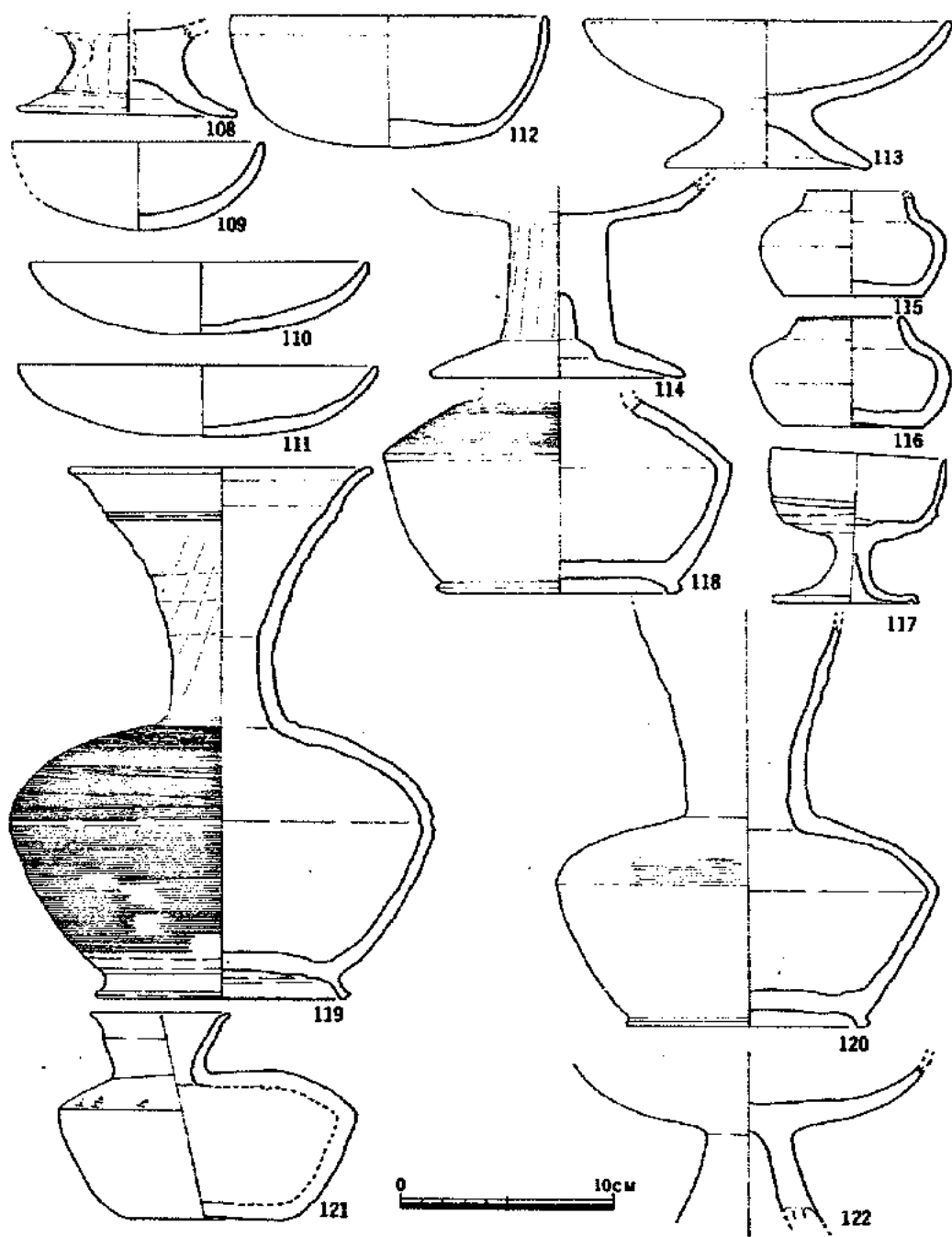


Fig 72 土器実測図⑦

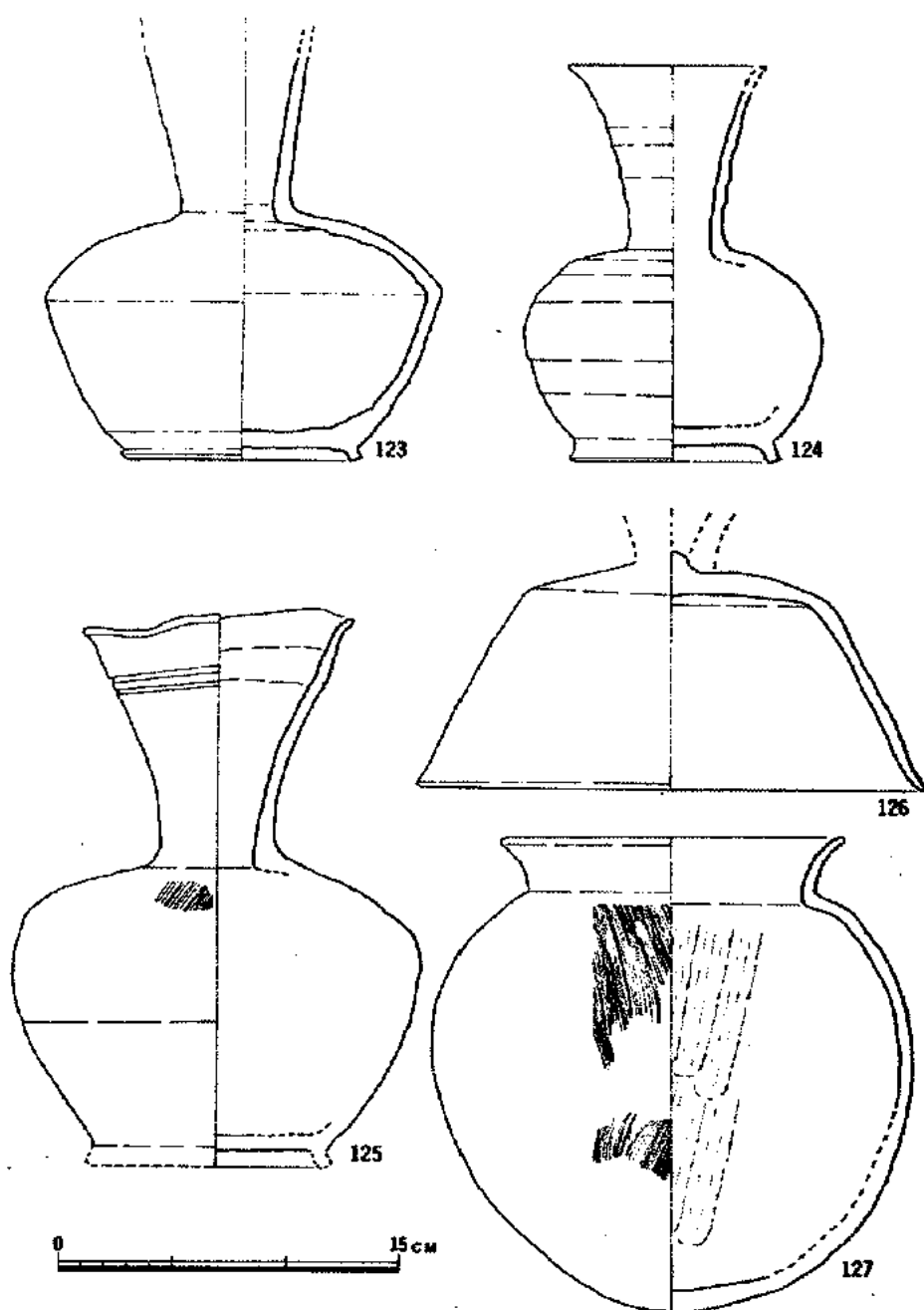


Fig 73 土器実測図⑧

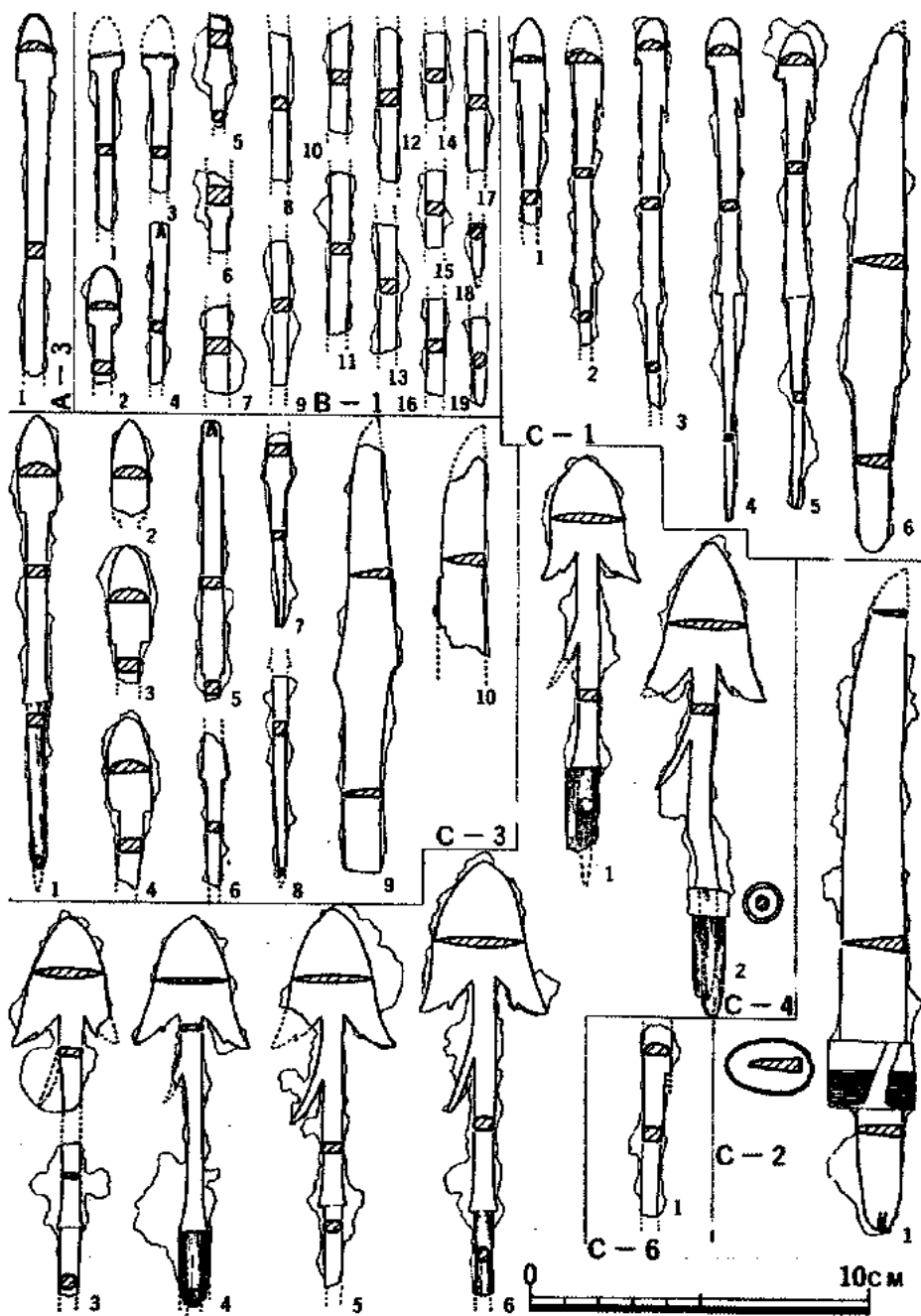


Fig 74 鉄器実測図①

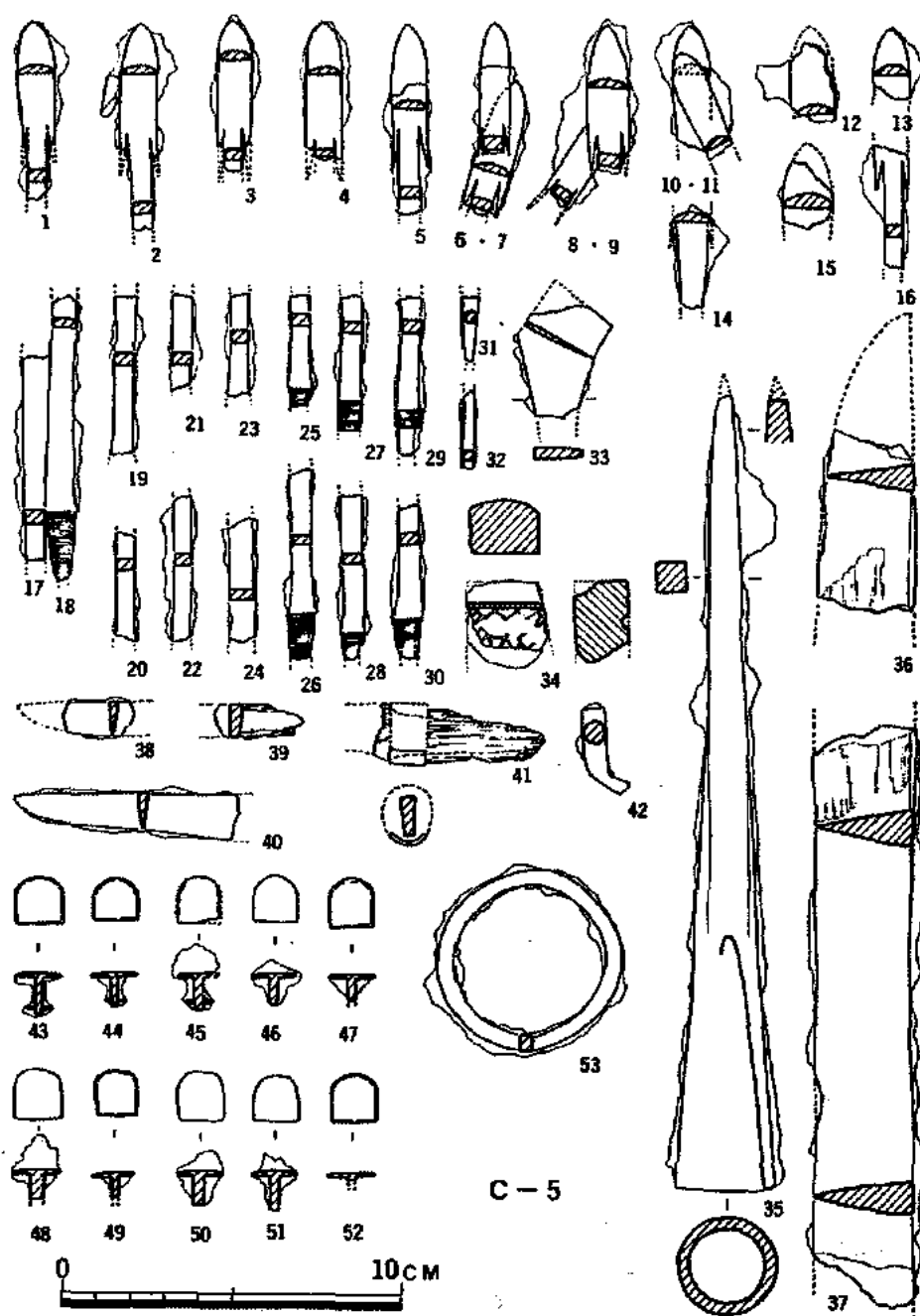


Fig 75 鉄器実測図②

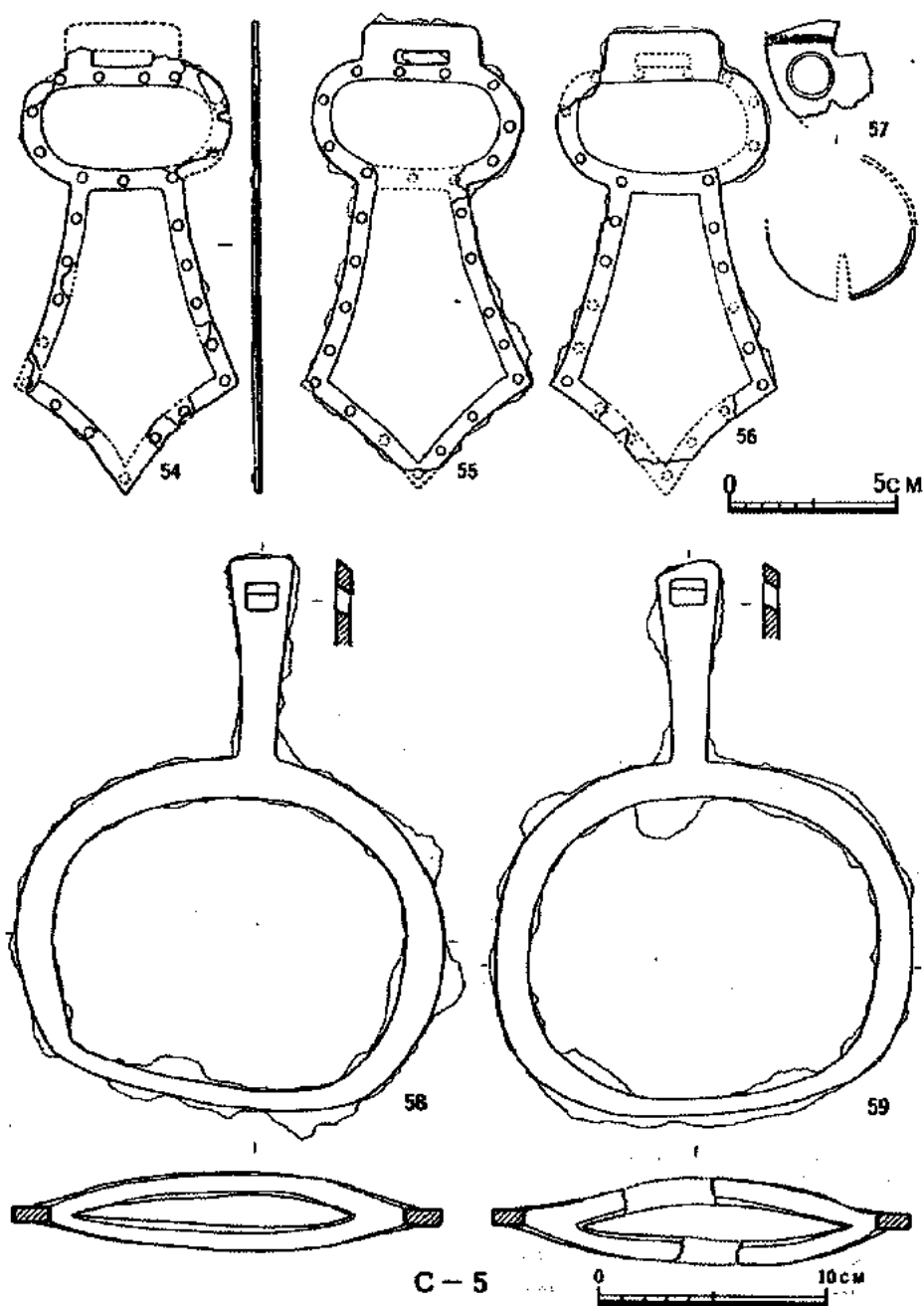


Fig 76 鉄器実測図③

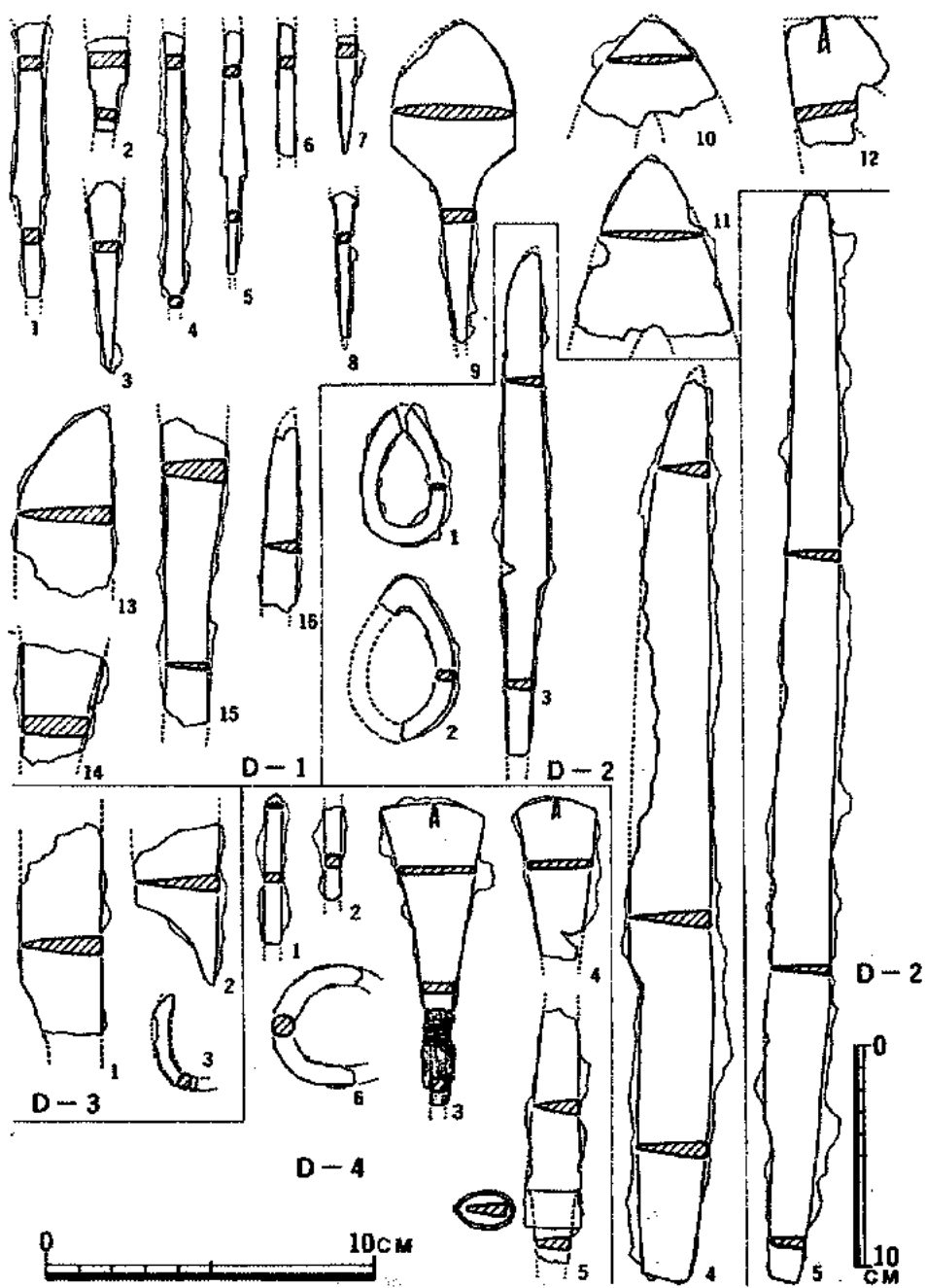


Fig 77 铁器实测图④

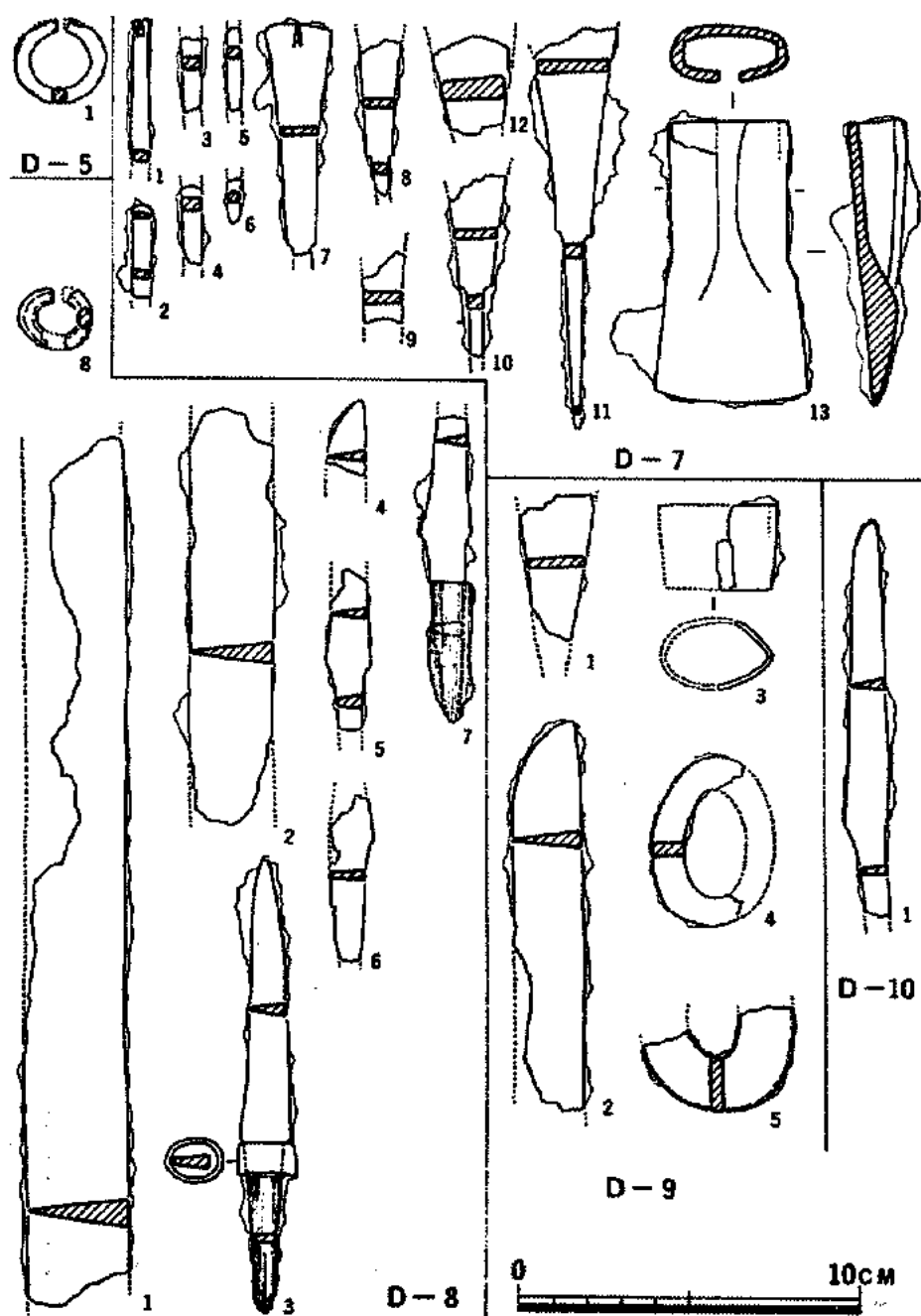


Fig 78 铁器实测图⑤

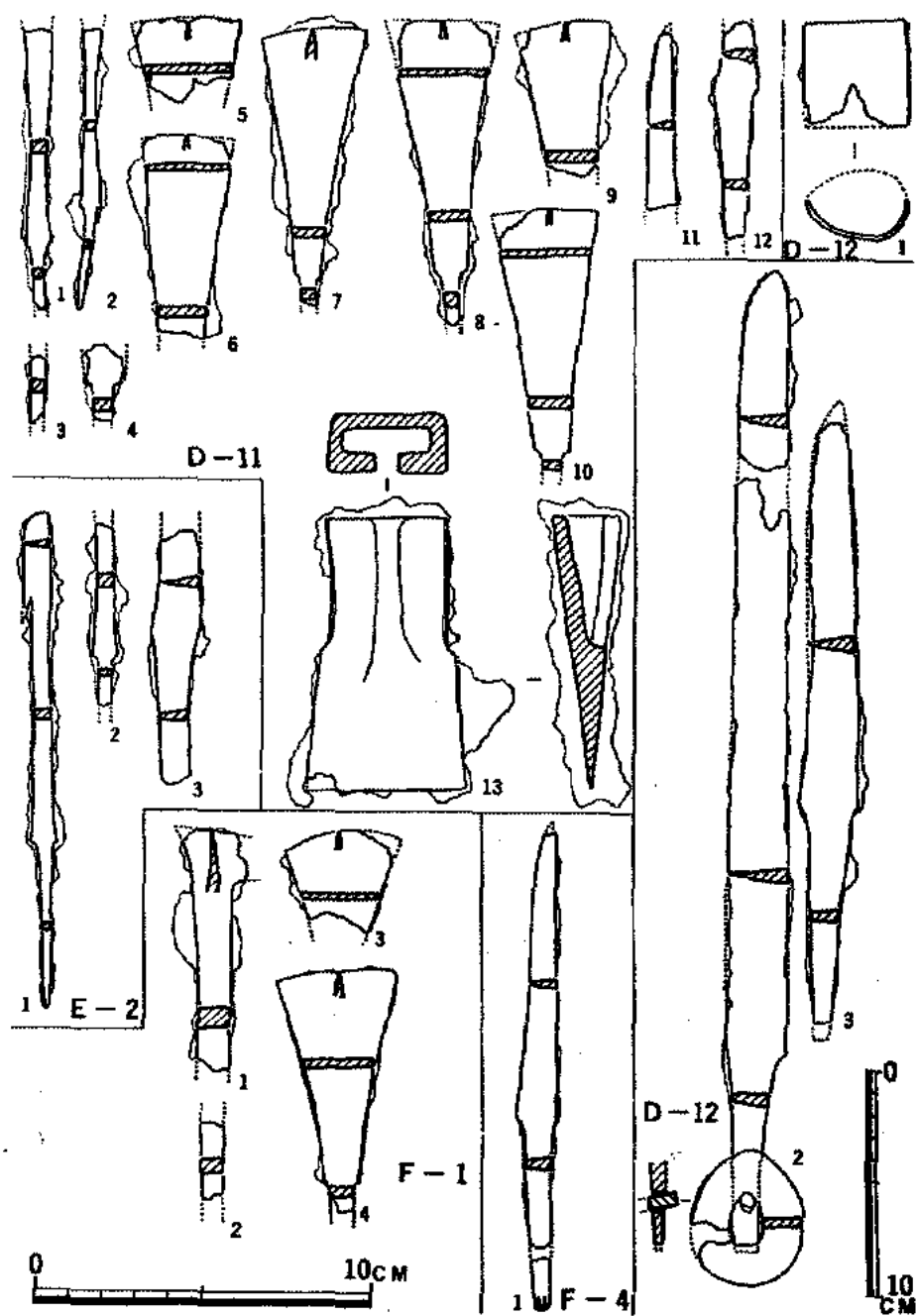


Fig 79 鉄器実測図⑥

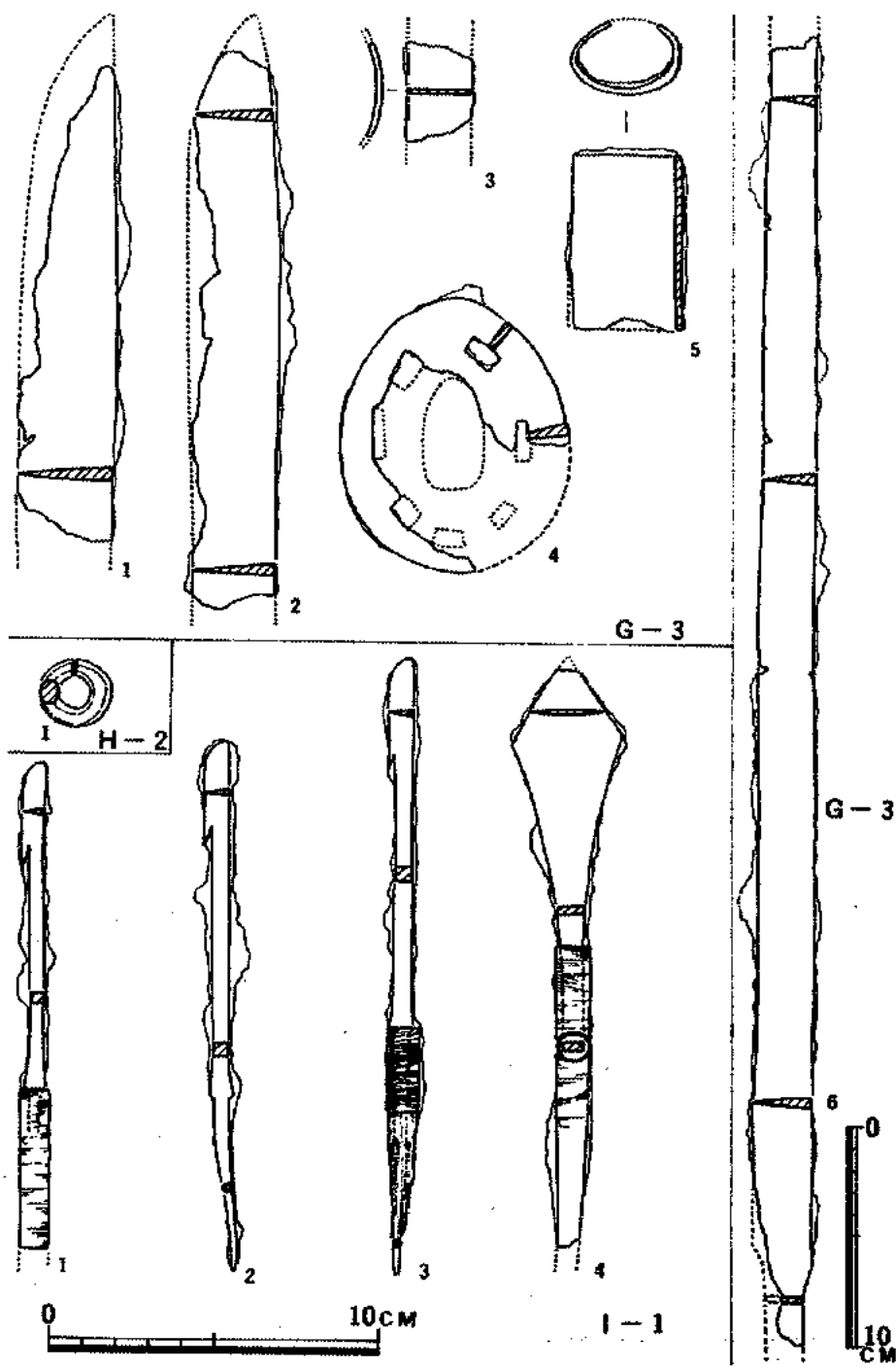


Fig 80 鉄器実測図⑦

(二) 磁化率原理 1 qel

Tab 2 土盤計測表

No	器 種	Fig	Pl No	出土地点	土 質 (cm)						備 考
					口 径	高 度	受 压 径	受 压 高	受 压 径 高 比	受 压 径 高 比	
1	高杯	66	—	C-2号墳1区							
2	"	"	18	" N区溝	14.6	12.2				11.3	土師器
3	耳	"	"	C-3号墳溝	12.9	12.0				9.9	
4	杯蓋	"	"	C-5号墳溝	14.4	4.9	14.1	2.5			
5	"	"	"	" 溝	14.0	5.2	13.3	2.5			
6	"	"	"	" 溝	13.7	4.45	13.35	2.4			
7	"	"	"	" N区	13.6	4.7	13.35	2.0			
8	"	"	"	" N区溝	14.5	4.8	14.15	1.8			
9	"	"	"	" N区溝	14.2	(4.8)	14.4	2.0			
10	"	"	—	" N区溝	13.0	(3.9)	(12.8)	(2.4)			
11	"	"	18	" 溝	13.9	4.4	13.3	2.4			
12	"	"	"	" N区	13.8	4.7	13.6	1.9			
13	"	"	"	" N区	13.4	4.3	12.9	1.75			
14	"	"	—	" 墳丘上	13.7	3.9					
15	"	"	—	" 墳丘上	12.1	(3.8)	11.45	1.9			
16	"	"	—	" 墓道	11.4	(3.8)	10.6	1.8			
17	杯身	"	18	" 溝	12.3	5.5	14.9	2.15			
18	"	"	"	" 溝	12.1	5.3	14.35	1.8			
19	"	"	"	" N区溝	11.5	(5.1)	14.35	2.05			
20	"	"	"	" 溝	12.2	4.9	14.6	1.8			
21	"	"	"	" 溝	12.0	4.8	14.4	1.55			
22	"	"	"	" 溝	12.0	5.0	14.3	1.8			
23	"	"	"	" 溝	12.5	4.8	14.8	1.65			
24	"	"	"	" 溝	13.0	4.9	15.05	1.25			
25	"	"	"	" 溝	11.5	3.85	13.9	1.4			
26	"	67	19	" 墳丘上	11.9	4.5	14.0	1.5			
27	"	"	"	" 墳丘上	12.7	4.3	14.75	1.4			
28	"	"	"	" 墳丘上	12.0	4.8	14.1	1.35			
29	"	"	"	" 墓道	13.0	4.25	15.1	1.2			
30	"	"	—	" N区墳丘外				1.05			
31	高杯(無蓋)	"	19	" N区溝	10.5	14.65				8.6	ヘラ足等あり
32	耳	"	—	" N区	12.6						
33	"	"	—	" 溝	13.35						

No	器 種	Fig	Pl No	出土地点	注 記 (cm)						備 考
					口 径	高 寸	受 取 深	足 上 高	脚 底 径 (底 形)	脚 底 最 大 径	
31	短頸老蓋	67	19	C-5号墳N区溝	11.5	3.1					
35	"	"	"	" N区	11.3	3.35					
36	短頸蓋	"	"	" 溝	8.6	7.6				13.8	
37	"	"	"	" N区溝	8.3	(7.2)				12.6	
38	提柄	"	19	" II区溝	5.7	15.6	胴部側面8.4			12.8	ヘラ記号あり
39	"	"	"	" II区溝	3.7	11.9	胴部側面6.3			9.35	
40	蓋	"	"	" III区溝	20.0	50.2				45.0	
41	脚付皿	"	19	" N区溝	7.3	11.4			7.7	7.1	土師器
42	(?)	"	"	" III・N区					8.1		土師器
43	鉢	"	"	" III・N区	8.5	5.0			4.9		土師器
44	杯蓋	68	19	D-1号墳トレンチ	8.0	2.6					
45	長頸蓋	"	"	" 溝道部					9.9	17.2	
46	碗	"	"	D-2号墳玄室	10.3	5.0			6.2		
47	長頸蓋	"	"	" 玄室	10.8	24.1			11.1	16.2	
48	平瓶	"	"	" 玄室	4.6	7.9				10.0	
49	"	"	20	" 玄室	6.8	10.6				13.0	
50	"	"	"	" 玄室	8.1	13.6				15.2	
51	"	"	"	" 玄室	7.4	13.1				16.3	
52	蓋	"	"	" 馬蹄形溝	12.8	4.8					
53	蓋	"	20	" 馬蹄形溝							
54	(長頸)蓋	"	"	D区溝渠					10.3	16.7	
55	高杯	"	20	D-3号墳玄室	8.5	6.6			6.6		
56	長頸蓋	"	"	" 玄室	12.5						
57	杯身	"	"	D-5号墳I区	11.5	4.6	13.6	1.0			
58	平瓶	69	"	D-6号墳Bトレンチ	8.4	16.0				19.2	ヘラ記号あり
59	高杯	"	20	" N区	28.5						土師器
60	蓋	"	"	" 墓道	9.8	(3.3)					
61	皿	"	20	" 墓道	6.4	4.4			3.4	6.45	
62	蓋	"	"	D-7号墳墓道	10.4	3.5					
63	"	"	"	" 墓道	13.7	4.0					
64	高杯	"	"	" 墓道					8.7		
65	"	"	20	" Bトレンチ	11.5	9.5			10.4	11.5	
66	平瓶(?)	"	"	" 玄室					6.0	11.5	

No.	器 種	Fig	Pl No	出土地点	注 記 (cm)						備 考
					口 径	高 さ	全 径	口 上 高	口 径 差	口 径 差 大 小	
67	平瓶	69	20	D-7号墳Bトレンチ	7.4	13.0			9.1	14.9	
68	平瓶(?)	"	-	" 玄室					7.2		
69	壺(?)	"	-	" Bトレンチ					9.5		
70	杯蓋	"	-	D-8号墳Bトレンチ	9.1	2.9	11.3	0.45			
71	"	"	-	" 溝	8.2	3.0	10.0	0.2			
72	"	"	-	" 溝	8.8	(2.6)	12.1	0.7			
73	杯	"	-	" 溝	7.4	2.8			4.6		
74	甕	"	-	" 溝	41.9						
75	杯蓋	"	-	D-9号墳トレンチ	5.8	(2.4)	7.6	0.1			
76	高杯	"	20	D-10号墳玄室	8.8	8.5			7.5		
77	皿	"	"	" 玄室	10.9	10.7			9.2		
78	平瓶	"	"	" 玄室	6.2	13.5			7.2	15.5	
79	"	"	"	" 玄室	5.8	10.1			5.4	12.9	
80	"	"	"	" 玄室	3.9	9.5			9.4		
81	"	70	"	D-11号墳玄室	7.1	13.1			15.3		
82		"	21	D-12号墳玄室	9.7	2.4	11.8	0.45			
83	杯蓋	"	"	" 墓道	10.7	1.7	12.8	0.2			ヘラ記号
84	平瓶	"	-	" 墓道					4.7	11.0	
85	壺	"	-	" 墓道						20.3	
86	横瓶	"	-	" 墓道	10.8	32.4	胴部側面29.7			38.3	
87	平瓶	"	21	" 玄室	7.4	14.9			7.4	15.55	
88	甕	"	-	" 表土	12.8						
89	高杯	"	-	" 墓道	13.9						
90	"	"	-	" 墓道					6.9		
91	甕	"	-	E-3号墳溝	19.3						
92	長頸壺	"	21	F-1号墳墓道	12.2	20.1			11.0	16.0	
93	杯蓋	71	"	F-4号墳墓道	14.4	2.7		0.45			
94	"	"	-	" 墓道	15.1	(3.2)		0.6			
95	"	"	-	" 墓道	15.3	4.1		0.6			
96	碗	"	-	" 墓道	14.0						
97	"	"	-	" 墓道	15.8						
98	"	"	21	" 玄室	13.3	5.4			8.3		
99	高杯	"	-	" 墓道	8.7	7.0			6.9		

No.	器 種	Fig	Pl No	出土地点	径 量 (cm)						備 考
					口 径	高 寸	全 径	口 径	全 径	口 径	
100	平版	71	21	F-4号墳玄室					4.2	11.35	
101	長頸壺	"	"	" 玄室	9.5						
102	甕(?)	"	-	" 墓道					21.8		
103	"	"	-	" 墓道					13.7		
104	甕	"	-	G-2号墳墓道					5.3		
105	長頸壺	"	-	" 玄室					11.3	17.0	
106	壺	"	21	" 墓道	14.7	18.5				21.0	
107	甕	72	-	" 墓道	19.0						
108	脚付碗	"	-	" 墓道					10.4		土師器
109	碗	"	21	" 墓道	11.8	4.3					土師器破片あり
110	皿	"	-	" 墓道	15.8	3.5					土師器破片あり
111	皿	"	-	" 墓道	16.5	3.45					土師器破片あり
112	碗	"	-	" 墓道	14.7	6.35					土師器破片あり
113	脚付碗	"	-	" 墓道	17.2	7.2			9.8		土師器
114	高杯	"	-	G-3号墳墓道					12.0		土師器
115	埴	"	-	G-5号墳玄室	4.8	5.1			6.5	8.8	
116	"	"	-	" 玄室	4.8	5.3			6.6	9.3	
117	高杯	"	21	H-2号墳玄室	8.2	7.4	7.8	2.4	6.8		
118	長頸壺	"	"	" 玄室					10.9	16.5	
119	"	"	"	" 玄室	14.0	25.5			11.6	20.0	
120	"	"	"	H-3号墳墓道					11.1	18.0	
121	平版	"	22	H-4号墳墓道	6.5	9.75			7.5	14.0	
122	高杯	"	-	" 墓道							土師器
123	長頸壺	73	22	H-6号墳玄室					9.8	17.4	
124	"	"	"	" 玄室	6.6	17.7			8.5	13.0	
125	"	"	"	" 玄室	11.7	(24.4)			10.2	17.9	
126	高杯	"	-	I-1号墳墳底	22.0		杯部深8.7				土師器 127の量に使用
127	甕	"	-	" 墳底	14.6	20.95				21.0	土師器

V ま と め

前後2次の調査において39基に及ぶ古墳群と小石室、火葬墓、窯跡、遺物埋納遺構が発掘され、多くの資料が得られた。本遺跡は5世紀から8世紀という時間中の中で墓地を主体としており、それは古墳、小石室、火葬墓という形となっている。ここでは古地のあり方から標高82mを頂点として、4本の小丘陵の尾根線とその南側斜面に分布する9群の古墳群と火葬墓、さらにその他の遺構について、立地、築造年代、群構成等をのべてまとめたい。

墓地 古墳を主体とする本遺跡は古地、埋葬形態、石室構造から見て、3期に大きく分類できる。

I期 A・B・C・E・I群の11基の古墳は丘陵尾根線上に占拠しており、ほぼ5世期中頃から6世紀前半にかけて連続して築造されている。墳丘の残りが悪く、規模を明確にできないがC-2、C-5号墳の墳丘高は1m程度である他は、明確な盛土を持たず調査前の観察でも自然丘陵となっていた。このことは、C-2・C-5号墳には盛土があることから、他の古墳は石室天井石を被うほどの低平なものと考えたい。また墳丘規模も小さくC-1号墳の径4～5mからC-5号墳の径10mの間である。内部主体は全てほぼ西に開口する。竪穴系横口式石室を主体としてその前後に小型竪穴式石室と広義の竪穴系横口式石室が加わる。遺物は鉄鏃と刀子が各墳に数点ずつと乏しく、C-5号墳のみに馬具が集中的に副葬されており、当該期の盟主的位置を占めるのは明白である。C-5号墳を除くと各墳とも埋葬は1～2回程度と考えられる。

II期 D・F・G・H群の28基の古墳は大略7世紀初めから7世紀後半にかけて築造されており、一部は8世紀にまで追葬がおよぶ。各古墳は丘陵の南側斜面に占拠している。調査時には墳丘を認める古墳はなく、トレンチ調査により、天井石を被う程度の盛土を確認する程度であった。このことは古地が急傾斜の斜面となっていることから、等高線と直交するように石室掘り方を掘り、その深さは斜面の高い方においては掘り方の上端が天井石の高さにくるほどの深さとなっており、天井石を被った後はことさらに墳丘を高くする必要のなかったことに起因すると思われる。内部主体は全て単室の横穴式石室でほぼ南に開口する。袖石は持つものと持たないものがある。遺物はI期の古墳が石室外に土器が見い出されるのと対照的に、II期では石室内への副葬が顕著となっている。鉄器は鉄鏃、刀の武具と刀子、鉄斧の工具が主体を占めるが全体としては副葬品に乏しいようである。各支群は1つのまとまりとして1単位を構成するものと考えられる。この意味では、D群とF・G・H群とは対応すべき群構造と考えられる。石室構造と群については百田古墳群が本古墳と同時期であることから次の報告でまとめて述べたい。

III期 古墳という形での埋葬方法が終結して、しばらくの間をおいた後に火葬墓が1基営

まれる。この時期が8世紀後半である。この大葬墓を最後にして浦谷の丘陵は墓地としての役目を終える。

窯跡 W群中の南側斜面に1基所在する窯跡は単独であり、2回以上の操業を想定しながらも無遺物のため時期は明確にできないが、D-9号墳に先行しており、また東側500 mにはIV期の遺物の見られる木山窯跡群の存在からほぼ6世紀末から7世紀前後の築造と考えられる。おそらくは当初浦谷に窯を求めたが選地に失敗して、直後に木山の地に移ったのではないかと想定できる。元来、浦谷を墓域とする古代人にとっては、墓地として利用する以外の目的を持つ遺構を作り出すことは考えられない。このことからI期の墓地としての利用が途絶えて久しい後の、II期古墳群形成以前に窯がつくられたものと考えてよい。

焼土域 G群中に所在する4基の焼土域は古墳と同時期のものと考えられる。いずれも大きさ、平面形はさまざまである。共通する点は床面と壁面が焼けており、床面から数cmの厚さに炭化物が堆積することである。同様の遺構は百田古墳群にも見られる。(この古墳群では墳裾において追葬時に掘り込まれた事が明らかなものがある。)

焼土域中の炭化物の層からすると、小枝の大きさのものが殆どであり、丸太と思われる炭化物は検出していない。又、焼土域は各古墳に伴うものではなく、一ヶ所に集中していることを考え合わせると、各古墳の持つ埋葬儀礼の1つとして捉えることは難しく個別的理由によるものと考えられるが、近年の古墳の墳丘域外への調査範囲の拡大に伴う焼土域の検出例の増加を考えると、古墳の葬送儀礼の一つとして一考を要するものと思われる。

鉄滓埋納遺構 H-4号墳の墓道の位置に所在する埋甕は形態的には古墳群の築造の終わった後の8世紀代に考えられる。遺構は甕の中に鉄滓を1つ置き、土師器の皿で蓋をすることだったので、周囲には関連の遺構は見られなかった。この種の遺構は百田古墳群にも見られ、土域の中に鉄滓を数個置いた後、土師器の甕を被せている。焼土域、鉄滓埋納遺構に見る両古墳群の性格は似通っており、同一共同体、もしくは同一生業集団として捉えることができるであろう。しかし小谷地を挟んで同時的に形成される両古墳群はおそらく政治的規制の結果と考えられる。

ベンガラ埋納遺構 本来はI-1号墳の築造時期に伴うものと思われる。高杯の底部と体部の屈曲は5世紀前半の形態を持っており、勝浦10号墳下の住居址の高杯にも共通すると思われる。しかし、脚部を欠くことと、屈曲部の稜が弱くなって鋭さがなくなっており、より後出するものと考えられる。また、甕の形態も考え合わせると5世紀中頃から後半にかけての年代を考えたい。土師器の甕の中には1握りのベンガラが置かれており、I-1号墳石室内にベンガラが塗布されていることと合わせると塗布の残料ベンガラを追葬を考えて捨てることなく埋めこんだものと考えられる。このことより推定するならばI-1号墳は追葬がなかったか、もしくは埋納したベンガラを使用しての追葬は行なわなかったものと考えられよう。

I 期の石室構造について

A・B・C・E・I 群に所在する古墳の石室は、その構造が一連の流れをもつものとして捉えることができる。ここでは本遺跡における竪穴系横口式石室の生成と発展について述べるだけにとどめたい。5 群の11基の古墳からなる I 期の石室形態を大きく 4 類に分けて石室の細部を述べ、築造年代とも合わせて検討したい。IV 類については石室構造が III 類から連続する構造としてとらえることができ、さらに IV 類に後続する石室は本遺跡にはなく、このことは他の遺跡¹²³についても言える。ここでは竪穴系横口式石室の範疇としておきたい。

I 類 (E-2 号墳)

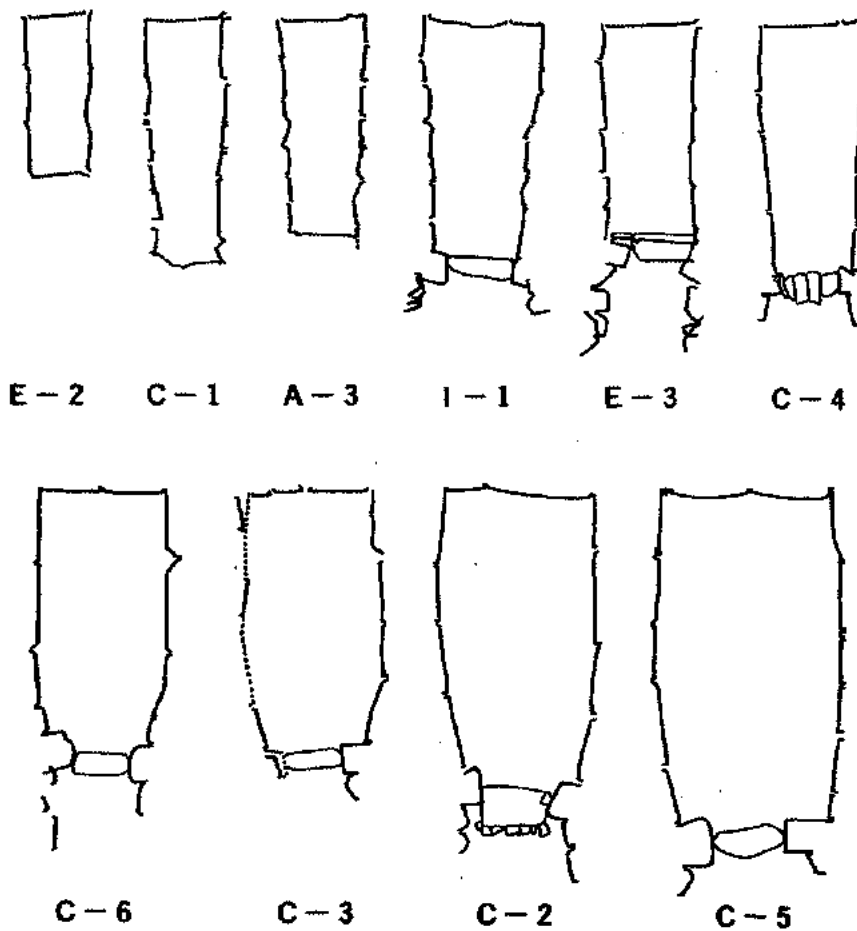


Fig 81 石室平面形の比較 (1/60)

石棺を基本形態とした小型壱穴式石室である。腰石は板状石を石棺の形態に並べており、腰石上には塊石を利用している。ベンガラの使用は認められなかった。

Ⅱ類 (C-1・A-3・B-1号墳)

無袖型の石室形態に墓道を付設するものである。

Ⅱa類 (C-1号墳)

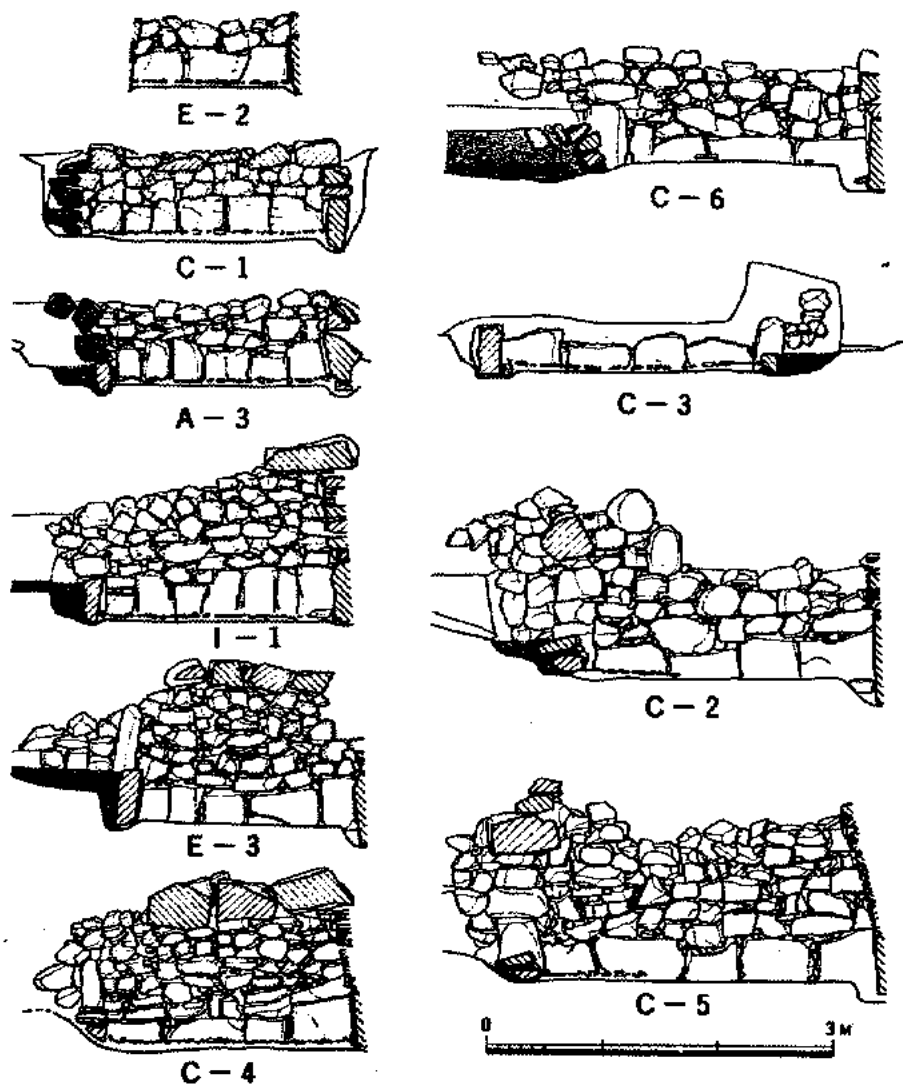


Fig 82 石室側壁の比較 (1/60)

長方形掘り方の中に石室を収め、地山床石から60cmの高さに墓道らしき段をつくる。横口部の巾がせまい羽子板状の平面形をしている。3壁の腰石はⅠ類と同様の石材の使い方であり、腰石上の石積みも類似する。石材間には小礫を使った目張りがある。横口部の構造に特徴があり、基部に腰石をおかずに、塊石を2石横に並べて柵状の構造として、その上に4段の石積みを行って閉塞していることである。最上部の閉塞石はやや大ぶりの平石を天井石と側面を合わせるようになっている。横口部は構造的には明らかに無袖型の石室形態をもつが、天井石と地山掘り方との空間は狭く、追葬を可能とする空間とはなり得ない。この石室は東宮ノ尾5号墳にも認められるが、腰石の有無と石室高に違いがある。報告書では5世紀後半と報告されている。

Ⅱb類 (A-3・B-1号墳)

B-1号墳については残りが悪いが、同類に含まれるものと言える。A-3号墳は無袖型の石室に段をもって墓道を付設するものである。石室平面形は羽子板状をなす。3壁の腰石の石材は厚手となる。腰石から上はⅡa類同様の積み方である。横口部は腰石と同じ石材を横置して柵石としている。閉塞は柵石上で行われ、2石を横長に2段置き、各段の外側には1石づつをもって控えとしている。柵石上面は墓道の床面と同レベルとなり、墓道の床面は石室へ向かって下向の傾斜をもつ。石室内にはベンガラを認めることはできなかった。

Ⅲ類 (I-1・E-3・C-4号墳)

袖石を横口部にもち、横口前面に貼石状の前庭部をつくり、さらに墓道を付設する構造である。

Ⅲa類 (I-1号墳)

玄室平面形は羽子板状となり、腰石は3壁とも板状石を使い石棺と同様の構造である。腰石上には塊石を積みあげて、石材間には目張りを行っている。横口部の構造は、2石の腰石のうちの小ぶりの石材の上部に塊石を4段積みあげて片袖を装っている。柵石は腰石と同様の置き方をしている。柵石上面と墓道の床面は同レベルである。前庭部は基部の石が両側壁とも腰石上1段目の石と同レベルから始まって1列つくられている。閉塞はA-3号墳に類似する。

Ⅲb類 (E-3号墳)

玄室平面形は長方形に近い。腰石の使い方はI-1号墳に似るがやや大ぶりとなる。腰石上には塊石を積みあげ石材間には小礫で目張りしている。横口部は腰石と同様の石材を使って2石を並べて柵石としている。袖石は長めの板状石を基部のレベルが柵石の中位にくるようにして玄室に倒れかけるように置いており、前庭部の両側壁石積みは袖石の安定を保つための構造とも見てとれるが、I-1号墳よりやや下位から積みあげている。柵石の上面は墓道床面よりやや高くなるが、この段は埋土して床面の高さを柵石上面に合わせたものと考えられる。閉塞は、板石を1枚使って、柵石から墓道より立てられている。

Ⅲc類 (C-4号墳)

玄室平面形は羽子板状となる。腰石は板状石を使う。腰石上は塊石を積みあげて石材間は小礫をもって目張りをしている。横口部は小ぶりの石材を立て両袖としている。袖石の上面は玄室高の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{2}{3}$ の高さである。裾石は下部に平石を横置き、上部は5石の小平石を並列している。横口部前面の石積みは袖石の中位に基部を置いて1列3段の塊石が積まれている。閉塞は裾石上に塊石を積みあげている。本石室からは2体の人骨が出土し、追葬であることがわかった。墓道の構造については不明である。

Ⅳ類 (C-6・C-3・C-2・C-5号墳)

両袖式の単室構造で、前壁構造をもち、前庭部と墓道が付設するものをいう。

Ⅳa類 (C-6・C-3号墳)

破壊を受けているが前壁構造をもつものと思われ、Ⅲ類に比べて玄室が広がる。玄室平面形は長方形であるが横口部側で急に狭くなる形態である。腰石は板状石を横長に利用しているのが目立つ。腰石下に根石を使い出すのはこの類からであり、玄室の拡大に伴うものと考えられる。腰石上には塊石を使った石積みとなるがⅢ類に比べるとやや大ぶりとなってくる。石材間には小礫による目張りが見られる。横口部には両袖石が立ち、袖石上面の高さは横口高の $\frac{1}{2}$ である。袖石間には平石を使って横置き、C-6号墳では上部に2段の石材をのせ裾石としている。横口部前面には左右側壁の基部が袖石の中位にくるレベルから1列数段積みあげており貼石に近い構造となっている。墓道は玄室地山床面から小さな段をつくって付設されている。C-6号墳は玄室と墓道の床面レベルは同じであるが石室構築時には裾石を地山から45cm積みあげて裾石前面にも裾石上面と同じようなレベルに2列の石材を置き、墓道へむかって土を埋めて地山より高いレベルの墓道をつくりあげている。この種構造をつくったのは、C-6号墳が尾根頂部に立地することからの地形的制約に対応するためのものと考えられる。C-6号墳閉塞は2枚の板状石を裾石上に立てかけている。玄室壁面にはベンガラは認められない。

Ⅳb類 (C-2・C-5号墳)

Ⅳa類と同様の石室構造となるが、玄室床面積が広くなり、石材也大ぶりとなってくる。腰石下には根石を使っている。横口部は両袖の石材が立てられ、袖石上面の高さは横口部高の $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{2}{3}$ となる。袖石間には平石2石を横置きして裾石としている。横口部前面には側壁が前庭部基部から1～2列、8～9段積みあげられている。側壁の上面は裾石より上にくる。墓道は玄室へ向かって下向する傾斜をもって付設されている。

各型の位置づけはⅠ類が石棺を基本とした竪穴式石室、Ⅱ類は形態的機能的にも竪穴系横口式石室へ移行しきれない試行的段階、Ⅲ類は石棺系石室を素直に受容し、機能的にも竪穴系横口式石室を確立する段階、Ⅳ類は一応の形を整えた竪穴系横口式石室は定着し、追葬を前提とした石室空間をもちだす段階として捉えられる。

Tab 3 石室構造の比較

分類	占墳	横穴分類	石山分類	玄室長さ (m)				玄室長さ 推定値 (U.R. 2.50)	袖石	前庭石	前庭部 構築	墓道	前庭 構造	前庭石	追分	ベンガラ
				巾	長	横口中	石室高									
I	E-2	-	-	0.48 ↓ 0.54	1.41	-	0.65	6	-	-	-	-	-	-	×	
II	a	C-1	II b	A	0.52 ↓ 0.65	2.07 ↓ 2.16	0.52	1.00	9	×	地石・欄石状	×	○?	×	地石	×
	b	A-3	II a	A	0.55 ↓ 0.75	1.86 ↓ 1.94	0.55	0.8	8	×	廻り込み内・ 板状石 敷位	×	○	×	地石	○
	b	B-1	II a	A	0.80 ↓ 1.0	2.05? ↓ 2.07	0.6?	-	8.5?	×	地山床面上・ 平石 敷位	×	○	×	-	?
III	a	I-1	III a?	C	0.77 ↓ 1.02	2.02 ↓ 2.07	0.56	1.25	8.5	○	廻り込み内・ 板状石 敷位	×	○	×	地石	×
	b	E-3	III a?	C	0.76 ↓ 0.82	1.87 ↓ 1.93	0.49	1.05	8	○	廻り込み内・ 板状石 敷位	○	○	×	板状石	?
	c	C-4	III a	B?	0.64 ↓ 0.89	2.17 ↓ 2.21	0.47	1.00	9	○	地山床面上・ 平石 敷位	○	○?	×	地石	○
IV	a	C-3	III a	C	0.85 ↓ 1.16	2.21 ↓ 2.24	0.53	-	9	○	地山床面上・ 平石 敷位	○	○	○?	-	?
	a	C-6	III a	C	0.87 ↓ 1.11	2.10 ↓ 2.21	0.51	0.9+a	9	○	地山床面上・ 平石 敷位	○	○	○?	板状石	?
	b	C-2	III a	C	0.99 ↓ 1.34	2.44 ↓ 2.50	0.57	1.6+a	10	○	地山床面上・ 平石 敷位	○	○	○	板状石	?
	b	C-5	III a	C	1.29 ↓ 1.61	2.82 ↓ 2.83	0.61	1.6+a	12	○	地山床面上・ 平石 敷位	○	○	○	板状石	○

備考 <横穴氏による横口部の分類>

I.....横口部は小口壁の中位に下底面をおき

いわゆる棚状構造をとる

II.....横口部に袖石を配置せず無袖型プラン
の石室をいふ

{ a.....板敷を有する

{ b.....板敷をもたない

III.....横口部に袖石を配置する石室

{ a.....板敷を有する

{ b.....板敷をもたない

<石山氏による横口部前庭構造の分類>

A.....前庭部側壁が構築されず横口前庭に直接墓道が
付設される

B.....前庭側壁が構築される

C.....前庭側壁に続いて墓道が付加される

各期の年代については出土遺物を検討するとC-2号墳溝出土の上師器の高杯は6世紀代に、C-3号墳溝出土の須恵器鉢は陶邑古窯址群TK23とMT15の間にくるものと思われ、6世紀初めに、C-5号墳溝出土の須恵器杯群I類はTK47からMT15にあたると思われることから、6世紀前半代に、1-1号墳墳裾の上師器は5世紀後半代にくるものと考えられる。以上からⅢ類を5世紀後半から末に、Ⅳ類を6世紀初頭～前半に位置づけたい。Ⅱ類については後述する理由からⅢ類と併行する時期を与え、Ⅰ類は先行する時期として5世紀中頃～後半の年代が与えられるであろう。小形竪穴式石室から前壁構造をもつ竪穴系横口式石室はⅠ～Ⅳ類へ連続するものと思われるが、Ⅱ類石室はⅢ類に先行するものではなく、むしろ小形竪穴式石室から竪穴系横口式石室への試行の段階として表われた形態としてとらえたい。このことからⅡa～Ⅱb類は時間的の中を考えながらもほぼ同時期に築造されたものと考えたい。以上の年代観と立地を次の図により表わすと

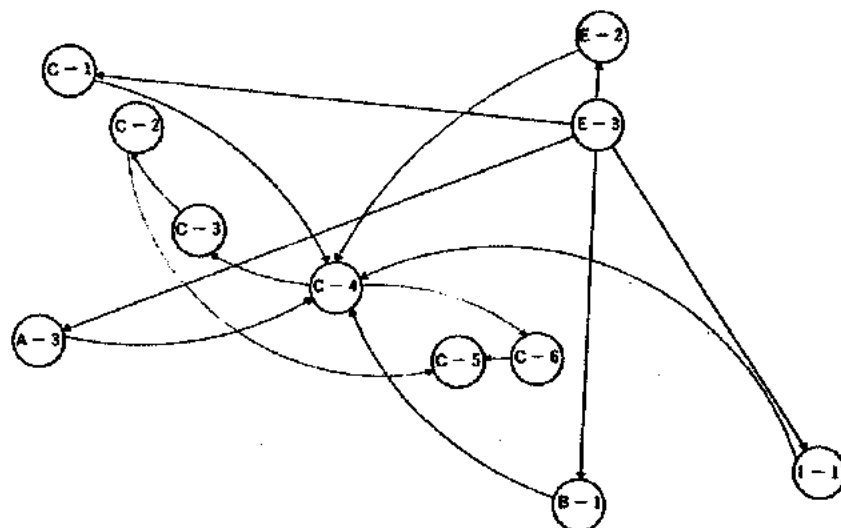


Fig 83 I期古墳群の形成と過程

となる。E群に始まるⅠ類は、Ⅱ類になると5ヶ所に場所を移して新たな石室形態の確立をもとめて試行する。Ⅲc類の時期になると竪穴系横口式石室は基本形をととのえて、C群の中に収束される。Ⅳ類の時期に2つに分かれ、石室は大形してくる。最後にC-5号墳の築造によってI期古墳群はまとまって当該期の築造を終える。C-5号墳は当該時期古墳群の盟主的位ををしめており、副葬品も他の古墳に卓越している。C-5号墳は6世紀前半で、筑紫般井の

反乱の時期にあたる。このことは副葬品中に伽倻的要素が見られることから政治的規制の中でC-5号墳が築造され、C-5号墳を最後に1期古墳が終息することは今後の北部九州に見られる当該期古墳の生成と展開に課題をのこしている。

1期古墳群の成立と展開については、竪穴系横口式石室の発生を石棺系小型竪穴式石室にもとめたい。

註1. 1980・1981年調査。古墳25基、小石室9基が発掘され2つの斜面に分布し、浦谷古墳群に先行する時期に最初の築造が行われている。鉄滓の副葬及び埋納が見られた。

2. 石山 勲「新原・奴山古墳群」福岡県文化財調査報告書第54集 福岡県教育委員会 1977

3. 宗像市内における城ヶ谷・久戸・相原・稲元古墳群の発掘調査では竪穴系横口式石室に連続する石室形態は認められず、次の古墳の築造までに一定の空白がある。

4. 山中英彦「東宮ノ尾古墳群」北九州市文化財調査報告書第14集 北九州市教育委員会 1974

VI 浦谷古墳群出土人骨について

九州大学 解剖学教室 永 井 昌 文

ここに報告するのは、標記のうちC-4号墳の竪穴系横口式といわれる石室中より出土した2体の人骨である。この2体の被葬者が同時埋葬（合葬）であるか異時埋葬（追葬）であるかは、ほとんど頭部のみに限られた残存状況では、必ずしも明らかにしえないが、今後の参考のために出土状況を顧慮した人骨の所見を下記する。

C-4-1号人骨 男性、熟年

出土状況および保存状態：頭骨は東側にあたる奥壁下中央やや南寄りに存在した。右側頭部を下にしており、該部は腐蝕が著しく約10cm四方の欠損を来している。従って、自然の腐朽位から「坐り」の良い横位に転位して久しいものと考えられる。顔面西寄りに右鎖骨、左尺骨上半、下顎骨などがあるが、この附近に落石があったと見え左下顎枝は破折して附近に飛び、その断端は比較的新しい。これら一塊の骨からやや右（北側）に離れ後記2号人骨の右下顎角上に、その大きさ性状から見て、この1号人骨のものと判断される右肩甲棘の基部が乗って出土している。その他は、左大腿骨の骨体部が伸展埋葬時の自然な位置に出土しているが、これと対をなすと思われる右大腿骨体は、50cmほど離れて北壁下に出土し不自然である。後者は2号人骨所屬とも考えられるが、その残存の性状から見て1号所屬としたほうがより妥当と判断した。

なお、頭骨には前記の右側頭部の大きな腐蝕の他に左顔面の処々に小欠損を見る。これも左下顎枝の破折と同様の原因によるものであろう。さらに、頭骨全体の色調は暗い黄褐色であるが、前頭部には茶褐色の濃い部分があり、顔面に点々と残る丹の痕跡から推すと、この部分にも顔料の附着が著しかったのではないかと思う。

残存歯式は下記のとおりである。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	—	—	7	—
8	●	6	5	4	3	2	●	●	2	3	4	5	○	●	○

○—空歯槽、歯牙亡失 ●—歯槽閉鎖 ————歯槽欠損

推定年齢： 熟年。歯牙の咬耗度は Martin 氏の3度ないし4度である。縫合の癒合は矢状・人字の両縫合に進行し、冠状縫合ではわずかである。従って熟年でも初期で40代の初めと推定した。

推定性別： 男性。骨盤が残っていないので、頭骨のみから推定せざるをえない。比較的大きく頑強な感を与える頭骨である。眉弓・乳様突起はよく発達し、眼窩上縁は厚く、頬骨の前頭突起後縁も後方へ強く突出し、下顎骨は頑強である。いずれの観点からも男性としての特徴

をよく備えている。大腿骨骨体部の太さも、現代人男性の平均以上を示しそれを裏づけている。

頭形： 長幅指数74.1で中頭形に近い長頭である。

推定身長： 不明。推定根拠となる完全な四肢骨を欠く。

抜歯風習の痕跡： 下顎の両側中切歯が無く、相応の間隙を残して歯槽が閉鎖しているので抜歯を思わせるが、対向する上顎中切歯の切縁には若年期における下顎切歯の抜去を思わせる磨耗状況が見られない。もしそうとすれば、その死亡年齢から見て、同歯の切縁近心部は遠心部にくらべ磨耗が少ないために下方に突出するような所見がある筈である。一方、下顎臼歯部には歯槽膿瘍の病像が見られるので、この前歯部歯槽の閉鎖も歯疾患による可能性が高く、若年期で無く比較的新しい病変と思われる。

特記所見： ただこの人骨の上下歯列には、古代人にま見られる異常な磨耗がある。すなわち、上下ともに側切歯から小臼歯にわたって磨耗が舌側より唇側に著しい。従って咬合面が唇側へ向って傾斜して（開いて）いる。また歯列全体の咬合面は近遠心方向に起伏を描き、上顎では大歯・第1小臼歯の磨耗が特に著しい。下顎歯列の咬合面は上顎のそれに対応した起伏を示すが、右側では対応し切れぬ如く、噛み合せた場合、上顎との間に最大5mm幅の紡錘形の空隙が残る。左側にもそのような傾向が見られるが、右側ほどではない。この異常な磨耗は、この個体の生前における何らかの習癖を物語るものであろうが、どのようなものであったかは推測の域を出でないので、今は事実だけを記すにとどめたい。

C-4-2号人骨 男性、成年

出土状態および保存状態： この人骨は1号人骨にくらべて質量ともに保存状態は不良である。ほとんど頭骨片に限られ石室奥の東北隅より一塊として出土した。残存部分は次の通りである。すなわち、前縁部を欠く右頭頂骨、これと接続した後頭骨鱗部右半、顔面では眉間を中心とする小片、左上顎骨などである。下顎骨はあるが、処々に欠損があり、両側下顎角・下顎頭・筋突起さらに前歯槽部が腐蝕されている。その他には、右側頭骨、頭蓋底諸骨があるが、いずれも細片で腐朽が著しい。頭蓋 (Calvarium) は右側頭部を下に顔面を北壁に向け、横倒しになった状態で出土した。下顎骨は天地逆転し歯列を床につけていたので原埋葬位のままの出土状態とは言い難い。さらに特に注目すべきことは、本来、骨盤部にあるべき仙骨片がこの人骨の頭骨内より出土した。

骨全体の色調は1号人骨と同様であるが、前記した如く風化はより著しいので、丹の附着を認め難いが、辛うじて上顎切歯の歯根部にこれを見出した。

残存歯式は下記のとおりである。

- 7 6 - - 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
末 〇 6 5 - 3 - -	- 2 3 4 5 6 7 末

記号説明は1号と同じである。ただ「末」と記入した下顎右側智歯は未だ咬合面に達せず、

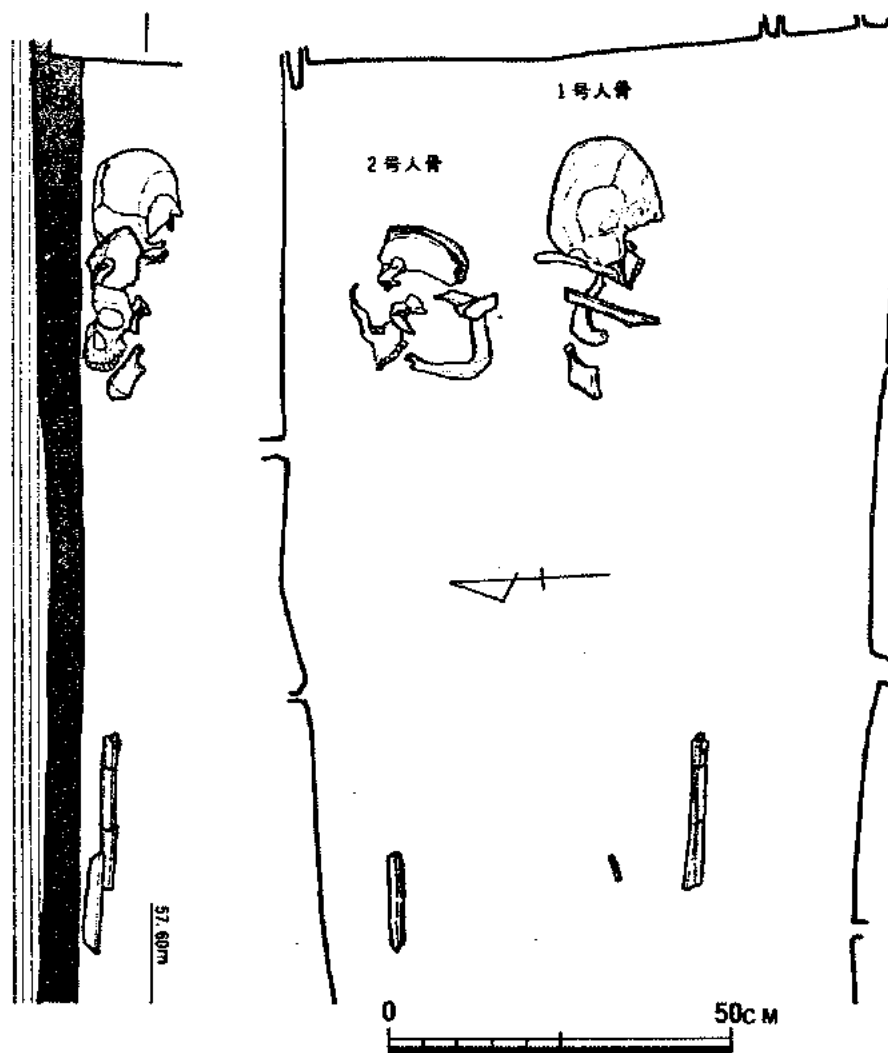


Fig 84 C-4号墳人骨実測図

左側のそれは歯胚の存在を思わせる腔所も見当らなかった。また上顎右側歯は遊離して採集されたものである。

推定年齢： 上・下顎の智歯はようやく咬合面に達したか達せぬかの段階で、他の歯の咬耗度は Martin 氏の 1 ないし 2 度である。残存する矢状・人字両縫合に癒合は見られない。また後頭骨基部は蝶形骨体と完全に骨結合を終っている。以上より成年それも 20 代の初めと推定し

た。

推定性別：この人骨は保存不良で確実な性別推定の根拠に乏しい。寛骨を欠き、頭骨も重要な指標となる部分が腐朽し去っている。ただ頭骨および下顎が男性なみに大きいことは十分察せられる。辛うじて残った右頭頂骨後縁で1-ast間径長(Martin氏計測番号30a₁)を測ると96mmあり、これは西南日本現代人男性の平均値('54、原田) 84.85 (n=107、 $\sigma=5.49$)に比べてもその最大値に近い値である。因みに1号人骨は95mm。従って、根拠は薄弱であるが女性とするよりもむしろ男性としたほうがより妥当であろう。なお眉弓の発達も男女いずれとも決めかねる程度のものである。

その他：頭形、推定身長などはすべて不明である。拔牙風習の痕跡は、下顎切歯々槽を欠くので明言出来ないが、上顎対向切歯の咬耗から見る限り、おそらく無いとしてよいであろう。

兩人骨に関する附記

はじめに記した如く、この同一石室内の兩人骨が合葬か追葬かは考古学上の墓制や族制に関連して興味の持たれるところであろう。従って以下この点に絞って人骨からえられる所見をまとめて考察してみよう。

先ず、兩人骨はともに男性である。ただ、性別推定の根拠が2号人骨では1号人骨におけるほど確実でない。一方、間接的に女性であることを示唆するような副葬品・着装品は伴出してない。

次に、推定年齢は1号人骨は40代の、2号人骨は20代の初めであり、両者の死亡年齢には約20年の開きがある。

出土状況は、1号人骨は一部に落石による攪乱はあるものの、概ね原埋葬位に近い配置で出土している。2号人骨には原埋葬後、骨の腐朽が進行した時期(少なくとも10年以上経過したと思われる)に二次的に動かされた形跡がある。その根拠となるのは骨盤を形成している仙骨の一部が頭蓋冠の中より出土したこと、および下顎が上下逆転していることである。さらに、頭骨の腐朽状態も異様である。すなわち、1号人骨のそれに見られるように、一般には墓床に接して下位にあった側の腐蝕の進行が著しいのに、2号人骨では両側頭部に、その下顎では上下両端に腐朽が著しい。これを説明するには、仰臥伸葬の姿勢での腐敗の進行とともに下顎は関節で外れて落下し、頭骨はより「坐」りの良い左側の側頭・後頭部を下にした位置に転位し、ともに床に接した部分で腐朽が進行した後、従って前記の如き相当年月が経過した後、人為的に動かされ、その後は新たに床に接した部分で腐朽が進行し、発掘調査されるに到ったと考えた方が良いのではなかろうか。

以上のような推察を進めると、結論的には先ず2号遺体が葬られ、腐朽が進行した段階で1号遺体を追葬するために奥の北東隅へ2号人骨を寄せたのではないかと推測が成り立つ。1号人骨の右肩甲骨片が2号人骨の下顎に乗って出土したこともこの推測を裏づける。

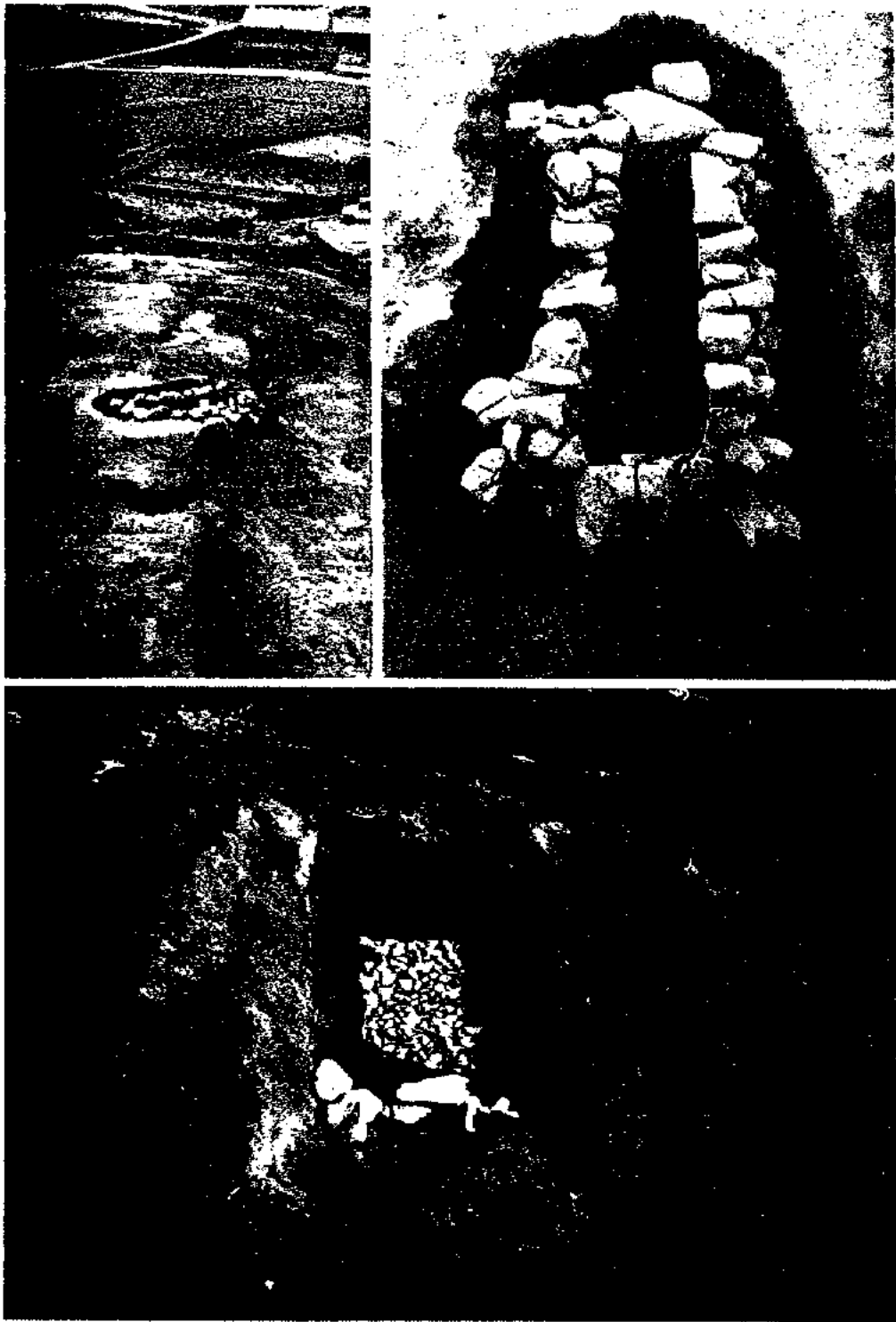
なお、両送葬間の時間的間隔が仮令10年以上でも、現代までの経過年数は凡そ1500年にもなるので、両遺体はこれまではほぼ同一条件で埋葬されていたと考えて良い。にも拘らず兩人骨の保存度には相違が見られる。これには1号遺骨のほうが若くて有機成分に富んでいたことも関係があるであろう。

さらに、この両男性が父子であったか、兄弟であったか、それとも身近な近縁者であったかなど種々の場合が考えられる。しかし、そのような族制を窺う上での分析にはこの古墳のもつ考古学的背景を多角度から検討することが必要であろう。

PLATES



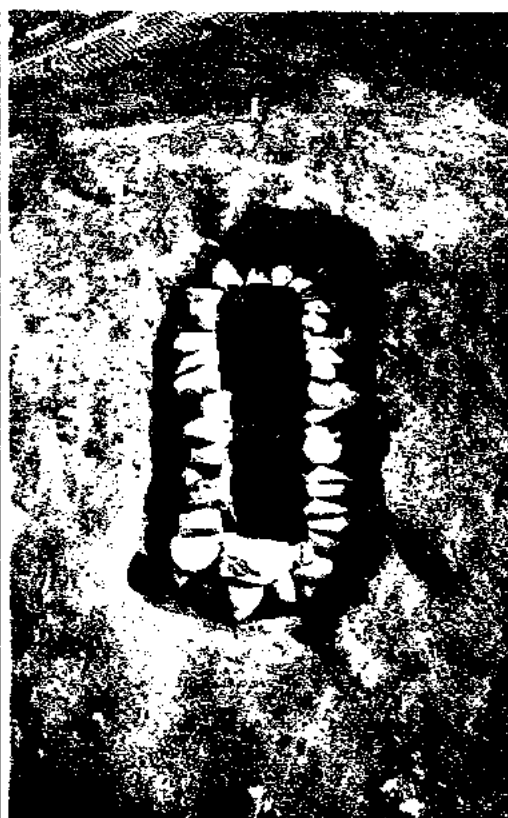
浦谷古墳群遠景（北から）



A・B群 ①A群全景(南から) ②A-3号墳石室(東から)
③B-1号墳全景(西から)



C 群全状 (南から)



C群 ①C-1号墳石室全景(西から)
③C-2号墳石室全景(西から)

②C-1号墳天井石除去後(西から)
④C-4号墳石室全景(西から)



C群 ①C-5号墳石室全景（西から）
③C-4号墳人骨出土状況

②C-5号墳鉄器出土状況
④C-6号墳石室全景（西から）



D群 ①調査前全景（東から）
②調査後全景（南から）



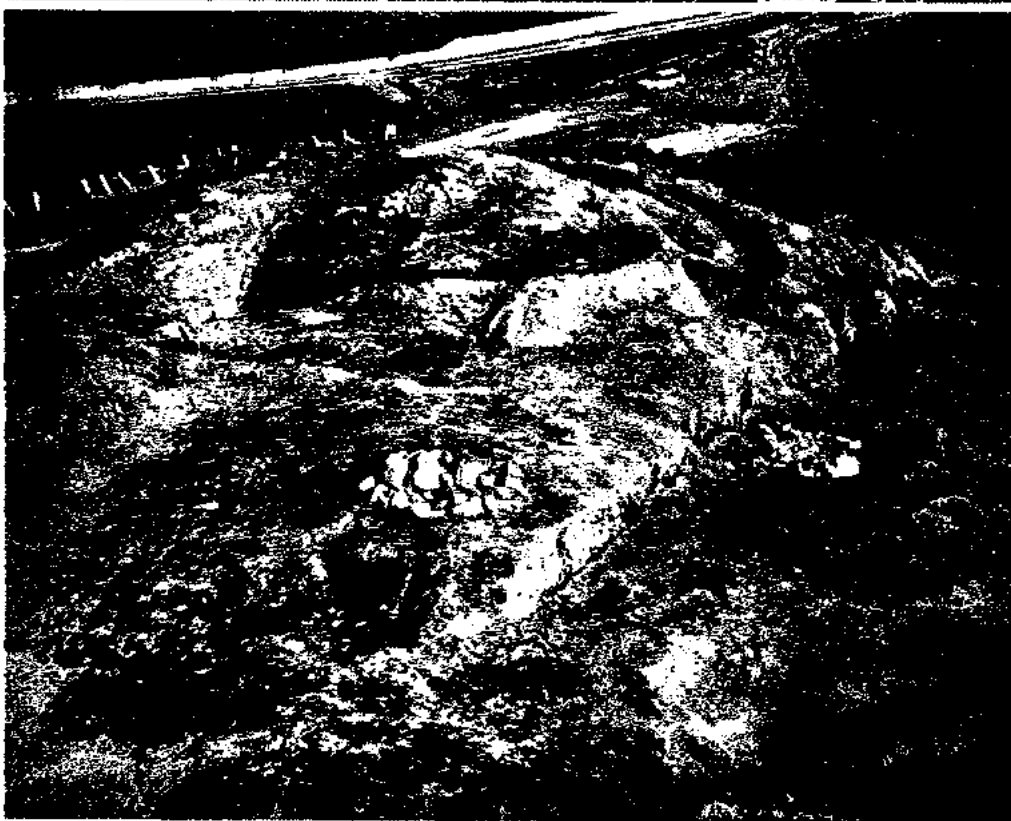
D群 ①D-1号墳石室全景(南から)
③D-2号墳石室全景(南から)
⑤D-3号墳石室全景(南から)

②D-1号墳土器出土状況
④D-2号墳遺物出土状況
⑥D-7号墳石室全景(南から)



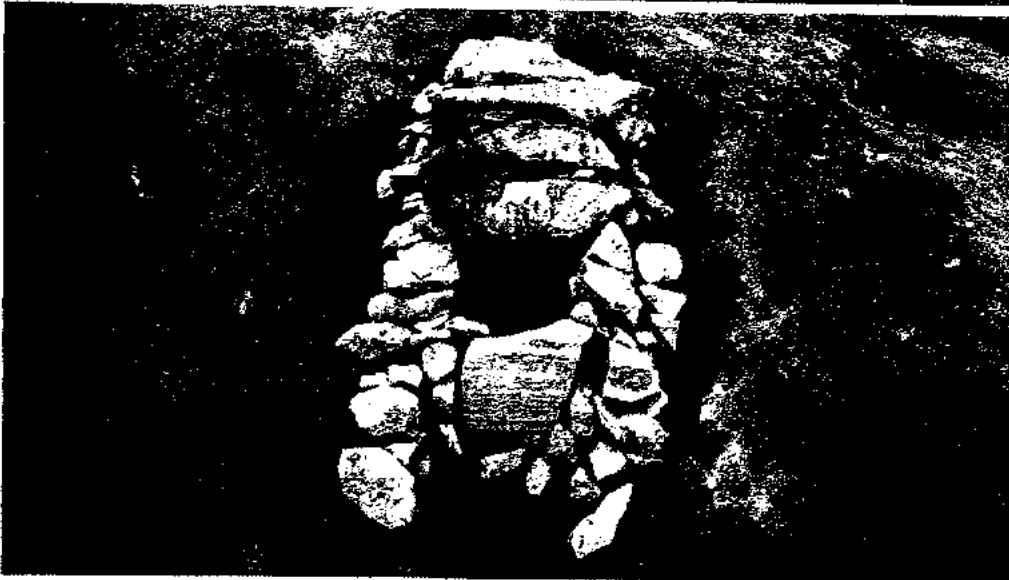
D群 ①D-8号墳調査跡全景(南から)
②D-9号墳石室全景(南から)
③D-12号墳石室全景(東から)

④D-8号墳石室近景
⑤D-10号墳石室近景
⑥D-12号墳遺物出土状況



E群 ①調査前全景（西から）

②調査後全景（西から）



E群 ①E-2号墳石室全貌（北から）
②E-2号墳天井石除去後（北から）
③E-3号墳石室全貌（西から）



F群 ①F群全景 (南から)
 ②F-2号墳石室全景 (南から)
 ③F-4号墳石室全景 (南から)



G群調査後全景（南から）



G群 ①G-2号墳石室全景(南から)
③G-4号墳石室全景(南から)

②G-3号墳石室全景(南から)
④G-5号墳石室全景(南から)

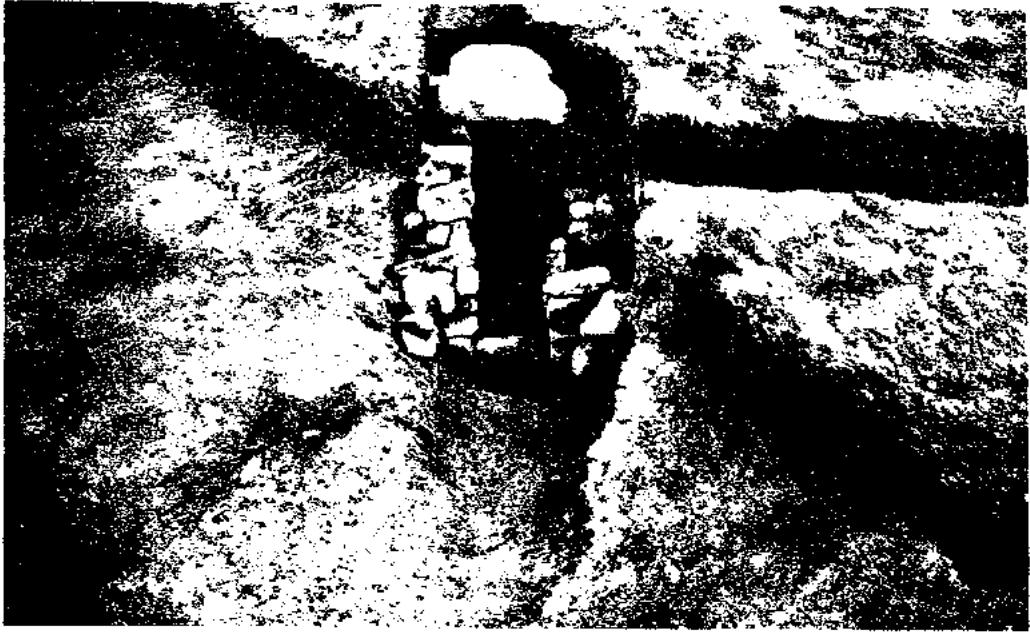


H群調査後全景（南から）



H群 ①H-2号墳石室全景(南から)
③H-4号墳石室全景(東から)

②H-3号墳石室全景(南から)
④H-6号墳石室全景(南から)



I 群 ① I-1 号墳石室全景（西から）
② I-1 号墳竈器出土状況
③ I-1 号墳竈器ベンガラ埋納遺構

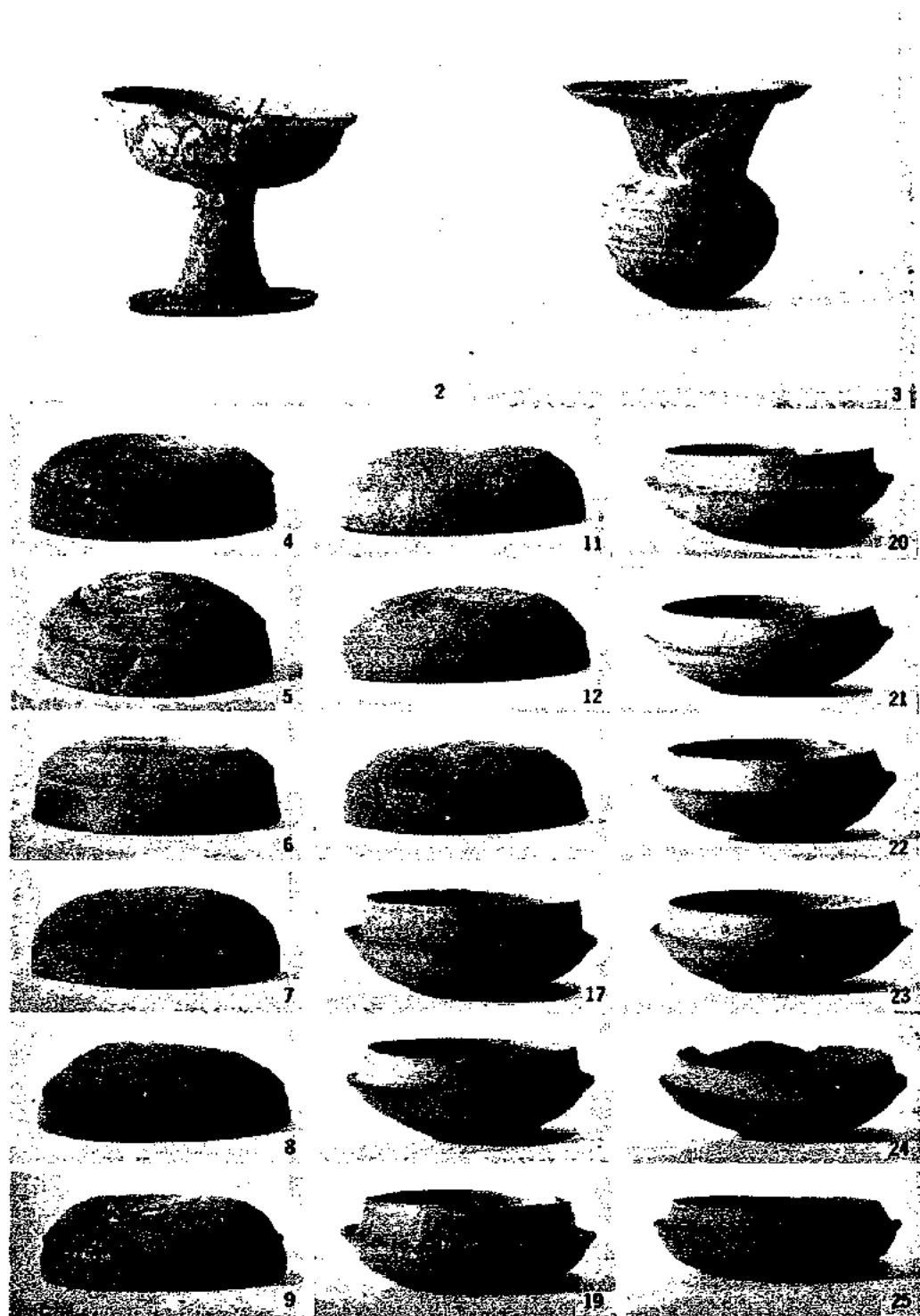


その他の遺構 ①窯跡土層断面（南から）

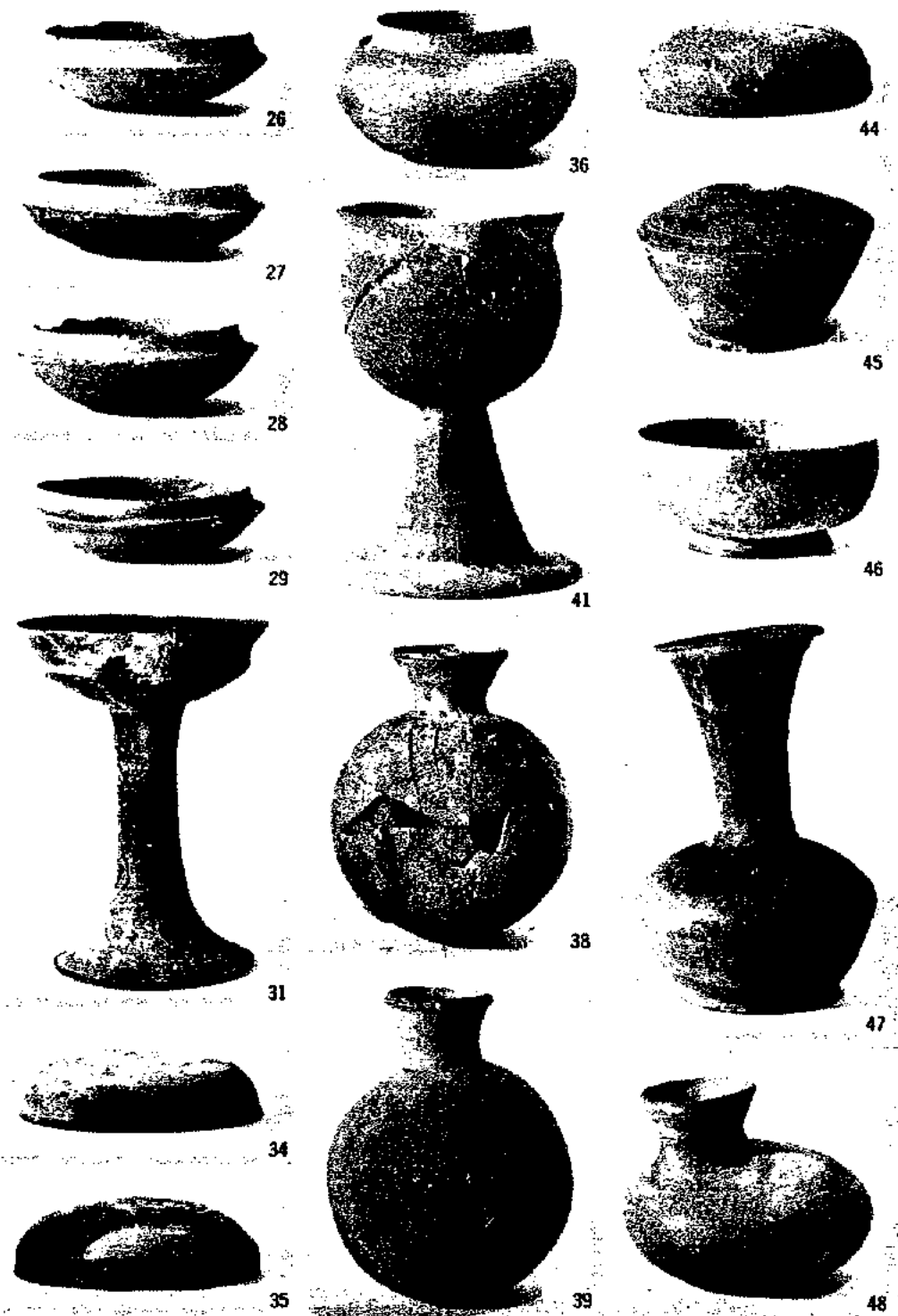
③H-4号墳墓道道内鉄滓埋納遺構

②窯跡全景

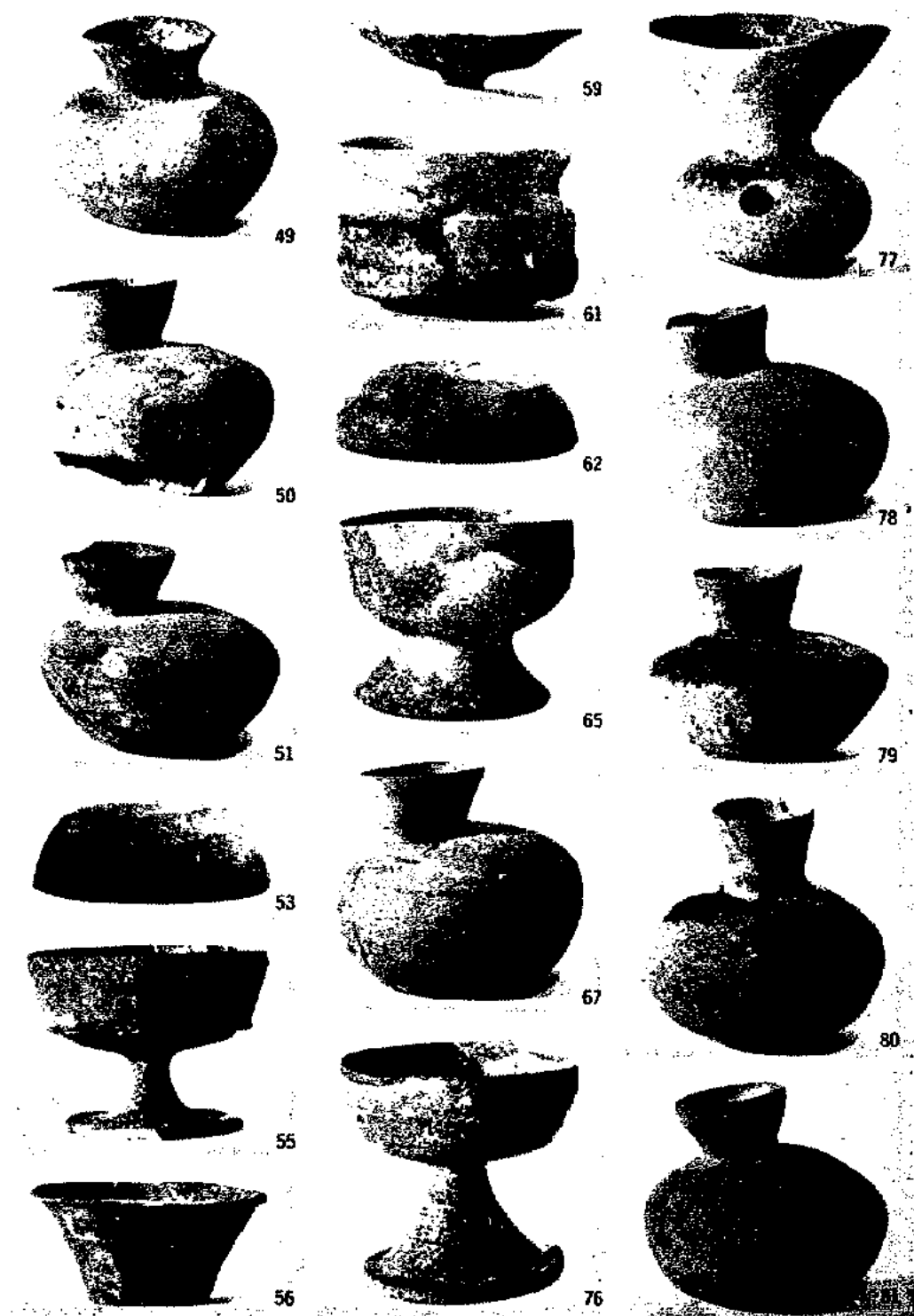
④火葬窯全景



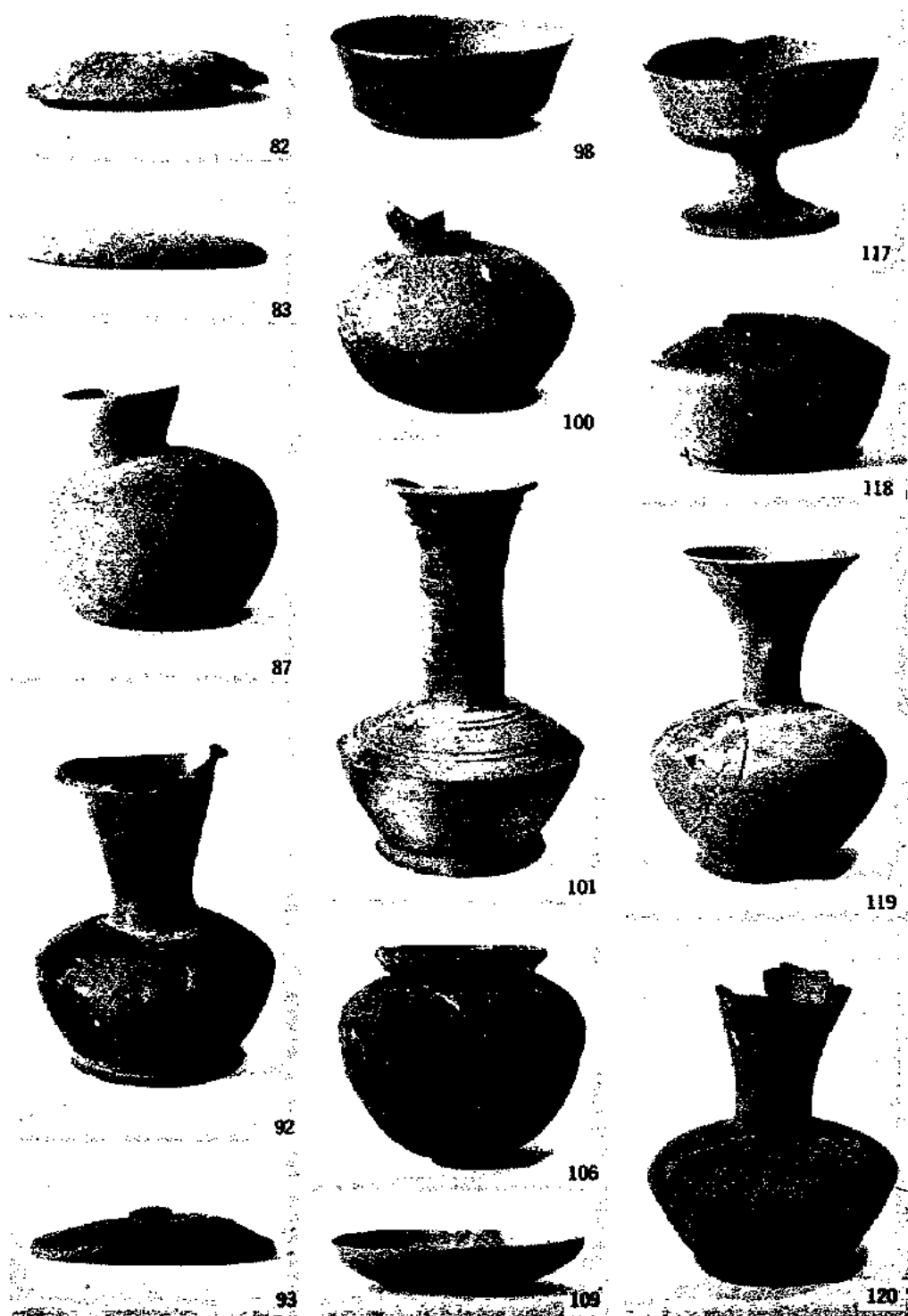
出土遺物 I (C-2・C-3・C-5 号坑)



出土遺物Ⅱ (C-5・D-2号地)



出土遺物Ⅲ (D-2・D-3・D-6・D-7・D-10・D-11号墳)



出土遺物Ⅳ (D-12・F-1・F-4・G-2・H-2・H-3号墳)



121



125



123



H・4 墓道埴輪壺

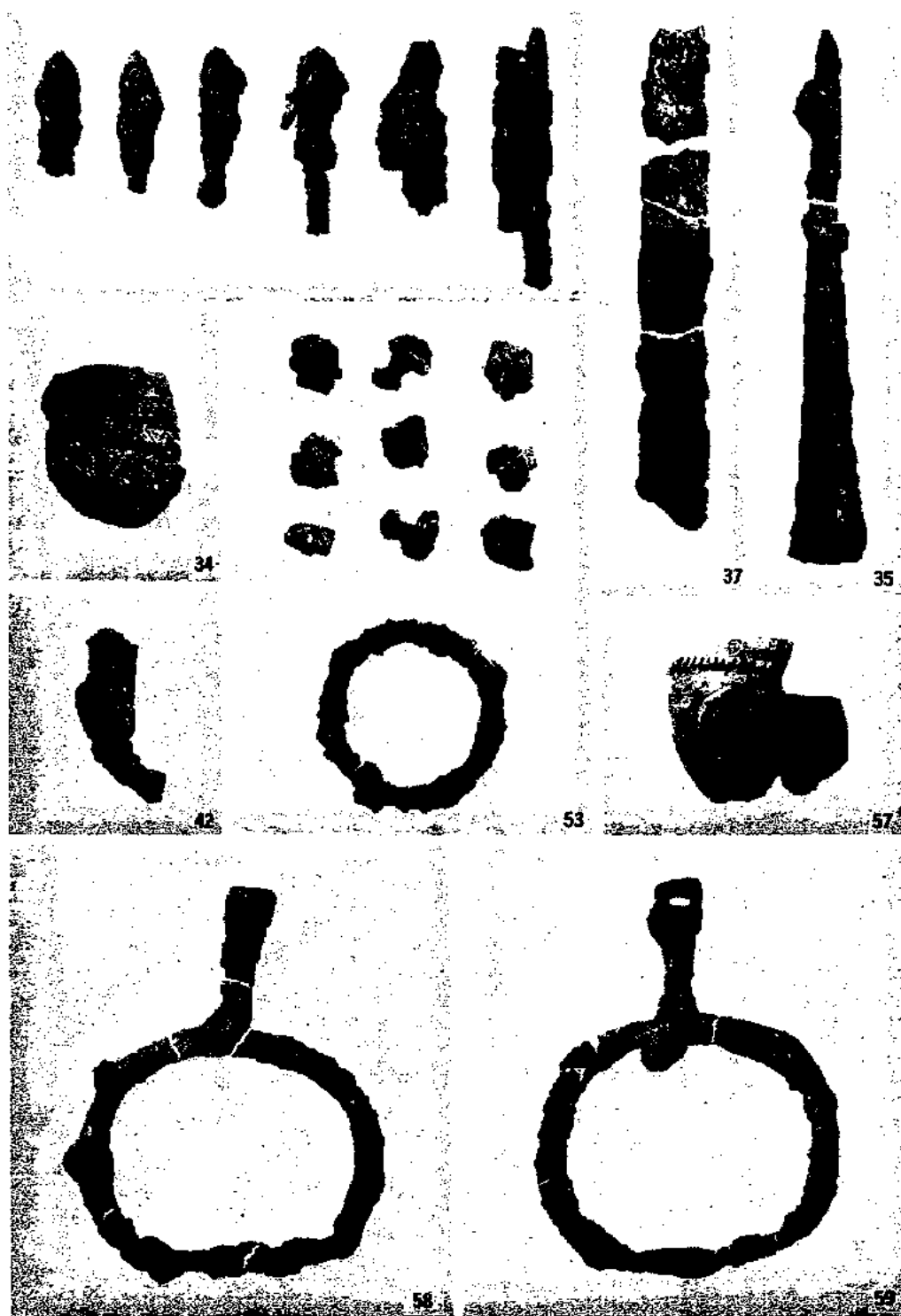


124



火葬墓

出土遺物V (H-4・H-6号墳・鉄滓埋納遺構・火葬墓)



出土遺物VI (C-5号墳)



C-4 号墳出土人骨 ①正面観
③上面観

②左側面観
④右側上下歯列の異常咬耗

浦谷古墳群 I

宗像市文化財調査報告書 第5集

1982年3月31日

発行 宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 釜瀬印刷
福岡県宗像市福元